
じょいふる

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じょいふる

【Nコード】

N1386F

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

佐久間風子は高校一年生。学校では、いじめられっ子だ。ある日、街でバッグを盗まれてしまう。取り返してくれたのはサッカー選手を自称する青年だった。ある日、風子はふとした気まぐれから、彼が出演している試合へと足を運ぶようになる。選手の頑張り、そしてスタジアムや、バイト先で出会う人々たち、彼らによって閉じこもっていた風子の心に少しずつ変化が起きていく。

第一章 本物のほうが空を飛べるだけマシかもね

それを見た瞬間、体が勝手に反応していた。

風子は両腕を高々とあげ、叫んでいた。

いったい自分はなにをいつているんだ。興奮のあまり、まるで言葉になっていない。

悠子が抱きついてきた。

後ろの席にいた木場直樹が、風子と悠子の体を抱きかかえた。そして、二人の頭をくしゃくしゃにかき回した。

風子は笑っていた。

天使も嫉妬しそうな、とろけるようなその笑顔を、スタジアムの熱気が風となってさらっていった。

第一章 本物のほうが空を飛べるだけマシかもね

1

F県野々部市の航空写真を数十年前と現在の物を二枚並べて見比べてみても、大きな変化を発見することは困難だろう。現在の写真をよく見ると、近代化の波に押されて駅周辺にはビルが増えているのが分かる。よく見てその程度の発見しか出来ず、どちらの航空写真を見せられたところで感想はさほど変わらなかっただろう。

田んぼばかりだね。

確かに、駅を中心とした建物の密集している地帯は若干の賑わいを感じさせてくれるものの、そこから少しだけ離れるともう周囲一面田園風景だ。その中に小さな住宅地が点在している。

そんな広大な田園地帯の中に、L字型の建物がある。大きな建物なのだろうが、周辺の土地があまりに広いので、よく分からない。

F県立野々部商業高等学校。

今年創立六十周年を迎えた、歴史のある学校である。
近くを田んぼに、遠くを山々に囲まれた、実にのどかな環境の中で、生徒らは勉学や運動に励んでいる。

【教育理念】

- 一 自立、自由の意味を学び、尊ぶ
- 二 自ら思考し、行動出来る

【校訓】

「責任」 自己の行いが周囲に与える重さを自覚する
「誠実」 他人を尊重し、丁寧に接する
「友愛」 他者の喜びを自分の喜びとし、他者の痛みを自分の痛みとする

商業高校だけあって、以前は二番目が「誠実」ではなく「商才」だったのだが、時代の流れというものの、そのような主張もどうかと保護者からの苦情があり変更をした経緯がある。

このような立派な主張を掲げてはいるものの、パンフレットや学校紹介のホームページに書く文句に利用する程度で、教師だってそらで覚えていやすい。

ましてや生徒が覚え、率先して実行していくはずもない。

「おい、クマ！」

一年B組の教室、後ろのドアが勢いよく開くが早いか、女子生徒のガラの悪い叫び声。遠金恵理香が立っていた。不良上級生とも繋がりがあるために、男子も恐れる存在だ。長い黒髪。肌も黒っぽい。化粧なのか地肌なのかがよく分からない。彼女のすぐ後ろには、取り巻きである谷澤達子と矢野舞子の姿。

教卓のそばで、大橋道矢にジュース缶を渡していた一人の女子生徒が、その声にびっくりと肩をふるわせた。振り返り、出入り口に立つ三人の姿を確認すると、まるで小間使いのように小走りで彼女ら

のほうへ駆け寄っていく。

三人の前に立つ。

「……なにか」

クマと呼ばれた女子生徒は、うつむいたまま上目遣いでぼそぼそと呟く。

「なにかじゃねえよ。なんだよクマ、この靴は！」

つき出された靴を受け取る。遠金恵理香の通学靴だ。

磨いたばかりといった光沢を放っているが、うつすらと土が付いたままの箇所があった。といっても、ほんの二、三ミリくらいの、点のようなものなのだが。

「すみません！」

女子生徒は突然土下座をし、頭を深く下げた。

「す、すぐ、磨き直しますんで」

さらに頭を下げる。もう床と額がくつつきそうだ。

「謝ったり、やり直したりするくらいなら、最初から手を抜くんじやねえよ、馬鹿」

「ほんとう、すみませんです。気を付けるんで、許してください」

とうとう床と額がくつついてしまった。

「おい、サクスケ、ちよつとこつち来いや！」

男子生徒の怒鳴り声に、女子生徒は土下座解除し立ち上がる。「み、磨いて後で下駄箱に入れておきますから」と、遠金に軽くお辞儀をすると、高橋守夫のところへとそそくさと駆け寄った。

「サクスケ、てめえ、窓ガラスろくに拭けてねえじゃねえかよ」

「あの……すみません、ジュースを買ってきてから、つつ続きをやるうと……」

「生意気に言い訳してんじやねえ。つかジュースなんて買ってんじやねえよ！」

「い以後ちゅ………注意します」

クマでありサクスケである女子生徒は、頭を下げた。

「ブー、お前、なんだよこれ！」

大橋道矢が声を荒らげて不満気だ。

「なんだよ、このオレンジジューズ。つぶつぶが入ってないじゃねえか。おれがオレンジといや、つぶつぶだろうがよ！」

真実、初耳だ。

「すんませんでした！ こ、今後このようなことがないよう、気をつけますんで……」

クマでありサクスケでありブーである女子生徒はそういうと、また土下座をし、深く頭を下げた。

彼女には佐久間風子ふうこという可愛らしくて立派な名前があるのだが、本名で呼ぶ者はこのクラスにはいない。

風子は身長一五四、五センチ。すらり、というほど痩せてもいないが別に太ってもいない。それがどうにも見る者に重苦しい印象を与えるのは、おそらくはその髪型のせいであつた。

歌舞伎の主役みたい。

そう表現するのが一番分かりやすい。

腰まで伸びている長い黒髪が、さながら超新星のごとく大爆発している。顔の大半がその中に埋もれてしまっており、しかも始終うつむいていることも手伝って目がほとんど隠れてしまっている。

髪型というよりは、なにもせずにおいたらこうなりましたという感じだ。

実は風子は意図的にこのようにしている。

もともとは、とりたてて明るいとはいえないまでも十分に「普通」というカテゴリーに属する平凡な女の子だった。

中学二年の二学期に、突然いじめの標的になった。いじめは度を越した酷いもので風子は何度も自殺を考えたくらいだ。

いつしか風子は、誰に対しても卑屈な態度で接するようになった。髪を伸ばして放置、おしゃれに気を遣わないどころか、わざと醜い身なりをするようになった。

高校では、入学当時からいじめられた。クラスは違つが中学の時の同級生が何人かいたことが原因だろう。

遠金の靴を磨き直した風子は、昇降口の下駄箱に行くため廊下を歩いている。

たくさん生徒たちがお喋りしながら行き交っている。

風子の嫌いな、ごちゃごちゃとした人の波。

なんでもないのに、みんなどうしてそんなに楽しそうにしているのだろう。

なにがおかしくて笑っているのだろう。

そもそもなんだって生きてるんだ。どうせそのうちに死んでしまふというのに。

靴を両手に抱え、うつむいたまま、縫うように進んでいく。

一人の男子生徒と肩がぶつかった。

「す、すいません！ ごめんなさい！」

風子は深く頭をさげて謝った。悪いのは友達とふざけていた男子生徒なのだが。

靴を遠金の下駄箱に戻し、教室に戻る。

クラスみんなの表情は普段通りだ。友達とお喋りをしていたり、本を読んでいたたり。

しかし、風子は微妙な空気の変化を感じ取っていた。

理由はすぐに分かった。

自分の机の表面が、ニスでも塗ったかのような光沢を帯びている。

風子は自分の席に着き、椅子に座った。

ぼさぼさの前髪で目が完全に隠れているというのに、風子にはみんなの視線が、そして興味の対象がよく分かっていった。

心の中で深く溜め息をつく、と、ゆっくりと両腕を机の上に置いた。みんな、笑いをこらえるのに必死だ。

しばらくして、風子は腕を動かそうとした。袖が机に張り付いてしまっていた。腕を動かそうとすると、机が引っ張られてガタガタと動く。

机の表面に塗られていたのは、強力な接着剤だった。風子は慌て

たそぶりで、引き剥がそうとしきりに腕を動かした。

「ガタガタうるせえぞ、クマ！」

怒声が飛ぶ。

「ご、ごめんなさい。でも、でも、袖が……」

上着を脱ごうにも、腕が両方とも机から離れない状況のため、それも出来ない。

風子が机と奮戦しているうちに、予鈴が鳴った。と同時に教室の前のドアから担任の安喰先生が入って来た。

しんとなる教室にガタガタという音だけが響いている。風子は力一杯に服と机を引き剥がそうとしたところ、袖が破れてしまった。バランスを崩し、風子は後ろに、机は前に倒れた。耳をかき鳴らす不協和音とともに、机の中身がすべて床に散らばった。

机の表面には、制服の袖が張り付いている。風子の制服の袖は、裏地だけになってしまった。

「おいブー、いい加減にしろよさつきから、授業の邪魔だろが！」

「人の迷惑考えてよね」

「常識ねえのか、この馬鹿」

「ど、ど、どうもすみませんです！」

風子は慌てて机と椅子を起こし、散らばったものを片づけはじめる。

また、心の中で深い溜め息をついた。

……これでいいのだ。

2

吹き付ける神の息吹に、髪の毛がばさばさと音を立て、激しくなびいている。顔を上げれば風に髪をさらわれて額が丸見えになりそうだが、下を向いているためにかえって額や顔に髪の毛が張り付いてしまっている。エイリアンや巨大蜘蛛が頭に取り付いているかのようだ。

佐久間風子は自転車通学をしている。俗にママチャリと呼ばれる

型の青い色の自転車を利用している。

今風子が自転車を走らせている農道は、たまにトラクターや軽トラックが通るくらい、ほとんど貸し切りのようなものだ。

道路は少し盛り上がったところに作られており、小さな土手の下にはどこまでも田んぼが広がっている。

運のないことに登校時と下校時とで風向きが真逆に変化し、彼女の場合常に向かい風と戦わなければならない。

この風さえなければ、見晴らしの良い気持ちのいい通学路だといふのに。おかげで体力がつくかも知れないが、微塵も嬉しくない。このなにも風を遮るものがない田んぼの、ど真ん中をつつきつていく風はとにかく激しい、辛い。一帯が山に八方を囲まれた狭い盆地であることも、この風の原因の一つだろう。

ハンドルを持つ腕をよく見ると、制服の袖の表面が破れてなくなつて裏地だけになつてしまつてるのが分かる。

狭い道と交わり十字路となつているところにさしかかる。そこを左に折れるとすぐに小さな住宅地があり、そこに風子の家がある。もうこの位置からでも、風子の家が見えている。瓦葺きの、近代的な普通の一軒家だ。しかし彼女は曲がらず、そのまま真っ直ぐ自転車を走らせた。

風の神と戦い続け、もう五分程もペダルを漕ぐと、景色が一転する。駅周辺の広い住宅地だ。さらに進んでいくと次第に交通量が、そしてビルディングの数、人間の数が増えてくる。鉄道の踏切を横断せずに直前を右折、線路沿いを少し進むと駅が見えてきた。自動車と通行人が多いので、自転車を降りて押して歩く。

駅前大通りに平行している、商店の並ぶ小道へと入る。さらに少し進むと、ノワゼットという名の小さなケーキ屋がある。風子はこの店で、アルバイト店員として働いている。火水木曜が午後五時から八時半まで。土日が朝から晩までのフル勤務。時給は七二〇円。

自転車を店の裏側にある狭いスペースにとめた。

「お、おはようございます！」

裏口から店内に入ると、風子は先輩に深く頭を下げた。別に店の決まり事ではないが、みんなどの時間も「おはよう」を使っている。「おはよう、サクちゃん」

白衣を着た大男、下平耕平、このアルバイト店員では一番の古株だ。もう七年以上にもなるらしい。

届いたばかりの大きな砂糖袋が、台車の上に積まれている。下平はそれを棚にしまっているところのようだ。

「それ、やります」

風子は砂糖袋に手をかける。今日は五時半頃に届くと聞いていたので、すっかり自分の仕事と決めていたから。

「いいよ、おれがやるよ。サクちゃん勤務は五時からなんだから。

それよりタイムカード押してきなよ」

「はい」

頭を下げるたびに、髪の毛が大移動してそれ自体独立した生き物であるかのようにばさりばさりと動く。

「肩こないのかな」

下平は小さな声で呟いた。

風子は部屋の隅でタイムカードを押すと、タイムレコーダーの横にあるロッカーを開き、白衣を着込み、帽子を被った。

小走りにやってきた北田重樹店長が、棚に積まれている昨日の伝票を調べ始める。風子に気づき、

「おう、サクちゃんおはよう」

「おはよ…ございます」

風子は帽子の中に、爆発した髪の毛をぎゅうぎゅうとしまいこむ。それによって髪型がつぶれて、余計に風子の顔を隠してしまう。

お店で働く以上、あまりよい格好とはいえない。しかし彼女は接客業務ではないし、ケーキの製造補助という仕事の腕前はしっかりしているから、今では店長は特になにもいわない。

注意したのは初日だけだ。こういう仕事なのだから髪を切れ。それか、せめて帽子で押さえ付けるように髪をかき分けて、顔を、お

でこを出せ、と。そういいながら店長が風子の髪の毛をかき分けようとしたところ、いきなり顔をさらされた風子がひどく動揺してあたふたしてしまい、それ以上強制も出来なかった。なんだか変わり者っぽいし、この仕事は諦めてもらおうか。まあ、一日二日様子を見るか。自分から、無理だと気付くだろう。などと考えていたのだが、いざ働かせてみると、とても物覚えが良くて手先も器用なので、店長からお願いしてそのまま続けてもらうこととなった。

このアルバイトは風子が中学を卒業してすぐに始めたもので、かれこれもう二ヶ月ほどになる。

「しかし、せっかく可愛い顔をしているのに、もったいないよなあ。きちんとした身なりで笑顔で接客してくれたら、お客さんがどっと増えそうな気がするけどなあ」

店長が腕組みしながら、風子のことをあらためてまじまじと見て、残念そうな表情を浮かべている。

「ぼくもそう思ってたんですけどね、店長」

下平も続く。

「か、可愛くなんて……ない……です」

興味本位でとんでもないことを口にしなくて欲しい。自分なんか接客などしたら、間違いなく客は減る。人にはそれぞれの領分というものがあるのだ。お前なんか会計をされたからキーキがまずくなったといいがかりをつけられて謝罪させられたり、怒って二度とお客さんがこなくなるかも知れない。

「でもね、本当ならレジが忙しくてお客さんが並んじやっている時なんかは、手伝ってもらったりもするんだからね。下平君だって、こんな野太い声や指だけどレジ打ったり電話取ったりもしてるんだから」

「あ……はい……あの、その分かつては、いるんですけど……こ、この仕事、好きだから続けたいし……そしたら、いろいろしなきゃってことも……分かっているんです……すみませんです。……もももうしわけなくて……ほんとうにすみませんです」

風子は深く頭を下げる。帽子からはみ出ている髪の毛が垂れて揺れている。

当たり前だが、風子は好きでいじめられているわけではない。いじめの標的となってしまうかどうかは、運の左右する部分も大きいのだろうが、災難の降りかかる前兆を察してうまく立ち回ることが出来れば回避可能なのではないか。仕事をする事、大人と接すること、自分と他人との距離の取り方、要領よく立ち回っていく技術等を身につけたい。そう考えて、高校入学早々にアルバイトを始めたのである。

結局、そうした技術を身につける前に、早速高校でもいじめられっ子になってしまったが、それでもこの仕事を辞めるつもりはなかった。無趣味で家にいても特にやることのない風子は、仕事に没頭するようになり、いつしかケーキを作る仕事自体が好きになっていったから。五月からは、土日をフル勤務にしてもらうよう頼んだくらいだ。

「ま、本業のケーキ作りのアシスタントをよくやってくれているから、いいんだよ。無茶しなくてもね」

店長の言葉に、風子はまた頭を下げた。

「おはようございまーす」

裏口から明津恵美、林聖の二人が入って来た。

明津恵美は、通う学校は違うが風子と同じ高校生。学年は一つ上で二年生だ。林聖は二十四歳、まだ子供のいない専業主婦で暇があるので家計の支えにとここで働いている。

二人は店長と風子の間を通っていく。

どっ。という衝撃とともに、風子は脇腹に激しい痛みを感じた。店長らに見えないように、林聖に肘打ちを食らわされたのだ。面と向かっていわれたことはないが、風子は林聖に相当嫌われているようで、このようなことをされるのは日常茶飯事だ。彼女一人が態度に出してくるだけで、おそらく誰もが自分のことを嫌いなのだ。こんな外見だし、愛嬌もまったくないし……

今お店に入ってきた二人と入れ替わりに高野佑司、滝川良枝の二人が退勤。白衣に着替え終えた明津恵美と林聖の二人はレジにつく。時計の針が五時を示す。

風子は仕事を開始した。

「いらっしやいませ」

林聖の愛想たつぷりの声が奥の部屋にまで響いてきた。

しかし、それをかき消すような、お客さんと思われる少女二人の笑い声。

「ほんとクマのやつ、馬鹿だよね」

「どばどば、って机の中身全部出しちゃってさ、おろおろ慌ててるの。ほんと馬鹿。頭鈍いんだよあいつ」

風子は身を低くし、柱の陰からそとと店内を覗いて見る。

やはり声の主は谷澤達子と矢野舞子だった。

「どどどども、すすすすみませんっ！」

「似てねっ！」

谷澤達子が風子の仕草や言葉遣いを大袈裟に真似、矢野舞子がそれを見て両手を打ちながらげらげら笑っている。

……裏方仕事でよかった。

風子は体の向きを変えて、柱に背中を預けた。

胸に左手を当てる。心臓がときどきしている。呼吸が苦しくなってきた。

やっぱり自分に接客なんて無理だ。

でも、だからこそ、乗り切ること自分が成長できるのではないのか。

いや……そもそも、何故そんな努力をしなければならないのか。何故成長しようと頑張らなければならないのか。なんの悩みもなくただ遊んでいるだけの人もいるというのに。

風子は葛藤する。こんなことで真剣に悩んでいる自分が、とても惨めで辛かった。

「はい、チョコモンブランが二つと、ブルーベリーのタルトが一つ、

イチゴのタルトが一つですね」

林聖のキンキンとした声が響く。

今ならもれなく脇腹に肘鉄一発おまけについてきまあす。

3

「お疲れ様でした！」

「サクちゃん、そんな気合い入れて叫ばなくても……」

別に気合いを入れて叫んでいるわけではない。ぼそぼそ声にならないよう喋ろうとして、自分の声をコントロール出来なかっただけだ。まともに喋ろうとして声が裏返ってしまったたり、最近どんどん喋ることが下手になってきている。

ノワゼットの勤務時間は八時半まで。みな、白衣を脱いで、タイムカードを押し、外へと出る。

田舎の町とはいえ、近代化の代償として空気は汚れてきており、初夏の夜空は昔ほど奇麗ではない。それでも、さそり座がすぐに見つけられるところなど、都会と比べればよほど綺麗な星空だ。

「お疲れ様」

林聖はみんなに挨拶し、スクーターに乗って帰っていく。唯一風子のほうにだけは、顔を向けもしなかった。

「お疲れ様です」

明津恵美の、抜けるような明るい声。

「風子ちゃん、また明日ね」

と手を振っている。彼女は駅を渡ってすぐのところに自分の家があるため、ここから徒歩だ。

「は、はい、お、お、お疲れ様でした！」

風子はぼさぼさの前髪のすき間から、去っていく明津の背中を見つめている。

明津は非常に屈託がなく、風子に対してもなんのわけへだてもなく接してくる。お互いの暇が合う度に、いろいろと話しかけてくる。明津が土曜出勤の際には、お昼に誘われたこともある。

人間の本心を信じることの出来ない風子は、そのような明津の態度にかえって不安を覚えてしまう。林聖に肘鉄を打たれているほうが、ずっと納得できる。そのようにならないために始めたアルバイトだというのに。

一体自分は、人にとってどのような存在なのだろう。

人にとつてどのような存在にまで、自分を成長させることが出来るのだろうか。嫌われない技術を身につけることが出来るのだろうか。

時折、虚しくもそんな自問をしてしまうことがある。自問するまでもないことなのに。自分がどんなに成長しようと、良いと思ってくれる人など老若男女問わず現れるはずがないのだ。せいぜい「大嫌い。いじめてやりたくて仕方がない」から、「どうでもいい」になる程度が、自分の限界だ。そこまで高められれば上等だ。

風子は自転車のカゴに通学用のバッグを入れる。教科書など主要なものも全て教室のロッカーに置きっぱなしにしているので、バッグは小柄なもので済む。

自転車のハンドルを握り、押しながら商店街の通りへと出た。

いつもと同じように真つすぐ家に帰るつもりだったが、ふと気付くと大通りの本屋前で足を止めていた。

最近開店したばかりの大型書店だ。深夜一時まで営業している。

近くに深夜営業のコンビニエンスストアもなく、今まではほとんどの店が夜の八時で営業終了してしまっていた。しかし、この書店が出来たことにより、駅周辺の夜の雰囲気がいぶ変化してきた。その集客力にあやかろうと、夜遅くまで営業時間を拡大した喫茶店なども出てきた。

本だけではなく、CDやDVD、テレビゲームの新品中古販売やレンタルなどを行っている。本店が九州にある、全国規模の大型チェーン店である。この建物が出来る前は、古びた店や住宅が密集していた。誰とどのようなコネクションが有ったのか知らないが、その時の古本屋の主人がこの大型書店の店長だ。もう六十をいくつも過ぎているような白髪の老人だ。

風子は自転車を店の前の小さな駐輪場に止めて鍵をかけ、バッグを取り出すと店内へと入った。余談だが、風子はここで初めて、お店の自動ドアというものを体験した。それほど田舎だということであり、それほど風子がよそへ出掛けないということである。他にはせいぜい電車やバス、エレベーターのドアくらいしか知らない。入るとすぐに立ち止まり、店の中全体を見回した。誰も知っていない人間はいなさそうだ。一安心すると、再び歩きだす。風子が向かったのは、趣味のコーナーだった。

棚におさめられた本の背表紙を見て、目についた本を手にとってみる。

初歩からはじめる囲碁。

ぱらぱらとページをめくり、本を閉じる。もとの位置に戻す。

やるほど楽しくなる将棋

楽しむための麻雀

必勝競馬

等々……

一歩横に移動すると、がらりとジャンルが変わる。

J・P・O・Pの本、洋楽の本、クラシック。と、音楽関係になる。

それぞれ、手に取って軽くページをめくってはもとの位置に戻していく。

さらに一歩移動。

野球、バレー、サッカー、剣道、柔道、などのスポーツの指導書、選手の自叙伝等だ。

まさか自分で野球をするわけにもいかないし、せいぜい観戦といったところか。でもこんな田舎じゃあ、球場まで遠くてとても行っていない。テレビ観戦という手もあるが、それが趣味といえるものかどうか。

サッカーにしても同様だ。それに、風子はサッカーという球技に、あまり良い印象を持っていない。二十人以上もの人間がうじゃうじやと動き回っているのが、人嫌いの風子にはどうにも生理的に嫌な

のだ。野球ならグラウンドに立っているのは十人ちよつとだし、基本的に一対一の勝負でごちゃごちゃからみあうこともないし、まだ我慢が出来る。

こんなことをしているのには、勿論理由がある。風子は最近、自分の趣味に出来そうなものを見つけたと考えている。全くの無趣味であることも、自分がいじめられる原因の一つかも知れない。趣味を持つていれば、おのずから内面も変わってくるのではないか。威ささやかではあっても、心の奥が光り輝いてくるのではないか。威厳というのか、いじめられにくい雰囲気というようなものが出来てくるのではないか。いや、そんな高尚ぶつた理由でなくとも、単純に趣味が合えばあまり嫌われずに済むかも知れない。

ともかく、集団競技は駄目だ。やるのも観るのも自分向きでない。集団も個人も関係なく、そもそもスポーツ観戦には興味はない。汗くさいことや、勝負ごとは嫌いだ。

風子は次の本を取ろうと手を伸ばす。タッチの差で、はたきのふさふさに本が被り隠されてしまった。ずっと立ち読みをしている風子に、店長がまるで昭和時代のような嫌がらせに出てきたのである。このチェーン店そのものは、特に立ち読みを禁止しているわけではないが、この老店長にはどうにも我慢出来ないのである。

趣味コーナーに並ぶ本の背表紙を、鼻息を鳴らしながら片っ端から激しくはたき続ける店長の執念に、風子がたまるうはずもなくあつさり退散することとなる。

店の外へと出た。

結局、なにも自分のやりたいことを見つけれなかった。虚しく時が流れたただだ。帰宅しても寝るだけだし、どうでもいいことだが。

通学用バッグを自転車の前カゴに入れる。カゴの上カバーを閉め、チャックを閉める。

前輪にかけた鍵を外そうと制服のポケットに手を入れた。と同時に風子の肩にドンとなにか激しくぶつかった。

風子はよろけた。

軽く硬い物が大量に道路に転がり散らばる音。

色の浅黒い若い男がおり、その足下に紙の手提げ袋が落ちている。そこから、大量の万年筆だかボールペンだかが出てしまっていた。

「ご、ごめんなさい！　ただだいいじょうぶですか」

むしる風子はぶつかられた側なのだが、しかし彼女はそう謝ると、道路に転がっている物を拾い始めた。しゃがむとんでもなく量の多い髪の毛が八方に広がって地面に垂れ、まるで巨大なゴキブリか、巨大な黒クワゲだ。

「だいいじょうぶです」

肌の色といい片言の喋り方といい、東南アジア系の外国人のようだ。

「どうもすみませんね。うかりして、ぶつつかつちやいましたよ」

と、男もしゃがみ、転がった物を拾いはじめる。

風子はペンを拾い、紙袋へ入れていく。金属で出来ている割に、やたらと軽いペンなのがなんとなく気になった。

街の喧噪が一瞬小さくなったその時、風子は背後にゆっくりチャックを開いていく音を聞いた。

振り返るとまた別の外国人の男が、風子の自転車のカゴに手をかけていた。

しゃがんでペンを拾っていた男は、立ち上がると同時に外国語でなにやら叫ぶ。風子の自転車カゴに手をかけていた男は、バッグを素早く取り出すと、走りはじめた。もう一人の男も後に続いて走り出す。

泥棒だ！

風子は立ち上がり、口を開いた。しかしその開いた口からはなんの言葉も出てこなかった。

風子はただ動揺し、立ちすくんでいるだけだった。

今週給料が出たばかりで、バッグにまだ全額入っていたのに……

「きみ、もしかしたら、あのバッグ、盗まれた？」

通りがかりの、長身の若い男が近づいてきて、風子に声をかけた。うつむいている風子、数瞬の後、大きく頷いた。

男は走り出した。
速い。

男の背中はずぐに群衆の中に消えた。

叫び声が聞こえてきた。

「その二人、泥棒です！」

続いて、外国人二人が喚く声。遠いし、外国語なのでなにをいつているのかさっぱり分らない。

ようやく呪縛から解けたかのように、風子も声の聞こえる方へ走り出していた。

しばらく進んだところで、ようやく彼らの姿を発見した。

二人の外国人窃盗犯は、先ほどの若者と、他の市民の協力により捕らえられていた。そして騒ぎを聞いて、近くの交番からお巡りさんが二人、駆けつけてきていた。

「きみのバッグ、無事だったよ」

長身の若者は、汗だくの顔に笑みを浮かべ、お巡りさんが手にしている風子のバッグを指差した。

若者と風子はお巡りさんに簡単な調書を取られ、解放された。風子は自分自身も風体かなり怪しいと思っているので、いろいろ疑われて自由になるまで時間がかかるのではと不安に考えていただけに、拍子抜けだった。

窃盗犯は近くの工場で働いている不法労働者らしい。わざと地面にばらまいて風子に拾わせていたのは、検査で不良があり廃棄する予定だったペンケースだ。

「田舎だからって、油断してちゃ駄目だぞ。自分のことは自分で守らなきゃ」

間近でそう話しかけられ、風子は若者の顔を見上げた。身長差は三十センチくらいありそうだ。

「あ、あの……」

風子は口を開いた。

「……ああ、あの、ど、どうも……あり……ありが……あり……」
どうもありがとうございます！ ただそれだけのことなのに、
分かっているも声がスムーズに出てこない。

なおもありありがたい続ける奇妙な風体の少女に若者はおかしさを感じた。見知らぬ人間にお礼をいうことに対して、泣き出してしま
いそうなほどに緊張し萎縮してしまっている様子が可愛らしくて、
つい笑ってしまった。

風子は笑われたことで、恥ずかしさ、もどかしさにすっかり気
が動転してしまった。バッグから財布を取り出すと男に差し出した。

「お……お礼」

「馬鹿、それじゃ取り戻した意味がないだろ。いいんだよ、そんな
ことは」

「でも……」

「それじゃ、そこでコーヒーでもおごつてよ。一番安いのでいいか
ら」

男はすぐその、雑居ビル二階にある喫茶店を親指で指し示した。

4

喫茶室マキアート。

駅近くの四階建て雑居ビルの二階にある。以前は九時閉店だった
が、近くにオープンした大型書店の影響により最近は夜の十一時まで
営業している。

狭いフロアだが、客が他に二組くらいしかいないので別に窮屈な
感じはしない。オレンジの淡い光が店内を照らしている。小さな音
量でジャズが流れている。

よくも悪くもない、どこにでもある喫茶店の風景なのだが、こう
いった店に生まれて初めて入った風子にはなんだかとても高級な大
人の世界のように思えた。コーヒー一杯で何千円も何万円もするの
ではないかなどと不安だったので、メニューに書かれていた価格を

見てほつと安心した。

窓際の小さな木のテーブルを挟み、若者と風子の二人は向かい合つて座っている。

もつと窓際から離れた席にしておけばよかった、と風子は後悔していた。外を歩く人々が丸見えなので、反対に誰か知った人間に見られてしまうのではないかと不安でしかたない。若者の座るがままに、自分も同じテーブルの席に座っただけだし、風子の性格を考えれば他の席にしたいなどと主張できるはずもなく、結局はどうにもしようのないことだったのだが。

風子は身を小さく縮めたまま、うつむいている。一体、どんな態度をとつていればいいのか。どんな表情をしていればいいのか。なにを話せばいいのか。仮にも相手は恩人だ、黙つていても失礼ではないか。と困つていたら、男のほうから話しかけてくれた。

「きみ、この近くの高校なの？ この辺でよく見るよね、その制服」

「の、のの野々部……商業、です」
のが一体何回付くんだ。

「ああ、聞いたことある校名だな。おれはね、この近くのお菓子工場で働いているんだ」

「……は、はず、蓮見、製菓……ですか？」

風子は自分自身の言葉にびっくりして、いい終えると同時に思わず立ち上がった。

「どうかした？」

「なんでも……」

また腰を降ろす。

中二の時にいじめられるようになってからというもの、すっかり人間嫌いになり、他人と接することが不器用になってしまった。家族以外の人間に自分から話すことなどほとんどない。それが今まったく知らない人間に「蓮見製菓ですか？」と質問をしたのだ。ささいなことだが、風子には驚きに値することだった。でもそんなことで驚くなんてあまりに馬鹿馬鹿しくて、恥ずかしくて、とても人に

は話せない。

「そ、蓮見製菓の社員。……なんだけど、自分の中では、本職はサッカー選手……………の、つもり」

風子はうつむいた顔を少しだけ上げた。

サッカー。

あの、二十人以上もの大勢が芝の上でひしめきあうサッカー。ゴールを決めると、みんなでごちゃごちゃと抱きつきあったり、服を脱いでパフォーマンスをしたりする、あのサッカー。長髪と禿頭ばかりの、あのサッカー……

「今年っからね、JFLチームの選手をやっているんだよ」

「じよいふる？」

「違うよ、ジー・エフ・エル。……でも、まあ毎日がジョイフルにや違いなわけだね」

ウエイトレスがコーヒーとオレンジジュースを運んできた。

どんな態度でいればいいのか分からず、風子はウエイトレスに深く頭を下げた。ウエイトレスは、なんだか怪訝そうな顔と笑顔とをこつちやにしながら「ごゆつくりどうぞ」といい残し、店の奥に消えていった。

「JFLっつーのは、日本アマチュアサッカー界の、トップリーグだよ」

蓮見製菓サッカー部は、昨年の東北社会人リーグを他の追隨を許さないぶつちぎりのトップで優勝し、今年からJFLに加盟する資格を得た。昇格にともない、チーム名もハズミSCと改めた。

地域リーグで圧倒的な強さを誇っていたといっても、戦い方は完全な外国人頼みであった。社会人リーグに外国人は少ないので、いるだけで反則級に強力な武器になるのだ。しかし、その選手はもういない。自分の能力が金になることに気づき、他のJFLチームにプロ契約として雇われたのだ。ほとんどメンバーが変わらず、主力外人が抜け、戦いの舞台がワンランク上昇、当然今年のハズミSCには去年のような強さはない。

「去年のようになっつつか……なんていうのか、まあ、いろいろね、頑張っているわけですよ……」などと、若者はきまり悪そうにお茶を濁した。

風子には難しく、なにがなんなのがよく分からなかった。

「……凄いですね、Ｊリーグの選手だなんて」

「Ｊリーグじゃないよ。単純にいうと、その下の下」

「あの……どうして……サッカー選手なんかをやっているんですか」
もしかしたら失礼な質問だっただろうか……。しかし、若者は別に気にしたふうもないようだ。

「生き甲斐だから」

簡単にそういった。

「生き甲斐……ですか？」

「そう。なんで生き甲斐に思うようになったかなんて理屈じゃないし、おれにもよく分からないけど。そもそもなんで自分は生きているのかって考えたことある？」

ある。そんなことは、しょっちゅうだ。

単に心臓が動いて、脳に血が流れているから、生きているのだ。別にこのまま意識が遠のいていつて、永遠に戻らなくても構わないと思っている。

だが痛い思いをしたり、苦しんで死んでいく勇気がない。死ぬまでのほんの少しの我慢だというのに、その後は永遠に楽になるというのに、自分にはたかがその程度の我慢も出来ないのだ。しかたなく、いつか天命を終えるまでの苦しみを少しでも減らそうと、生き方をいろいろと模索しているのである。そうしてケーキ屋でアルバイトを始めたし、今も自分に合う趣味を探そうとしている。

「おれは、なにかで世界一になればいいなって思ってる。でも、地球には何十億と人間がいるだろ。世界で一番なんてまず無理。それでもおれは世界で一番を目指したい。大学までずっとサッカーやっていたから、おれが世界一を目指すなら、これしかないって思ってる……でも結局プロ試験に落ちて挫折したけど。とりあえずは職

につかなきゃって思っていたら、大学の先輩から、働きながらサッカーしないか、って声をかけられてね、生まれた時から大学卒業するまでずっと住んでいた札幌を出て、ここに来て蓮見に入ったんだよ。……プロ試験に落ちて、こんなところでサッカーやってるってこと自体、もう世界一がどうか生意気なことといっているレベルじゃないってことなんだけど、でもやるからには、無茶でもいいから目標高く持っていたほうが面白いし……心の奥では無理とも思っているから夢叶わなくてもショックもないし。仕事の半分はサッカーなんだから、今も十分楽しいし、ほんとジョイフルですよ。……じゃ、コーヒー御馳走になります」

男はコーヒーに砂糖とミルクを入れ、かき混ぜる。

「なんだか、矛盾してるようないないような」

風子はグラスにストローを差し、オレンジジュースを少し飲んだ。「確かに、矛盾したことといってるよなあ。でももつと変なのがいるぞ、デیفエンダーの選手で岡崎健吾って奴なんだけどね。そいつは、J2からオフアーが来ることあるんだけど、いつも断っちゃうんだ。サッカーだけやっていられるわけだし、より色々なチャンスに恵まれる舞台に立てるわけだから、こんな良い話はないのにな。実はJ2どころか、JFLでやっていく自信もないんだ。好きで会社員をやっているんだよ。プロのくせに、というプレッシャーに耐えられないからなんだ」

「サッカーのことは全然分らないけど、そういう気持ちって誰にもあると思います。……自分も、プレッシャーやコンプレックスだらけですから。なにをするのにも緊張して心臓がどきどきしちゃって」

「じゃあ、今度またあいつに誘いが来て断りやがったら、尻を引っぱたいてやるかな。先にそういう場所に行かれちゃってもなんか悔しいものはあるけど、認められる奴ってのは、認められることをやっているわけだからな。……変わり者といや、渡辺輝彦って奴はさ、いっつも精神統一の際に決まった俳句を唱えるんだよ。誰のだった

かな、目には青葉、山……なんだったかな」

「山郭公、初松魚ですか。山口素堂の俳句」

「そうそう、それぞれ、きみ頭いいね。セットプレーの時も、人の密集する中でそんな言葉を呟いているから、みんな怪訝そうな顔で見ているよ。なんか一部で有名になっているみたいで、この前の試合の時なんか、テルのマークについている奴が精神集中を乱そうとしてしきりにテルの耳元で呟いてんだよ、山は富士、海は瀬戸内、湯は別府。もうおれおかしくて、試合どこじゃなかったよ」

「なんか変わった人ばかりですね。ところでセットプレーってなんですか？」

「な、なんか笑いのツボが違うのかな。……まあいいや、ええとセツトプレーってのはね……」

ただ黙っているのもなんなので、よく分からない用語への質問を試してみたものの、説明されてもやっぱりよく分からなかった。

夜の十時も近くなり、二人は店の外へと出た。

「ごめんね、遅くなって。送って行ってあげたいけど、おれ歩きだから」

「自転車だったらそんな時間かからないところだから大丈夫ですよ」

「コーヒー、ごちそうさまでした。楽しかったよ」

「こっちこそ、いろいろ面白い話聞かせてもらって」

「……あ、そうだそうだ」

若者は鞆から、小さなお菓子の幾つか入ったOPP袋を取り出した。

「これ、我が社の新商品。よかつたら食べてみて。……て、なんか

営業マンみたいなことしているな、おれ。蓮見製菓をよろしくっス」

「……いいんですか。じゃ、遠慮なく頂戴します。どうもありがとうございます。あ、そ、それと、バッグ取り戻してくれて、本当に有り難うございました」

風子はお菓子の包みを受け取った。

「もう取られるなよ。夜道、気をつけてな」

若者は走り出した。振り返り、手を振っている。

風子も無意識につられて右手を小さく上げていた。

すぐに若者の姿は、通行人の中に消えていった。

風子はバッグと先ほどのお菓子の包みを自転車のカゴの中に入れた。

自転車を走らせる。

賑わっているのは駅周辺だけで、すぐに静まり返った住宅街になる。その住宅街もすぐに終わり、広大な田園地帯へと入る。道路に街灯はあるものの間隔がかなり離れており、道標程度にしかならず、足下を照らす役割は全く果たしていない。だから風子は街灯がなくとも地面を照らせるように、自転車に乾電池式のかなり強力なライトを付けている。

頭がぼうつとしている。なんだか奇妙な気分だ。さきほどの男性の話が面白かったとか、初めての喫茶店が珍しかったとか、そういうことではない。自分自身が、なんだかいつもと違うのだ。なにが違うのだろうか。

疑問に思ってから解答が出るまで、さほどの時間はかからなかった。今日会ったばかりの見ず知らずの男性と、いつしか自分は普通に話せていた。自分の性格を考えると、本来なら決して有り得ないことだ。それほど巧妙に会話を誘導された気もしないし、自分の社交性が変化したのだとも思えない。

今までに感じたことのない、なんと名付けていいのかわからない気持ち胸の奥から込み上げてきた。良い感覚なのか悪い感覚なのか自分でも全く分からず、それがどうにも気持ち悪かった。鳥肌が立ってきた。理解出来ないことから来るその不気味な思いから逃れようと、つい自転車を飛ばした。

ほどなくして、自転車ごと田んぼに転がり落ちた。

5

田んぼの中に、十軒ほどの家が寄り添う住宅地が点在する。風子

の家はそんな住宅地の一つにある。

風子は泥まみれの格好で帰宅した。深緑のブレザーも、赤を基調としたタータンチェックのスカートも、今やすっかり茶色一色に染まりきっている。

心配する母に、道から外れて二メートル下の田んぼに自転車ごと転がり落ちたことを素直に話した。そして、服の袖が破れているのもそのせいにしてしまった。

スカートは洗濯してまた履けるが、上着はもう捨ててしまっしかない。

風子はお風呂に入った。

お風呂で脱いだ服や下着にシャワーでお湯をかけて、泥を落とした。

もともと髪の毛の量が多いのに加えて、腰まで伸ばしているものだから、洗髪がまた一苦勞であった。しかし洗ったあとは楽でいい。バスタオルで軽く拭いて、少しでもドライヤーをかけると、あとはブラッシングもなにもせず、ただ眠れば、翌日には意図した通りの髪型になっているのだから。

パジャマ姿でリビングに行くと、弟の良信がいた。三つ年下の中学一年生だ。テレビゲームで遊んでいるのを母に注意されて片づけているところだ。

「良信、凄いよ、さっきお姉ちゃんサッカー選手に会っちゃったんだよ」

「へえ」

「バッグを盗まれたのを、取り戻してくれたんだ。凄い足が速かった」

良信と話しているとほっとする。

自分が違和感なくよどみのない会話ができるこの世でたった一人の存在。

「そもそも盗まれるなよ。……で、なに？　どこのチーム？」

「バイパスの向こう側に蓮見製菓あるでしょ。そのチームだって」

「なんだよ、Ｊリーガーじゃないじゃん。ただの会社のサッカー部じゃないの？」

「そうらしいけど、でも今年から、なんだか立場が上がったとかいってたよ」

「ふーん。ま、バッグが盗まれなくてなによりだったね」

喫茶店で当の選手本人と会話した時は、実は凄い人と話しているのかもという気持ちもあったのだが、弟に一蹴されるとなんだかとても他愛のないことに思えてきた。

しかし別にどちらでもいいのだ。風子にとってはＪリーグも高校サッカーも草サッカーも同じだ。

風子は階段を上がった。二階の自室に入る。

ベッドのふかふか布団に、大の字にうつぶせになる。

首を学習机のほうに向ける。写真立てが置いてある。反対向きに置かれているため裏側しか見えない。

中学一年生の時に撮影した、友達数人と一緒に映った写真。この写真の中には、笑顔の風子がいる。風子はこの裏返った写真を決して見ようとはしない。自分の笑顔を自分自身の記憶から完全に消し去ってしまいたいと思っている。

友達に風子がいじめられるようになっても全く助けってくれなかった。一人を除いてはいじめに加わるようなことはなかったが、段々と風子と口をきかなくなっていた。いじめられている風子を、他の生徒たちと同じように笑って見ている者もいた。

風子はある日、彼女らに質問した。

「わたしも一緒にいじめられたくないし。それに、いじめられるほうが悪いんだよ。うじうじしているから、いつまでもいじめが続くんだよ」

彼女らとは、中学を卒業してから一度も会っていない。

裏を向いた写真。

笑顔。

思い出。

こんなもの、見たくない。

なら捨ててしまえばいいのに……

何故かそうすることも出来なかった。

しばらくして、風子はうつ伏せになったまま顔を上げた。

床に置いた鞆の隣に、菓子が幾つか詰められた透明な袋がある。

風子は起きあがって動くのが面倒とでもいうように、はいつくばったままの姿勢でベッドから床に降りた。前のめりになりすぎてバランスを崩して床に一回転してしまう。

お菓子の袋を手にとってみる。スティック状のスナック菓子が、一本毎に包装されている。

「こくうまバー」という商品名らしい。チーズ味、焼き肉味、など色々な種類が入っている。小さな包装袋に、「いままで無い食感！」「もうとまらない！」「この感激に耐えられるか！」と小さな字で過剰なまでにたくさんさんの宣伝文句が書き込まれている。宣伝文句の中にすっかり埋もれて、白樫の会社所在地や商品説明の欄を見なければ商品名も分からなかっただろう。

確か新商品といていたが、風子はそもそも蓮見製菓のお菓子を全く知らないで、同社過去商品との比較は無理だ。蓮見製菓の工場はこの辺りに住む者なら誰でも知っているが、考えてみれば風子は一度もここのお菓子を見たことがなかった。ちゃんとしたお菓子会社だったのだな、と改めて思った。

お好み焼き味の包みを破る。さきほど自転車の前カゴに通学用のバッグとこのお菓子とを入れたまま、田んぼの中に転げ落ちたわけだが、お菓子は運良く全くの無傷だった。

「いまままでに無い食感！」とはいうものの、十分に庶民に浸透しているありふれた食感であった。しかし商品名の示す通り味にかなりのコクがあり、最初想像していたよりもずっと美味しかった。しかし、すぐに飽きの来そうな味でもあった。

そつえば……

泥棒を捕まえてくれたあの男性の名前を、最後まで知らないまま

だった。

6

風子は姿見の前に立ち、身だしなみを整えている。
よりみつともなくするために。

制服に着替えると気持ちぴりっと引き締まる。

佐久間風子から、クラスのゴキブリへ変身した実感がわいてくる。
家を出る。

空を飛べない巨大なゴキブリは、悲しいかな青いママチャリを飛ばして学校へと向かうのだ。

行きも帰りも向かい風なので、登下校中の風子はいつも凄い髪型だ。

風の吹いてくる方向に十五分ほども自転車を走らせると、風子の通う高校に到着する。

校舎横の駐輪場に自転車をとめる。

騒がしい人の群とともに校舎に入る。

靴を上履きに履き替える。今日は画鋏は入っていなかった。ささ

やかな幸せかも知れない。

階段を上る。風子の教室は二階にある。

二階の廊下を歩く。

風子の大嫌いな人混み。

喧噪。

他愛のない話。

表情。

笑顔。

窓からの青空。

普段通りの光景。

あと二年半も続く日常。

風子の教室のドアの前で、男子生徒が二人しゃがんでいたが、風子に気づくと慌てて教室へと入っていった。

三十センチほど開いたドアのすき間、教室と廊下との境には、バナナの皮が落ちている。

今日のお題は定番のバナナでございますか。しかし、毎回ひっかかるのも妙な話。風子はしゃがんでバナナを拾った。今日は運良く気が付いて、罨にはひっかからなかったってことで。

風子はドアを開いた。

上から滝のような勢いで水が落ちてきた。

風子の全身は一瞬にしてずぶぬれになった。

クラスの全員が、一斉に笑い出した。

「馬鹿だこいつ！」

「バナナに気をとられて、バケツに気がつかねえでやんの」

風子はバナナの皮を持ったまま、ただうつむいているだけだった。

「佐久間、なにをやっているんだ！」

担任の教師がやってきた。

この教師は状況判断能力がゼロなのか。それとも無能なふりをしているのか。「なにをやっている」ではなく、「なにをされたのか？」ではないのか。怒声を浴びせる相手を間違っていないか。

風子は水を滴らせながら、諦めにも似た表情で先生の顔を窺っている。濡れた髪の毛が顔全体をべったりと被い隠している。

「先生、佐久間さんがまた大暴れました」

「自分の思い通りにいかないと分かったら、おれたちにやられたことにするといって、自分からバケツの水を被りました」

「こんなことばかりされてると、勉強に身が入りません。ちゃんと注意して下さい」

生徒らは実に楽しそうな表情で苦情を訴えた。

「佐久間、本当なのか？」

そんな訳の分からない理由で頭からバケツの水を被る人間が本当にいると思いますか？

風子は口を硬く閉ざしたまま、喋らない。

「もう、こんな馬鹿なことはするんじゃないぞ。雑巾で拭いておけ。」

その前にジャージにでも着替えてこい。それと、放課後までに反省文を提出すること。……それじゃ、ホームルームを始めるぞ」

以前にも同じようなことがあった。今回の件で確信出来た。やはり先生は気が付いている。見ないふりをしているのだ。介入するのが嫌なのだろう。薄々感づいているような態度を取ると、有事の際に介入しなかった罪を問われる。気づいていなければ、最悪でも、無能呼ばわりで済む。

どちらにしても、教育者として最低ではないか。もしも本当に気が付いていないのなら、そんな鈍い人間は教師に向いていない。知らぬふりをしているのなら、教師である資格がない。とつと塾の講師にでも転職して、勉強だけ教えていればいい。

みんなに仕返しされることが怖くて先生に相談することが出来なかったが、いつか気付いて助けてくれるかも知れない。そんな微かな期待は完全に打ち砕かれた。

水を滴らせながら、教室の後ろにある自分のロッカーからスポーツバッグを取り出し、廊下へ出て行った。

女子更衣室に入る。

バッグからジャージを取り出した。今年の一年生は青ジャージだ。風子は一瞬硬直した。

糸でジャージの上下が縫いつけられていた。縫い方は斜め縦横出鱈目に針を通しただけのもの。しかしかなり細かな間隔で縫われており、糸は少し引つ張った程度では切れやしない。

せつかくの高校一年生だというのに、こんなことに一生懸命になって喜んでいる人間がいる。

ハサミを持っていないのと、早く教室に戻りたい焦りで強引に引っ張ると、びい、と音をたててジャージはあっけなく破れてしまった。その際に糸も大半が切れたようで、その後はぷつりぷつりと音を立てて簡単にジャージの上下を分割させることが出来た。

破れてしまった箇所を調べてみると、丁度お尻のところに大穴が空いてしまっている。このまま履いても、パンツが丸見えだ。仕方

なく、びしょ濡れのスカートの上から、ジャージのズボンをはく。ぐちより、と嫌な感触。気持ちがとても惨めになってくる。

四つん這いになり、更衣室備え置き雑巾で廊下に滴り落ちた水滴を拭きながら進んでいく。

教室に戻ると、すでに担任の姿はなく、国語教師が授業を始めていた。もう話を聞いているのか、風子はなにもいわれなかった。

後ろのドアの周囲は水たまりのようだ。風子は雑巾で拭いてはバケツに絞り、五分ほどかけてようやく拭き終えた。

自分の席に着く。座るとお尻が気持ち悪い。数時間で乾くだろう。それまでの我慢……いや、あと二年半……たかだか二年半の我慢だ。風子は机の中から、現代国語の教科書とノート、カンペンを取り出した。

先生の喋っている内容から、現在進めているページはすぐ分かった。前回途中で終わってしまったところの続きだ。教科書を開いてみると、そのあたりの数ページが破られて、なくなっていた。

風子の後頭部になにかがぶつかった。髪の毛に突き刺さった。

手に取ってみると、それは紙飛行機だった。しかも、教科書を破いて折ったものようだ。広げてみると、果たして予想通り、風子の破かれた教科書のページであった。

太いマジックで落書きされている。

「死ね、ブス」

「帰れ！」

「キモイ」

「バカ」

「死んでください」

第二章 弱虫

1

j o l

g o l f

a o m

j e f

g l f さつ k かー

g f l さつ かー

風子は両の人差し指二本だけで、たどたどしくキーを叩いている。色々な語句を入れては検索をかけてみるものの、一向に必要な情報を得ることが出来ない。

居間の隅に小さめのパソコンデスクがあり、そこには首振りディスプレイ型の i M A C が置いてある。風子は先ほどからずっと i M A C の画面と睨めっこし、キーボードと格闘している。

数年前に父親が仕事用に購入したパソコンだ。電子メールしか利用用途がないので、休暇を使って創作的なことをしようと思い、M A C はそういう方面に強いと知人に聞いて購入したものらしい。しかしパソコン購入前と購入後と、父の休日の過ごし方にはなんの変化もなく、相変わらずのゴルフ三昧。創作のその字もありはしないしかも、それから一年もたたないうちに職場でのパソコン利用用途が大幅に広がり、自宅にも様々なパソコン書類を持ち込む必要性が出てきたので、父は新しくウィンドウズの動くノートパソコンを購入したため、ますます M A C は必要のないものになってしまった。

M A C は家庭用にとそのまま居間に置いてあるものの、ほとんど誰も使っていない。風子の弟良信が稀に利用する程度だ。風子も過去に二、三回利用してみたことはあったが、いつも隣に良信がいて操作を教えてもらいながらだった。なので、パソコンを一人きりで触ってみるのは今日が初めてだ。

この時代に珍しいほど、プライベートによるパソコン利用の皆無な家族であった。

検索サイトで調べ物をするコツはある程度飲み込めていたつもりだったが、いざ自分一人でやってみるとなかなかスムーズにはいかない。漠然とした単語を一つ入れてみても数万件と検索されてしまいうし、確か複数の単語を入れて検索が出来るはず、とスペースキーを押したら単語間の空白が空くどころか先頭の単語がさらに変換されてしまうし。パソコンが、こんなに難しいものとは。

風子は先日街で出会った青年のことが気になっていた。バッグを取り戻してくれた長身の青年だ。蓮見製菓の社員だといい、評価用のお菓子をくれた。そして、サッカー選手でもあると聞いた。サッカー選手だというのならば、インターネットでなにか情報を得ることは出来ないかと考えたのだ。

ケーキ屋で勤務時間前後の時間帯、駅周囲の人混みに注意しているが、全く姿を見ることはなかった。当然といえば当然かも知れないが、なにか規則性があってあの時間に駅前にいたのならば、また見かけることがあるかも知れないと考えたのである。

別に彼に対して、特別な感情はなにもない。

風子は家族以外の人間と話そうとすると、あがってしまい、しどろもどろになってしまう。そんな自分がふと気がついてみれば彼ともともに話せていた。ただその一点が、彼の存在を忘れられないものとしていた。彼のことを全くなにも知らないのです、せめて名前くらいは知りたいと思ったのだ。インターネットで名前が分かるのなら、それでもいいし、駅前で会えたら、名前を聞いて、もう一度お礼をいおうと思っている。普段の風子にとっては実に大胆極まりない発想なのだが、何故か風子は、それを自覚していなかった。彼女は数年後、その時の自分の行動は神様のお導きだったのだと思うようになる。

しかし青年のなにがそんなに気になるのか、あらためて考えるほどに不思議である。取り立てて特別な魅力や話術があるとも思えな

いごく普通の青年だというのに。無理に決まっているけど世界一を目指すなどという独自の哲学といい、変わっているといえは変わっているが。

さっかー

サッカー

今度は正しくカタカナに出来た。そうか、日常的なカタカナ語は漢字と同じように辞書に登録されているのか。

サッカー 日本

ひんまがった矢印が書いてある大きなキーを押すと、入力した文字の下線が消え、スペースキーで空白を空けて次の単語を打ち込めるようになった。なるほど、日本語を複数入れる場合はこのようにしていくのか。やり方が分かってみればどうということではなかった。しかしこれはあくまで日本語入力方法の話であり、情報検索の要領の良し悪しとはなんの関係もない。

サッカーと日本という二つの単語だけで検索をかけたら二千万という膨大な情報が引つ掛かってきた。数十件分のタイトルと冒頭文章が一覧として表示されるが、どれもこれも関係ないものばかり。日本代表、日本サッカー協会、ジュビロ磐田、東京ヴェルディ、聞いたこともないようなものばかり出て来る。Ｊリーグ、Ｊ１、Ｊ２、という言葉が頻繁に出てくるが、確かそういうのとは違うように思う。

検索条件に、さらに「お菓子」と加えてみたが、日本代表人気にあやかったポテトチップやケーキ屋のホームページがたくさんヒットしてくるだけだった。

風子は発想を変えた。

新たな単語を入力。

蓮見製菓

二万八千九百件の検索結果。

一件目に表示されたのが、会社の公式ＨＰのようだ。

リンクをクリックして、そのＨＰを表示させる。本来は画像が表

示されるべき部分なのか、画面の上のほうに枠だけがあり、小さく赤いX印が付いている。推奨ブラウザ ウインドウズ インターネットエクスプローラー6と書いてある。パソコンに詳しくないのでよくは分からないが、MACだとこのように正常に表示されない箇所があるということなのだろう。

会社概要を見てみると蓮見製菓はお菓子を四十年近くも作り続けているかなり古い会社だ。会社設立当初は本社も工場も埼玉県にあったのだが、今から二十五年前に工場をこのF県に移転したのとこである。

今発売中の商品一覧、過去から現在に至るまでの発売商品年表、そのどちらにもこの間貰ったお菓子は無い。どうやら本当に発売前の新商品なのかも知れない。

蓮見製菓はこの近辺では有名だが、それは市内に大きな工場があるからというだけで、実際に本物のお菓子を見たことのある者は少ない。

過去に発売されたお菓子の一覧を見てみるが、やっぱり全く知らない物ばかりだ。

いや……十年前に発売されたスナック菓子「焼きタコ」、これは幼い頃に見た覚えがある。確かお店のお菓子売場で見たのではなく、町内子供会でオリエンテリングに参加した際に子供達に配られたお菓子詰め合わせの中にあつたような気がする。妙に苦くて全然美味いと思わなかった記憶が連鎖して甦ってきた。

小さな頃に食べたお菓子をHPで見つけただけ、実に他愛のないことなのに何故だかちよっぴり嬉しくなる。

寄り道をしてしまった。別にお菓子のことを調べているのではなかった。

気を取り直し、目的の情報を探し始める。HP内のこれとは思えるような文字やボタンを手当たり次第にクリックしてみる。

「その他の活動」という文字が目に入り進んでみたところ、「環境問題への取り組み」、「福祉活動」、「文化・スポーツ活動」、

等々の項目を発見。

あるならきつとここだ。「文化・スポーツ活動」をクリック。

囲碁、将棋、バレー、バスケットボール、テニスなど、蓮見製菓内の文化部運動部の一覧が上からずらりと表示されている。

サッカー部の文字が横棒線で消されており、その横に「JFL昇格決定！」と書かれた青い文字が点滅している。そこだけリンクになっており、クリックすると別のウィンドウが一枚開いてきた。真っ白なページに青く大きな文字で「蓮見製菓サッカー部 東北社会人リーグ優勝！ 全国地域リーグ決勝大会優勝！ 悲願のJFL昇格達成！」。そのすぐ下に通常サイズの文字で「地域リーグでほとんど負け知らず。毎節失点するものの、爆発的な攻撃サッカーで二位以下の追隨を全く許さないぶつちぎりの優勝。その勢いはとまることを知らず、全国地域リーグ決勝大会で全勝」。さらにその下には小さな文字で「蓮見製菓サッカー部はJFL昇格に合わせて来季よりハズミSCに改称します。今後とも変わらぬ熱い応援をお願いします。これからも一緒に戦っていきましょう！ オフィシャルHP制作決定。 予定URL <http://xxxxx.hazumi-sc.jp>」

そうだった。思い出した、JFLだ。

それにしても、ハズミSCというのはそんなに強いチームだったのか……

予定URLをクリックしてみると、すでにオフィシャルHPはしっかりと存在していた。ただしまだ制作途中なのかそれとも利用パソコンがMACだからなのか、ところどころ画像が抜けてしまっている。風子はサッカーそのものはさっぱり分らないし、全く興味もないので、寄り道はせずに「選手紹介」の文字を見つけるやすぐにそこに飛んだ。

画面が切り替わる。上から順番に選手全員の名前が背番号順に並んでいる。

写真がまったくないの、誰が誰だかさっぱり分らない。

とりあえず一番の選手名「加屋櫛雄平」をクリックしてみる。
するとまた画面が全部切り替わり、選手プロフィールが写真付き
で出て来た。

背番号 一

氏名 加屋櫛雄平 かやのぐしゆうへい

年齢 二十八歳

ポジション GK

生年月日 一九八X年三月三日

血液型 A型

身長 一八七センチ

体重 七九キロ

出身地 茨城県

出身校 市立H橋高校

前所属チーム

愛称 カヤ、グっさん

特徴 昨年は多少不安定だった守備陣を神懸かりセーブ連発で何
度も救った。オネアスと並ぶJFL昇格の立役者。今年もチームの
守護神に。

二十八歳にしては老けている、タレ目で愛嬌がある顔だ。

ブラウザーの「戻る」ボタンで先ほどまでの背番号順一覧に戻る。
続いて背番号二番の選手名をクリック。それほど多くのホームペー
ジを見たわけではないが、こういった場合には左端に常に選手一覧
が表示されているものではないだろうか。非常に見にくいホームペ
ージだ。

三番

四番……

五番……たいしたことではないが、自分と誕生日が同じだ。

六番……

七番……

……
本当にいるのだろうか、この中に……

十一番

十二番

十三番……

どくん。

風子は自分の心臓の音を聞いた。

十四番の選手の写真。

別に驚くほどのことでもなんでもないのに……
別に緊張するようなものではないのに。

背番号 十四

氏名 あきたかてつじ 秋高鉄二

年齢 二十五歳

ポジション MF

生年月日 一九八X年七月一日

血液型 AB型

身長 一八四センチ

体重 七〇キロ

出身地 北海道

前所属チーム

愛称 テツ

出身校 H流通経済大学

特徴 本職はボランチだが、どこでもこなせるユーティリティ性を持つ。JFLでも堅実な守備と巧みな攻め上がりに期待。得意のスルーパスでアシスト王を目指す。

間違いない、この人だ！

思わず立ち上がった瞬間、頭上でなにか風を切る音。がん、と壁に反射したそのなにかが風子の顔面を激しく直撃した。風子の足下には、軟式野球のボールが転がっていた。

「おい、大丈夫？ 家具壊れてない？」

弟の良信の叫び声。先ほどから家の前で近所の友達とキャッチボールをしていたから、おそらくどちらかの投球がすっぽ抜けてしまったのだろう。窓は大人の握り拳ほどのすき間しか空いておらず、狙って出来るような芸当ではない。

「家具は壊れてないけど……」

風子は鼻を押さえながら、窓を開けた。良信の友達が風子の風貌に驚いて、ぎゃつと叫んだ。風子の押さえた手から鼻血が漏れ、手も顔も真っ赤。ぼさぼさの長髪なので、人喰い鬼にでも見えたのだろうか。

風子はもう片方の手に持ったボールを投げ、良信に返した。

「ごめん姉ちゃん。……でもよう、自分でぶつけておいてなんだけど、姉ちゃんの運の悪さってすげえよな。お払いに行ったほうがいいかもよ」

2

確かに……運がないのかもなあ。

風子は地面に寝転がり、ふんわり浮かぶ雲を見上げていた。

寝転がるといっても自分の意思ではない。あまりの痛みに、倒れたまま身体を動かすことが出来ないのだ。

今日は普段と比較して穏やかな風が吹いているが、上空はかなりの強風のように、雲が次々と形を変化させながら、凄い速度で流れている。

広い広い空の下で、風子は大の字になっている。

風子の全身はずきずきと痛み、どの感覚がどこの痛みなのか自分でも全く分からない。

何故このようにしているのか、勿論理由はある。自転車で下校途中、遙か前方から歩いてくる男子高校生が視界に入り、逃げようと慌ててハンドルを限界まで回転させてしまったのだ。浮遊感、青空と地面とが反転し、地面に激しく叩き付けられ、自転車ごと転がり落ちた。五分ほど前の出来事である。

風子は制服姿の中高生を遠くに見ると、ついつい気付かれないうちに曲がって逃げようとしてしまう。それでよくアルバイトに遅刻しそうになる。

自転車に乗って農道から転落したのは、今週に入ってからもう二度目だ。

今回、不幸中の幸いだったのは、傾斜のなだらかなところに叩き付けられたために、田圃の中に落ちずに済んだということだ。前回 は田圃の中まで転がり落ちて、全身泥まみれになった。しかしその代償として前回と比較にならないほどの激痛に全身を襲われているので、やはりどちらが幸運かは人によって判断の分かれるところかも知れない。いやいや、どちらも不幸だ。

自分の名前が良くないのではないだろうか。「ふうこ」入れ替えると「ふこう」だ。風のように育って欲しいなどと以前に両親は話してくれたことがあるが、それもどうだか怪しいものだ。風子は二月五日生まれなので、音は単なる語呂合わせで、適当に漢字を当てただけではないのか。

もう五分以上たっているのに、まだ視界が回っている。右目と左目がそれぞれ勝手な方向を見ている。体の痛みは少しだけ治まってきたが、全身の痺れも酷く、肉体を動かそうと念じても全く主人のいうことを聞いてくれない。

いつまでもこんなところにいたら、アルバイトに遅刻してしまう。気ばかり焦る。

今日は次の日曜日を休みにしてもらおうように頼む予定でいる。土壇場のお願いなので、遅刻などしてしまったら店長に話を切り出しにくくなってしまふ。

突然、胸の上になにか重たい物が飛び乗ってきた。服の上からでも分かる重たく柔らかい不気味な感触。首をかるうじて少しだけ持ち上げることが出来た。眼球を精一杯下に向け、自分の胸のほうを見る。その重たく不気味な物がなんなのか分かった。それは黒くて大きな力エルだった。あまりの気色悪さに、一瞬気を失いかけるが幸か不幸か持ちこたえてしまった風子には現実との戦いが待っていた。

まるで蝦蟇の油に対抗するかのごとく、風子の全身から汗がどつと吹き出した。起き上がって逃げ出したいが、肉体が痙攣するばかりで、全く身動きが取れない。

口を開いても、どっちが力エルだか分からないような呻き声が漏れるばかりである。もうこの数年で、女の子らしい悲鳴の上げかたなどすっかり忘れてしまっていた。

風子が怪物の襲撃より救出されたのは、それから三分後のことであつた。

相手がまともに抵抗出来ないのいいことに、いつしか力エルは風子の顔の上に乗っていた。そんな力エルをどけてくれたのは、滝川光男という佐久間家のすぐ近所に住んでいる老人だった。

手を引つ張られて助け起こされた風子は、どもり口調で滝川氏にお礼を述べると、まだ痛みの残る体に鞭を打ち、全力で自転車を走らせた。

アルバイトには五分遅刻した。

3

陸奥西部開発鉄道高原宮線尾花沢方面の四両編成電車。短い編成の電車でおかつ進行方向に穂室市という小都市があるので、日曜日の昼だというのに電車の乗車率は百パーセント近い。ボックスシート車両は、風子が野々部駅で乗った時点ではかなりの席が空いていたのだが、隣に人が座ってきたら自分がどうなってしまうか分

からないので、車両連結部分付近にずっと立っているうちに、段々と電車が混雑してきた。

平日通勤時間帯の混雑に比べればどうということはないのだろうが、普段電車に乗ることのない風子にとっては、耐え難いほどの人口密度であった。一駅また一駅と、穂室駅に近づく度に車両内の人数が増加していく。

逃げ場所を失わないように、ずっと立っていたというのに、それでもだんだんと気持ちがいづれつめられていく。

風子は、穂室駅より二駅手前の野又新田駅のまたしんでんで下車するつもりだ。

穂室駅の近辺はオフィスビルや若者向けのスポットがたくさんあり、規模こそ天地の開きがあるものの東京という渋谷原宿のような場所だ。日曜日なので、そこへ向かう電車の中は私服の若者が多い男女ともお洒落な服に身を包んでいるというのに、風子はぶかぶかのオーバーオールやジーンズ、中には赤いＴシャツ。どんなに服装に無頓着な田舎娘でも、これよりは遥かにまともな格好をしているだろう。

左右どちらの窓からも、見えるのは田圃と遠くの山々ばかりの殺風景。ただ、少しずつ住宅、高い建物が増えて来ている。

車内アナウンス。まもなく野又新田駅だ。

風子が降りようと思っていたドアには二十歳くらいの男が二人寄りかかっていた。……どうしよう。降りられない。

ボックスシートの車両は通路が狭く、そこにも何人が立っている者がいるため、とても向こうのドアにまで移動出来そうもない。車両の連結部分にいたので、隣の車両を見てみるが、やはり同じように若者がドア付近に群がっている。

ドアに向かって歩き出せば、降りようとする意思を察してどいてくれるかも知れない。と、数歩歩いてみるが、二人の若者はお喋りに夢中で全く気付かない。

電車が停車し、ドアが開いた。やっと若者がどいた、と思ったら、どっと人の群れが乗り込んできた。

降ります！ などと心の中で叫んでいても伝わるはずもない。ドアは閉まった。乗り過ごしてしまった風子を乗せて、電車は走り出す。

仕方がない。次の駅で引き返そう。

しかし次の駅でも降りることは出来なかった。最大限の勇気を振り絞って、「あのう……」とか細く呟いた瞬間にドアは閉まってしまった。ドアが開いてから勇気を振り絞るまでにあまりに時間がかかり過ぎたのだ。

次の穂室駅でほとんどの乗客が降りたため、人混みに流されるようにして、ようやく電車から降りることが出来た。

向こうのホームに、反対方向に行くらしい電車が停車している。

風子は急いで階段を降り降りし、ホームを移動したが、電車のドアに辿り着くまさにその直前、ドアが閉じてしまった。

風子を置いて、電車は走り出す。

溜息。本当に自分はなにをやっても駄目だ。電車の乗り降りすら、まともに出来ないなんて。

腕時計の針を見る。午後一時七分。

もう、開始時間を過ぎている。

せつかく今日の仕事を休みにして貰ったというのに。

充分に余裕を持って出たはずなのに……

ホームに置いてある時刻表を見る。次の電車が来るのは三十分後だ。これは不運ではない、単に自分が馬鹿だったのだ。

途方に暮れながら、ベンチに座り電車を待った。

電車の到着まで時間を潰そうにも、なにも持ってきていない。駅構内には売店もない。

ホームの上を歩いている鳩の動きや模様を観察したり、数を数えたりなどして時間を潰した。

などとやっているうちに、退屈な数十分の時も流れ、ようやく野々部方面の電車がホームに到着した。六両編成だが、ほとんど誰も乗っていない。風子の乗り込んだ車両も、老人が一人座っているだ

けだった。

風子は腰を下ろす。この時間の野々部方面だし電車が混んでくることはないだろうが、でもなんだかボックスシートは怖いので、ドアのすぐ横にある三人掛け横並びの席に座る。

ぶかぶかのオーバーオールに、何年も伸ばしっぱなしの長い髪の毛、大きなスポーツバッグ……単なる田舎娘というより、家出少女か訳ありの逃亡者みたいだ。

周囲の眺めを高いビルが埋め尽くしていたが、発車して二分も経過しないうちに、風子の見慣れた田圃だらけの風景になる。

次の駅で老人が降りたため、風子は一人きりになった。

なんだかとても不安な気持ちになった。同時に情けない気持ちになった。普段自分のことを人間嫌いと思っているくせに、一人であることが不安になってしまふなんて。

十五分後、風子は再び野又新田駅に到着した。今度は誰も降車を邪魔する者はいない。

改札で駅員に切符を渡し、西口から外へ出た。

太陽が真上からざらざらと照りつけている。風子はあらためて、自分が汗だくになっていることに気付いた。ハンカチを取り出して、額や腕の汗を拭った。

春の終わりの五月二十五日。初夏を通り越して、真夏日であった。小さなロータリーには、タクシーが三台待機している。個人商店、小さな不動産屋、コンビニエンスストア、くらいしか店舗がない。あとは民家がいくつかあるだけだ。

駅の切符券売機横に、この周辺の案内地図があつた。そして、その地図上にこれから目指すべき場所を発見した。その場所をしつかりと脳に刻み込む。仕入れた情報の分だけ、嫌な記憶が流れ出ていくてくれればいいのに。たかだか電気信号の流れだというのに、脳味噌の仕組みとは何故にかくもままならないものか。などと虚しいことを思いながら、風子は一人、陽炎に揺れる道を歩き出す。

少しだけ歩くと、目的地はすぐ確認出来た。まだ離れてはいるが、

周囲に高い建物がないため、照明装置が見えていたから。

確かインターネットのHPには、駅から徒歩十五分と書いてあった。自分は鈍足なので普通に歩いていたら二十分以上かかるかも知れない。そう思って、少し足の動きをはやめた。その甲斐もあり、歩き始めて丁度十五分で、目的地に辿り着いた。

華鳴市立烏ノ山陸上競技場。

収容人数が二千人強という小さな競技場だ。

太鼓の音、人の叫びが聞こえてくる。

建物の入り口で、係の老人にとめられた。バッグの中に危険な物が入っていないかをチェックしているとのこと。風子はバッグを開けて、すかさずの中身を見せた。続いてチケットの確認を求められた。オーバーオール、胸の大きなポケットから薄っぺらい札入れを取り出し、その中に入っているチケットを見せた。一昨日、野々部駅前にあるコンビ二エンスストアの発券機で購入したものだ。

老人の前に置かれていた長いテーブルの上にもチケットが山積みになっている。確か当日券は二百円高く、千円のはずだ。

「もう、後半始まっちゃってるよ」

老人は風子に何枚か紙を手渡した。JFLの日程表や、スポンサー企業のチラシのようだ。

「……は、はい。で、電車、おお、降り損ねて……戻ってきて……」

「居眠りでもしちまったのかい。こういうド田舎は電車の本数が少ないんだから乗り越しには気をつけないとね」

「どど、どうもすみませんです」

風子は深く頭を下げた。

「はは。おれに謝っても仕方ない。ほら、早く行きな。本当はチケット代を半額にしてやりたいけど、おれにどうこう出来るもんじゃないし」

老人が立っているすぐ横に白く塗られたコンクリートの階段がある。細かく直角に折れながら、垂直に伸びている。階段を昇りきり、狭い空間から一歩前に出ると、一瞬にして壮大な眺めが変わる。す

ぐ目の前には陸上のトラック、その中にコートがあり、なにやら試合が行われている。ぐるりと取り囲むように、遠くには山がそびえている。

強烈な日差しが芝に反射して、上からも下からも熱気が叩きつけられてくる。しかしここは非常に風が強く、汗だくになっていた風子はむしろ涼しさを覚えた。

かき鳴らされる大きな太鼓の音。人々の絶叫。

……自分は一体、なにをしているのだろう。

ここになにをしに来たのだろう。

なにを探しに来たのだろう。

目の前で行われているのは、JFL前期第十二節、ハズミSC対三徳製薬……サッカーの試合であった。
さんとくせいやく

来る前は、観客席はコートの回りを一周しているのかと想像していたのだが、そうではなかった。四辺のうちの一边にしか入場できるスペースがない。四人掛けの長椅子が階段状に十段ほど設置されている。風子は今、その一番上の、通路部分に立っている。背後は長い壁で、今出てきたばかりの出入り口や、トイレ、物置、機械室、放送席がある。

収容人数の非常に少ないスタジアムと聞いていたので、どんなに混雑するかと決死の覚悟をしてきたのだが、予想に反して客はほとんどいない。ぼつり、ぼつり、と人が座っている。しかし両脇の人工密度は凄まじく、狭い場所に百人くらいがひしめき合って、音頭取りの太鼓の音に合わせて声援を送っている。

全て自由席とのことなので、どこに座ってもいいらしい。こんなに空いているのに、何故込み合っている席に座るのか、風子にはその感覚がさっぱり理解出来ない。

ふと気付いてみれば、応援している人の多くが、選手達と同じような服を着ている。そういえば、テレビで放送している野球も、たまにチームのユニフォームを着て応援している人が映るが、しかしここはその比重がやたらと高い。サッカーの応援というのは、そう

いうものなのだろうか。それとも、ここに来ている人だけが特殊なのだろうか。

陸上のトラックの中に、芝の生えたエリア、サッカー用のコートがある。その中で、オレンジのユニフォームとブルーのユニフォーム数十人が入り乱れ、一つのボールを追ひ、戦っていた。

向こう側の金網には、両チームの選手を応援する横断幕でびっしりだ。

駆け抜ける青い閃光 三徳製薬

クラッシュマン 義昭

気分は日本代表

東北最強 ハズミSC

決める 有村

轟け！ ゆうじ

ぶつちぎれ 高速ボランチ TETSU

選手の胸に書いてある文字は遠くではつきり読めないが、オレンジ色のユニフォームを着ているのがハズミSCのはずだ。

電車を乗り過ぐすというへまをやらかしてしまったせいで、もうすでに後半戦だ。

ハズミSCはもう何点取ったのだろう。

スコアボードを探した。てつきり電光掲示板に得点表示がされていると想像していたのだが、まるで草野球のように地面に台が置かれているだけだった。そこに数字板が張り付けられている。その横には、学校の校舎で使っているような大きなアナログ時計が置いてあり、試合時間を表している。

果たして〇 五でリードされていた。

風子は自分の目を疑った。スコアボードの読み方が誤っているのかと思い確認をしたが、結果がくつがえるわけではなかった。

ハズミSCはほとんど無敗でJFL昇格を果たした強いチームではなかったのか。

国旗台には、国旗、両脇にチームの旗が上がっており、風に激し

くなびいている。離れていても、ばたばたという音が容易に想像出来るほどだ。風子の髪の毛は旗のなびく方向に合わせてあつちに引つ張られ、こつちに舞い踊り、落ち着かない。

風子はグラウンド上のハズミSCのユニフォームの中に背番号十四番を発見した。

秋高鉄二……

遠めではあるものの、あのHPに載っていた顔だ、あの駅前で出会った顔だ。

随分と後ろのほうのポジションだ。ボランチというのは攻撃と守備のどちらかでいうと守備の人なのか。少しがっかり。後ろじゃあ、得点する機会なんて全然なさそう。

風子はサッカーのルールをほとんどなにも知らない。相手ゴールにボールを入れれば得点。最前方にいるのがフォワード、後方で守るのがディフェンダー。ゴールキーパーは手でボールを持っても反則にならない。その程度の知識しかない。

延々と突っ立っていても仕方がないので、席に座ることにした。

チケットには全席自由と書いてあるので、どこに座ってもいいのだろう。風子はぐると周囲を見回し、席の空き具合を確認した。

人が密集しているのも嫌だが、一人きりでぽつんと座っていても目立ちそうで好ましくない。密集している場所から少しだけ離れた人のまばらなところに腰を下ろした。

○ 五という得点差の理由が、ゲームを少し見ただけで素人の風子にも分かった。相手のほうが圧倒的に、ボールのキープ時間が長い。宙に浮いたボールも、ほとんど相手が拾ってしまふ。背の高さの問題ではなく、ボールの飛んで来る位置を予測する能力が相手のほうが高いように思える。

少し落ち着いたところで、先ほど係の人に貰った紙をしてみる。JFLの日程表、今日の試合のメンバーとフォーメーションの書かれた紙。やはり、秋高鉄二は後ろのほうのポジションだ。

風子のほうに、ビール缶を片手にした赤ら顔でほろ酔い気分の親

父がふらふらとした足取りで近寄って来た。風子の二つ隣の席に座った。条件反射的に立ち上がり逃げ出したくなかったが、それも失礼なことのでぐつと堪えて体をベンチに押さえつけた。親父の足下にはバッグと紙袋が置いてあったので、おそらくはトイレから戻ってきたのだろう。

風向きが一定でなく、絶えず変化している。酒臭くなったり遠のいたり、ピッチ上の攻防よりも目まぐるしく変化している。

ピッチ上での勝負に視線を戻す。その瞬間、両応援席から絶叫にも似た大きな声があがる。ハズミSCのDF同士の横パスを、三徳製菓のFWにカットされてしまったのだ。迷いのないドリブルに、ハズミDF慌てて追うも間に合わず、相手FWはハズミSCのGKと完全に一对一だ。三徳製菓のFWは左足を振りぬいた。GKは至近距離からのシュートを、右足を横に伸ばし防いだ。反射神経というよりは、ほとんど経験から来る勘による動きだろう。鈍い音とともに、ボールが真上高くに上がる。落下地点目差してFWが素早く詰め寄ってくるが、GKは軽く飛び上がり両手でボールをキャッチ。GKのファインプレーに風子はほっと胸をなで下ろす。いつの間にか、両手を握り締めていた。手がじつとり汗ばんでいる。

「いでででっ！」

横から酔っぱらい親父の悲鳴が。風子の長髪が強風にあおられ、鎌首をもたげ獲物をしとめる蛇のごとく親父目がけてグサリグサリと突き刺さったのだ。

「ど、どうも……」

風子は髪の毛を押さえつけ、深く頭を下げた。

スタジアムの外にも風は吹いていたが、そよそよという程度で、扇風機の弱風程度もない。ところがこのスタジアム内ではどのような地形効果が働いているのか分からないが凄風で、汗が吹き飛ぶどころか肌寒いくらいだ。

三徳製菓のラフプレーに審判の笛が鳴り、試合が一時中断。その間、風子は改めてそれぞれの応援団を観察していた。どちらにも選

手と同じユニフォームを着ている者が多い。一体、どこでそんなもの売っているのだろう。そこら辺のお店でユニフォームが売られているほど、JFLというのは有名なチームばかりなのだろうか。

サッカーの試合なんて、男性客しかいないと思っていたが、意外に女性客も多い。密集しているところは、もう誰が誰だか分からない状態だが、離れたところを見れば、中年夫婦や若いカップル、女性同士。

一番前のフェンス越しに女の子が四人、全員背番号六のユニフォームを着ている。ハズミSCの六番がボールを持ったびに、なんとも言葉になっていない黄色い歓声を上げている。

インターネットのHPで写真を見たことがあるはずだが、よく覚えていない。選手までの距離が離れていて、顔ははつきりとは見えないが、きつと女の子に受けるハンサムな顔立ちなのだろう。なるほど人によつてはそういう楽しみかたもあるのか、と風子は感心した。

また、彼女らが歓喜の声を上げた。しかしそれもつかの間、ハズミ六番がキープしていたボールはあっさりと相手に奪われてしまう。しかも、彼女らの落胆の溜息が終わるか終わらぬかのうちに、そのままドリブルで持ち込まれゴールを決められてしまった。

六点差に広がった。

三徳製薬側の応援席から雄叫び、太鼓の音。巨大な旗が上下に大きく振られる。

「ただいまの得点は……後半十五分　三徳製薬　七番　阿部浩一選手
のゴールでした」

若い女性のたどたどしいアナウンスが流れる。

ハズミSC側の応援団は気を落とすことなく、熱い声援を送り続ける。もう試合も終盤、こんなに差をつけられていて、勝負は決まっているのに、なんでみんなこんなに一生懸命に応援が出来るのだろう。風子には理解出来なかった。

ハズミSCはなんとか一点を取ろうと、危険を犯してやや前方に

選手を集めているようだ。そんな中、ハズミ十番が味方からのパスを受け損ない、相手に取られてしまった。ほとんど人のいないハズミSCの陣地を、三徳製菓の九番がボールを少し長めに蹴りながら、猛烈な勢いで走って行く。

また失点か。風子は諦めた。

その時、後ろから追いついてきたハズミSCの六番が、先ほど軽いプレーでピンチを招いたことの汚名返上とばかりにスライディンググタツクル、ボールを奪い返した。相手の九番は、大袈裟すぎるほどに大きく宙を舞い、地に転がった。

また、両チームの応援席から爆音のような叫び声上がる。ハズミSCの側からは歓声、三徳製菓の側からは怒声、罵声等だ。

「ぎゃっ！」

風子のすぐそばで、歓声でも怒声でも罵声でもない叫び声が上がった。つい頭髪を強風から守ることを忘れ、また酔っぱらい親父に髪の毛が刺さってしまった。

「ご、ごめんなさい」

親父は、頭をぐりんぐりと回しながら、片手を上げた。気にするな、ということらしい。

風子は立ち上がると、自分の射程距離に誰も入らないよう、周囲に人のいない席へと移動した。背後に酔っぱらい親父の大きなげっぷが聞こえてきた。

審判の、長い笛の音が響いた。

試合が中断する。

審判は黄色いカードを高々と上げていた。ハズミの六番に向かつて。今のプレーが乱暴な行いと判断されたのだ。そして、その手を下げたかと思うと、今度は赤いカードを出した。

ハズミ側応援席から壮絶なブーイングが起こる。

外国人選手と思われる肌の黒いハズミ十九番が、審判になにやらゼスチャーをしたところ、その選手にも黄色いカードが向けられた。怒る十九番を、必死に十四番、秋高鉄二がなだめている。

赤いカードを出されたハズミの六番は、ピッチを出て行った。

こうしてハズミSCは六点差で負けているのみならず、一人少ない人数で戦うこととなった。

応援団や、六番ユニフォームの女の子たちから、審判への罵詈雑言が飛ぶ。

「へば審判」

「家餅のジャッジのほうか、まだマシだぞ」

「ボールに行つてたろうか！」

「倒れりやなんでも笛かよ！」

なんだろう、ボールに行つていたつて。風子にはどういう意味なのかさっぱりだ。

確かあの黄色い切符みたいなのは、イエローカードといって、危険な行為に対する注意で、レッドカードというのはもつと乱暴なプレーをした時に出るものではないのか。レッドカードの時には、退場になるはず。イエローだけが出る、レッドだけが出る、というのなら分かるが、イエローが出て続いてレッド、これはどういうことだろう。レッドよりさらに悪質なので、イエロー分を追加、ということだろうか。風子はサッカーのルールなどほとんど知らないのいろいろと考えてしまう。

ハズミSCは選手の交代をした。どうやらFWの選手を下げて、DFの選手を入れたようだ。

せめてこの点差を守りきるつもりだったのかも知れないが、しかし実力や人数差の問題は如何ともしがたく、さらに二点を失った。

両チームへの熱い応援は続く。

先ほど審判への抗議かなにかで警告を受けていたハズミSC十九番の黒人選手、彼がボールを持ちドリブルしようとしたところを、今度は青いユニフォーム、三徳製薬の選手がスライディングで転ばせてしまった。

審判が笛を吹いて、ゲームを止める。

みんなぞろぞろと、三徳製薬のゴール前に向かって行く。DFの

選手も、長身の二人が小走りに向かう。

十九番の選手は、自分が転ばされた地点にボールを置いた。審判がボールを置く位置を微妙に修正させる。そのそばにもうひとり、選手がいる。どちらが蹴るのだろう。ゴール前にたくさんの選手達がごちゃごちゃと動いている。そこに向かってボールを蹴るようだ。

ドン ドン ドドドンドン（太鼓の音）！

ゴール ハズミ ゴールゴール！

ゴール ハズミ ゴールゴール！

ハズミSCの応援席から、三徳製薬ゴール前に密集しているハズミSCの選手に向けて声援が送られる。

審判の笛が鳴る。

オレンジ色のユニフォーム、十九番の選手がボールに駆け寄り、右足で蹴った。

ボールは綺麗な弧を描き、三徳製薬ゴールへと向かう。

三徳製薬のGKはキャッチしようと身構えたが、強風のため落下地点の予測を誤った。慌ててボールを追うが、相手マークを外してするりと飛び出したハズミの十四番、秋高鉄二が大きくジャンプ、頭を捻って額をボールに打ち付けた。ボールは急角度で地面にワンバウンドし、ゴールネットを揺らした。

選手も応援席も、オレンジ色のユニフォームを着ている人間はみな叫び、喜んだ。ハズミSCの選手達が秋高鉄二に駆け寄って行く。秋高鉄二は両腕を高く上げた。

激しい太鼓の音がかき鳴らされる。

ひよっとして、ゴール……決めたの？

風子は急激に手が汗ばむのを感じた。

観客席がざわつきはじめる。

サイドにいる審判の一人が、赤い旗を高く上げている。

応援席から、落胆に似た声が漏れる。

両チームの選手達は自分らのポジションに戻って行く。

三徳製薬のGKが前方にボールを大きく蹴飛ばした。

いつまで待っても、スコアボードの数字はなにも変わらない。

今のは、ゴールではなかったのか……

でも何故だろう。別に相手を倒したりといった反則をしたようにも見えなかった。サッカーのルールは複雑だ、ちっとも分からない。審判が片手を上げ、長く笛を吹いた。

試合終了。

ハ　〇の大敗だ。

両チームの選手たちは、挨拶を交わし合ったあと、それぞれの応援席に向かった。両チームとも淡々としているように見えるが、その表情を見るとまとう空気の全く異なることが分かる。

三徳製薬の選手は当然歓喜、拍手で迎えられる。

負けたハズミSCの選手たちはすまなそうに頭を下げる。だが、三徳製薬同様に激しい拍手に迎えられた。

「次だ、次！」

「下向いてんじゃねえ！」

「次こそゴールだぞ！」

荒っぽい励ましの声。

周囲に合わせ、風子も選手達に拍手を送った。

4

面白かったといえば面白かったような、虚しいといえば虚しいような、自分の気持ちのことながらなんだかよく分からない。分かっているのは過密日程の旅行でもしてきたかのように非常に疲れているということ。無理もない。電車に乗ったことなど数年ぶりだったし、スタジアムで競技観戦など生まれて初めての経験だ。

視覚聴覚を刺激する様々な見慣れぬ情報に、目も心も疲れてしまった。

夕方五時過ぎに帰宅すると、着替えもせずにベッドにつつぶせになった。

これは果たして趣味になるのか。明日への活力を貰うところか、

全ての精気を吸い取られたかのように気怠い。試合を黙って観戦してただけなのにこの様だ。大きな声で応援しているファンの人たちは大変だ。きっと、遠くから来ている人だっているだろうに。

風子の脳裏に、秋高鉄二のヘディングシュートがゴールネットを揺らした時の記憶が甦った。みんなが集まってゴール前でごちゃごちゃひしめきあっていて、離れた場所からそこを目がけてボールを蹴って。集団から一人抜け出した秋高鉄二がジャンプ……

ネットを揺らした瞬間の、どっと沸いた周囲の歓声。自分も、とても手が汗ばむのを感じた。

あの時、自分はこういう気持ちを感じたのだろう。自分のことながら、よく覚えていない。

ただ、悪い気分ではなかったように思う。どちらかといえば、その反対ではないだろうか。

得点になつていたとしても、○ 八が一 八になるだけなのに。

素人が訳の分からぬままにただ観戦していてもこうした気分になるくらいだから、好きなチーム、好きな選手がゴールを決めればさぞ嬉しいだろう。

なるほどファンの人たちはそういう喜びを味わうために時間と金を使い遠くから観戦に来るのか。負けたから意味がないという訳ではないのだ。

でも結局、あの時のシュートはゴールとは認められなかった。何故だろう。別に反則をしたようにも見えなかったのに。……といってもサッカーの反則なんて、選手を殴ったり蹴ったりしてはいけないのだろうな、等とその程度の認識しかないが。

なんだか釈然としない。

風子はベッドから起き上がり、一階へと降りた。

居間の隅にある、首振りディスプレイ型のiMACの電源を入れる。ジャーンと音が鳴り、起動画面が出てくる。スリープにしておくと起動が早いと弟の良信にいわれたことがあるが、そんな専門用語をいわれても混乱するだけだ。

WEBブラウザを立ち上げ、ハズミSCの公式ホームページへ。
もうURLはブックマーク登録してあるので、迷うことはない。
試合速報をクリック。今日の試合についての情報が表示される。
結果は風子の知っている通り○ハの大敗だ。

五月二十五日

晴れ

観客 八十三人

主審 萩原滋樹

副審一 安腹光太郎

副審二 加藤流三

第四の審判員 田之坂典弘

【データ】

FK ハズミSC 三 三徳製薬 十三

CK ハズミSC ○ 三徳製薬 七

シュート ハズミSC 五 三徳製薬 二十一

警告

ハズミSC 五分 渡辺輝彦 二十五分 秋高鉄二 四十二分

与那嶺怜二 六十六分 与那嶺怜二

三徳製薬 三十八分 都野寿 八十六分 阿部浩一

得点

ハズミSC

三徳製薬

十一分 柏倉秀樹 十七分 阿部浩一 三十五分 近藤健太 四

十三分 吉次健一 四十四分 吉次健一 六十分 阿部浩一 七十

七分 波田英二 八十二分 吉次健一

【総括】

序盤は若干守備的になりながらも、うまくボールを回し、優位に試合を進めることが出来た。しかしカウンターから一発を食らうと守備陣が崩壊。連携が整わないままに、全員の意識だけが前に前に向いてしまい、大量失点に繋がってしまった。

【佐倉監督のコメント】

非常に残念な試合だと思っている。相手は確かに首位争いをして
いるチームだが、そんな中で序盤はよくやってくれた。しかし我々は
ボールを回させられていただけで、一瞬のミスによりカウンター
一発でズドンとやられてしまい、後はもう相手の一方的なペースだ
った。

残念な試合だったというのは、負けたことがではない。最初の内
容のまま続けて負けたのなら、次節へと繋がる負けになっただけな
のに、それが非常に悔やまれる。でも下を向いたら終わり、修正点
がたくさん出たことを成長できるチャンスと思って、前を向いて練
習していく。

【轟佑司選手のコメント】

サッカーは何か起こるか分からないスポーツ。最初の決定機で僕
が決めていけば、もしかしたらまったく違った展開になっていたか
も知れない。決定力を上げるためには練習するしかない。とにかく
今日は完敗です。相手は本当に強いチームだった。JFLのレベル
の高さを今日ほど実感した日はない。

【秋高鉄二選手のコメント】

一点取られてはたばたしてしまう癖をはやく直さないといけない。
今の監督のもと、やることは練習でしっかり確認しあっているの
で、あとは強いメンタルをもって実践していくだけ。僕らの方向性は決
して間違っていない。

（残念ながら最後のシーン、岡崎選手がオフサイドを取られてし

まいりました)

意地で一点でも返したかった。そうすれば、強豪相手に一点取ったという結果を持って、次に望むことが出来た。サポーターのみんなにはいつも申し訳ないと思うし、感謝している。次こそは必ず勝って、勝利を分かち合いたい。

【加屋櫛選手のコメント】

八点も取られて、何も言うことはありません。次頑張ります。

どうやら、あのヘディングによるゴールと見えたシーンは、オフサイドという反則のために得点と認められなかったのか。

それと、六番の選手がイエローカードとレッドカードを連続して貰って退場させられた件。イエローカードというのは、同じ試合で二枚貰うと、レッドカードを一枚貰うのと同じで、退場させられてしまう。風子が観戦を始めた時点で、もうすでに一枚貰っていたのだ。

色々な不明点が判明して、気持ち少しすっきりした。

ただ、一番の疑問点は、「ハズミSCは本当に強いチームなのか」ということ。

監督のコメントから、今日の対戦相手が強いのは分かるが、それにしても為す術なしの〇ハの大敗は酷いのではないか。

公式HPに本年度の試合結果が全て記録されていた。開幕戦で〇〇で引き分けたきり、あとは全敗している。それだけではない。

開幕してから十試合以上も行われているというのに、なんと一得点もあげていない。

類を見ない圧倒的な攻撃力で、ぶっちぎりのナンバーワンでJFL昇格を決めたのではなかったのか。そんな程度では通用しないほどに、JFLのレベルが高いということなのだろうか。風子は煙に包まれたように、すっかり混乱してしまった。だがその答えはすぐに得られることになる。「ハズミSC」で検索してみたところ、フ

アンのための掲示板があつた。

2000年7月20日 16時48分

あれ、ぜつたいオフサイドじゃねえよ。テツのゴールだよ。

2000年7月20日 16時59分

切り替えよう。次、次。

……つて、次はエアーズ和歌山じゃん……勝てる気しねえ。鬱だ。

2000年7月20日 17時01分

ハット ハット 吉次ハット。ま、糞チーム相手に何の自慢にもならんけどね。ほんとお前ら弱すぎ。

2000年7月20日 17時06分

他サポは来んじゃねえ。うぜえ。いちいち書き込むなバカ。別にお前が強いわけじゃねえだろ、このオタク野郎が。

2000年7月20日 17時13分

オネアスがいればなあ。一人で点取ってくれるから、みんなで守るだけでよかったのに。

2000年7月20日 17時17分

そうだけど、オネアスに頼ってたから、日本人が成長しなかったんだぞ。たとえ降格しようと、オレは付き合うぞ、何年でも。チームが成長していくのを。

などといった書き込みを見て、ようやく風子は理解した。

ハズミSCは弱いのだ。

去年までは社会人リーグという一つレベルの低い土俵で戦っていたのだし、オネアスという選手の個人技で点を取って、残り全員で

守っていただけ。超攻撃型のチームでも何でもなかったのだ。

オネアスのことを検索すると、舞うような華麗なドリブルはオネアスの翼と呼ばれ、数人掛かりでないとまず止められない凄まじいものだったらしい。社会人リーグに外国人選手はほとんどいないので、これはもう反則級の強さであったことだろう。相手選手が数人掛かりでマークしなければならぬ分だけ、ハズミ側には人数的な余裕が出来る。それでも毎試合失点していたというのだから、もしも日本人だけならば……などと想像してみるまでもない。現在も外国人選手が一人いるらしいが、蓮見製菓でアルバイトしていたことがきっかけで加入したというだけ、身体能力は高いがサッカー経験が浅く助っ人と呼べるレベルにはほど遠いらしい。

今日の八点差のボロ負けも当然の結果だったのだ。

インターネットでサッカー用語集のページを探し、気になっていた単語「イエローカード」「レッドカード」「オフサイド」「ボランチ」について調べた。

なるほどなあ、と思わず感心させられたのがオフサイドというルールだ。聞いたことのある言葉ではあったが、意味などは全く知らなかった。

もしもこのルールが存在しなかったら、フォーメーションを組んでどう効果的に敵陣を突破していくかという戦術的な面白みが全くなくなり、ゲームが非常に大味なものになってしまうだろう。

他の用語を全然知らないせいもあるが、サッカーという競技は詰まるところオフサイドというルールがあればこそ成り立っているのではないかと思った。

5

下平耕平、年齢二十六歳。ケーキ屋のアルバイト店員だが、人員が頻繁に入れ替わる中で七年以上も居続けている古株で、待遇や発言権など実質的には副店長といっても過言ではないくらいだ。

下平の実家はそれほど遠くない。野々駅から電車で三十分ほど。

穂室という大きな駅の一つ手前にある南各村が最寄り駅だ。しかし高校二年生の夏より、この街で一人暮らしをしている。野々部駅から徒歩十分の木造アパートだ。かえって高校への通学が遠くなったが、大地震がくれば真っ先に倒壊しそうな古アパートはその分家賃が破格の安さだったし、なによりも早く親元から自立をしたかった。中学二年の頃から不良友達と付き合うようになり、隣の中学と喧嘩ばかりしていた。親はよく学校に呼び出されていた。父親は先生の前でも家庭でも決して息子を叱ることはしなかった。呼び出されても、ただひたすら先生に謝るばかりだった。主義でやるなら立派だが、単に息子が怖いだけだった。アルコールの力を借りてでしか、誰に文句をいうことも出来ない父だった。母親も似たようなものだった。

いつも両親が自分に向けてくる怯えるような視線がたまらなく辛かった。たまらなく淋しかった。

その思いが不良行為をエスカレートさせていくことは、彼の場合、なかった。そこそこガラの悪い生徒という地位のまま、ただ家から出たい思っただけが次第に大きくなっていった。

実家でこんな家族と生活をして、自分が駄目になっていくのが怖かった。

一人暮らしを開始した最初の頃は頻繁に友達が遊びに来たり、彼女が泊まりにきたりと賑やかだったが、そのうちにまず友達が来なくなつた。下平がろくに口もきかず、勉強机にかじりついていたらだ。

彼は大学に進学したかったのだ。

そんな様子であっても、彼女はたまに食事を作りにきてくれたし、泊まって行くこともあった。せつかく一緒に布団で寝ているというのに、付き合い始めた頃のように彼からセックスを求めることはほとんどなく、たいていが彼女から誘う。しかもことを終えたあとに、愛や夢を語らう時間もなくて彼はとっとと眠ってしまう。起きている時もほとんど会話がない。手をつないで歩くこともない。やがてこ

の状況に彼女が耐えられなくなり、二人の関係は破局を迎えた。

一人暮らしを始めてから約一年後、下平は無事に希望の大学に合格した。合格が決まるとすぐに現在働いているケーキ屋ノワゼットでアルバイトを始めた。そうして学費を稼ぐつもりでいた。

しかし大学は遠く、スケジュール的にもアルバイトとの両立は難しかった。また、その頃はまだ時給が非常に安くて、生活に手一杯でとても学費どころではない状況だった。

蝉の鳴く季節を迎える前には、退学届を出していた。

落ちこぼれが猛勉強してそこそのレベルの大学に入ったというのに勿体ない、と会う人会う人にいわれた。後から言えば単に良い大学に入って良い企業に就職して、親を見返してやりたかっただけなのかもしれない。

大学を続けたいなら、いくらでも方法はあったはずだ。親に金を出して貰ってもいいし、大学の近くなら割のいい深夜アルバイトだってある。しかし彼は親から離れたことで、親への反抗心も薄れてしまい、それにより大学に行く意味自体を見失ってしまったのだ。

結局そのままケーキ屋でアルバイトを続けている。

その頃は店長と、社員が一人、それと自分を含め五人のアルバイトがいた。ケーキを焼く技術を持っているのが店長とその社員だけだった。

下平は飾り付け、陳列、それとケーキ作りの簡単な補助をしていた。

こき使われるだけで、全然面白くなかった。しかし、慣れてきてある程度の変領をつかめていたし、少し自給もアップしたし、新しいアルバイト先を探すのも面倒だった。

いつしか何年もの時が過ぎていた。嫌な社員は体調を壊してこの仕事から引退した。

いつしかケーキを作ることが楽しくなっていた。

ふと気付いてみれば、お店は現在のメンバーになっていた。

いつしか将来に不安を覚えるようになっていた。

この仕事を捨てるべきか、それとももつと技術を盗んでいつか自分の店でも持とうか。

将来のことを考えると、楽しくもあり、不安でもあった。

もしもお店を持てたらまずは店員二人くらいのささやかな規模から始めよう。引き抜くならサクちゃんかな。

佐久間風子はなにかと自分を卑下するようなことばかりいうが、下平は彼女のことを高く買っている。とにかく、仕事の飲み込みが早い。器用不器用の問題ではなく、単に楽しいと感じているからなのだろう。きつとこういう仕事に向いているのだ。

今も下平のすぐ横で、トレイにぎっちり敷き詰められたケーキにミントの葉を乗せていく作業を素早く正確にこなしている。

「いらっしやいませ！」

レジのほうから明津恵美の透き通るような元気な声が響いてきた。続いて老婆の声。はつきりと会話の内容は聞き取れないが、どうやらケーキを買いに来たお客さんではないようだ。

下平は作業の手を休め、ドアの隙間からそつと顔を出して様子を見る。その下から真似して風子もひょっこり顔を出す。

明津恵美は、老婆に道を尋ねられているようだ。明津は親切丁寧に教えていたが、どうも老婆は理解出来ないようだ。明津は老婆の手を引いて店の外に出ると、遠くを指さしたり、身振り手振りで案内をしている。

下平は自分の作業に戻る。これからケーキを焼こうとしてたところだった。厚手の手袋をはめ、ケーキのたくさん乗った大きなトレイを両手で掴む。開いたオーブンの中に入れる。

突然電話のベルが鳴った。

今日の面子を考えると、普段なら明津か下平が応対をするところだが、明津は店の外に出てしまっているためベルの音に気が付いていない。下平はすぐ手袋を取ろうとしたが、ふとその動きをとめ、風子に視線を向けた。

「……サクちゃん、電話に出て。おれ、手が塞がってるから。難し

そんな内容なら、名前と番号聞いて折り返しでいいから」

風子は突然のことに驚き、電話と下平の顔に交互に目をやった。やがて決心したように、数歩の距離にある事務机まで歩き、受話器を手に取り、耳に当てた。電話機の、赤く点滅しているボタンを押す。

「は、はい……」

少しの沈黙の後、

「あ、ああ、あの、はち……八時……は、はい……どうも……」
受話器を置いた。

おそらくは閉店時間を尋ねられたのだろう。

風子はがっくりと大きく肩を落としてうなだれている。

「あのさあ、サクちゃん、多分おれがなにをいわなくても、自分自身よく分かっているよね。自分がもどかしくて、凄く辛いんじゃないかって思う。でもあえていうよ。ここで働いているからには、これからいくらかでもこういうことはあるからね。……ちょっと練習してみよう。まず、元気に店の名前をいうこと。ほら、いってみな」
「は……はいっ。ノワゼットです！」

「そう。お電話ありがとうございます、ノワゼットです！」

「お、おで、お電話ありがとうございますノワゼットです！」

「そうそう、いい感じ。うち別に電話対応のマニュアルはないから、ちよつと待たせたと思ったら、お待たせしました、とか出だしの言葉は自由に変えてもいい」

「……はい」

「あと、相手の顔が見えないんだから、しっかり相づちを打つこと。ちゃんと聞いてくれるのかって相手が不安になるから。これはお店に限らず、電話の常識」

「……はい」

「ま、いわれるまでもなく分かっているだろうけど。でもとにかく大切なことだから。一度不快な思いをしてしまったお客様は、もう来てはくれなくなるからね。……店長がいない時にいうのもなんだ

けど、店長も自分もちょっと甘やかしすぎていたと思う。性格上自分には出来なくても仕方ないなんて思わないでね。こんなのは慣れだから。ちよつとづつ慣れていこう」

風子は頷いた。

「はい、電話のベルが鳴ったぞ。さあ、受話器を取った!」

「おで、おで電話のわ、ノワゼット、です。……い、いまのタイミングは……ズルいです……」

「なにやってんですかあ、二人とも」

いつの間にか店内に戻って来ていた明津恵美が腕組みして風子たちに訝しげな視線を送っていた。

「ああ、ちよつとトーク練習。恵美ちゃん、さっきのお婆ちゃんは?」

「野々部市民ホールの場所を知りたいっていうので、教えてあげました。そのすぐ横に、お孫さん夫婦の家があるんですって」

「電話して迎えに来させりやいいのにな。タクシーで行くとか」

「ああ、そうか、タクシー使えばっていつてあげればよかったなあ。電話はかけたくないんだって。いきなり行って驚かせたいんだっていつてた」

また電話のベルが鳴った。

「はい、ありがとうございます。ケーキショップ、ノワゼットでございます」

明津は流暢に電話応対をしている。

風子は落ち込んでしまふ。惨めになってくる。自分などとても彼女に太刀打ちできやしない。電話だけではない。先ほどだって明るく丁寧に道案内をしていたし、お店の心象にもプラス影響があるだろう。やはり自分などはなんの取り柄もない駄目な人間なんだ。

6

風子は自転車に乗り、帰宅中。
もう夜の九時、空は真っ暗だ。

住宅街を抜け、田んぼへさしかかろうとしているところで、人の姿が視界に入ってきた。

二時間くらい前に明津恵美が道案内をしていた、あの老婆だった。まさか、こんな時間だというのにまだ市民ホールを探しているのだろうか。

こっちはまるで方向が反対だ。

もうお孫さんの家に着いていて、別件でこちらに来ているのかも知れない。

ゆつくりと自転車を走らせる。

素知らぬ顔ですれ違った。

すこし進んだところで、自転車を止め、後ろを振り向いた。

他人のことだ……

どうでもいいじゃないか。

本当に道に迷っているのかどうかなんて分からない。

下手に声なんかかけて、自分の間違いだったら恥ずかしいだけだ。もう、行こう……

風子はペダルを踏み込んだ。

他人のことだ……

急ブレーキをかけた。また後ろを振り返った。老婆の背中が小さくなっていく。

風子は自転車をユーターンさせた。

あつという間に、老婆に追いつく。

老婆と目があつた。

風子は口を開く。

「あ……あの、お、おばあ……」

「あら、さっきのケーキ屋さんの……」
覚えられていた……

きつと自分の髪がぼさぼさでみつともないから目立つんだ。

「ま、ま、まだ、しみ、市民、市民ホール……」

「ええ。さっきの娘には丁寧によく教えてもらったのに、なんだか

勘違いして覚えてしまっていたみたいで。もう、すっかり耄碌しちゃって」

まるでテレビでも見ているかのような、淀みのない標準語。東京の人なのだろうか。この辺りに住む年寄りにはみな東北弁丸出しだし、若者にしても標準的なアクセントで喋っているつもりでも、実際はかなりの訛があるというのに。

風子は自転車を降りた。

「あ、あっちだから、し、市民ホール……い、い、一緒に……」

風子は自転車を押し、歩き出した。

夜空には夏の星座が輝いていた。

7

遠金恵理香は機嫌が悪い。

また、つき合っていた彼氏に振られてしまったのである。

はたから見れば男を取っ替え引っ替えのいい身分にも見えるが、彼女にはそのようなつもりは全くない。交際を続けたいのにもいつも相手から別れを切り出されて終わっている。振られた直後の遠金はそうとうに気分が悪い。

畜生、やるだけやって、逃げやがってよう。だったら最初から援交で近づいて金を巻き上げときゃよかった。こっちはっかり金を遣わせられてよ、あんなに貢いでやったつーのに、あれが気にいらない、お前のこの態度が酷い、許せない、ってまるでそっちが被害者かのようなこといいやがって……逃げやがってよ。今度会ったらキンタマ引きちぎってやる。……等といったような愚痴を、口を開けば友人にぶつけている。一昨日の夜に振られてからというもの、もうずっとこんな調子だ。谷澤達子も矢野舞子もいい加減うんざりしてしまっている。まあ、一週間もしないうちに、また新しい男を見つけて機嫌が良くなるのがいつものパターンなのだが。

「だからさ、あんな男やめとけっていったんだよ。最初から遊びっ
て思ってた感じだよ」

「うるせえな。こっちはいつも本気なんだよ」

「そうだけど、でも恵理香ならもっと良い男が見つかるって」
「そうそう」

昼休み。学生食堂を出た三人は、通路を歩いている。

「放課後さ、カラオケでもいって騒ごうよ。スツキりするよ。全部達子のおごりでさ」

「ええっ、なによそれえ」

谷澤達子が素っ頓狂な声をあげる。

「……カラオケなんかよりさ、もっとスツキリできるモノがいたよ」
遠金は花壇沿いのベンチに腰をかけている佐久間風子の姿を発見した。

ちょうど弁当を食べ終えたところのようだ。弁当箱を布でていねいに包み終えるとなにやら両手をあわせている。

「今時ごちそうさまのお祈りって、何時代だあいつは」

遠金恵理香は通路の手すりにもたれて様子を見ている。

佐久間風子はバッグから本を取りだし、読み始めた。遠くてよくわからないがお菓子の写真が表紙のようだ。

「むかつくんだよな。こんな人目につきにくいところで。ゴキブリみたいにカサコソ逃げまわりやがって。……特にこっちがこういう気分の時は、ブチ切れそうなくらい腹が立ってくんだよな」

遠金は上履きのまま、校庭へと出た。いきなり大声をあげて、走りだした。

「クマ、てめえ、ブチ殺すぞ！」

風子は漫画のような大きな動作でびくりと跳ね起きると、えらい剣幕で迫ってくるの遠金の姿にさらにびっくりして、手早く荷物をまとめると走り逃げ出した。

「なんか恵理香、無茶苦茶やってるよ」

「でも面白そう。行こっ」

残る二人も楽しげな表情で後を追う。

風子はすぐに追いつかれてしまった。手ぶらの遠金に対し、風子

はバッグが揺れて思うように走れなかったからだ。

ちょうど陸上用の砂場のところ。風子は後ろから体当たりを受け、倒れた。砂利が口の中に入った。なにがなんだかわからないうちに、馬乗りになられていた。

「てめえ、なんで逃げんだよ」

「だって……お、追いかけて……くるから」

「誰が逃げていいっていったよ。六月五日、木曜日の昼休みは遠金に追っかけられても逃げていいって、誰に許可もらったんだよ。許可も得ずに勝手なことする資格なんて、おめえにやねえんだよ」

「す、すみません。もう、に、逃げませんから、勘弁してください」

「許して欲しいか」

「は、はい」

風子は頷く。

「じゃ、一ついうこと聞け」

「な……なんでしよう……」

遠金は風子の頬を力一杯つねった。

「なんでしようじゃねえよ。聞いてから判断しようなんて生意気なんだよ。はい分かりましただろ」

「……はい……わ……分かりました」

遠金は風子のバッグを勝手に開けた。

ケーキ作りの本が入っていた。投げ捨てた。

弁当箱が入っていた。投げ捨てた。

もうなにも入っていない。

なんだよ。面白そうなものがあれば、それを材料にいじめてやろうと思ったのに。例えば日記帳とか。つまんねえ奴、なにもねえじゃねえか。

弁当箱を拾い、包みを開けた。こんなので足りるのか、と思うほど小さい弁当箱。

空箱に砂場の砂をぎっちり詰め、蓋をした。

「あ、お弁当箱だ、どんなお弁当なんだろ」

蓋を開けた。

「わあ、美味しそうな弁当。なんだ全然食べてないじゃん、こんなに残っちゃってるじゃん。もうじき昼休み終わっちゃうのに。佐久間さん、ちゃんと残さず食べなきゃ駄目なんだよ」

遠金は弁当箱を風子の顔に近付けた。

「そ、それ、す、す、砂……」

「違うよ。美味しいご飯だよ。ゴキブリには上等すぎるくらいなの。

……ほら、早く食べよ。残したりしたら、貧しい国の人に悪いだろ。食えっつてんだよ！ 達子、舞子、抑えつけて！」

風子は体全体を暴れさせ抵抗した。しかし三人がかりに太刀打ちできるはずもなく、むりやり口をこじあけられた。

「はい、いただきますあす」

遠金は砂をすくって風子の口に入れようとした。

風子は無意識のうちに、手にした砂場の砂をつかみ、遠金の顔面目掛けて投げつけていた。

悲鳴があがった。

風子の身が軽くなる。今まで馬乗りになっていた遠金は、自分の顔をおさえてのたうちまわっている。口と目に風子の投げた砂を大量に浴びてしまったのだ。

風子も自分のとった行動に呆然としてしまっていた。

「そいつ、おさえとけ！ 砂が目に入ったあ、痛え。畜生！」

また二人にがっちりとつかまえられる。

遠金は目をこすりながら、ゆっくり立ち上がった。風子の腹を蹴飛ばした。まったく攻撃を予期していなかった風子の柔らかな腹に遠金の踵はやすやすとめり込めた。

風子は突然の激痛に身を前に倒した。今度は側頭部を蹴飛ばされ、倒れた。

砂を投げつけられた。顔に当たるとかなり痛い。風子は腕で顔をかばった。

がら空きになった腹部にさらに蹴りが加えられた。

風子は吐き気がこみ上げてくるのを堪えた。

四つん這いになった。

砂を投げつけられた。

髪の毛を引っ張られ、起こされた。

びんたをくらった。

「お前があたしに砂なんかを投げてるから悪いんだよ。謝んな」
今度は反対の頬にびんたを食らった。

「てめえ、なんだよ、その目つきは。ゴキブリのくせしやがって」
またびんたを食らった。

「まだその目つきやめねえのか。睨んでんじゃねえぞ、生意気なんだよ」

髪の毛をひっぱられ、頭を掴まれ、砂場の砂に顔を叩き付けられた。

何度も、何度も、起こされては、叩き付けられた。

「謝れ、謝れよ、てめえ」

遠金の膝が、鈍い音とともに風子のお腹にめり込んだ。

「ボケが」

意識が遠のきかけた瞬間、みぞおちにもう一撃を受け、風子は完全に意識を失った。くにやりと柔らかく曲がったかと思うと、顔から砂場へと崩れた。

「ちよつとやり過ぎだよ、やばいよ恵理香。睨んでんじゃなくて、気を失ってんだよ」

風子は砂場に顔をうずめたまま、動かなかった。

遠金は立ち上がった。

倒れて動きもしない風子にまた砂を投げつけた。つま先でお腹を蹴飛ばした。

「みんなお前が悪いんだ！」

三人は去っていった。

風子は頭がぼうつとしてしまつて、それからのことはよく覚えていなかった。

午後の授業はちゃんと受けたのだと思う。いや、ちゃんとは受けていないだろうが、席には座っていたと思う。

なんとなく記憶がある。

しかし、自分の体や顔が傷だらけ、服もぼろぼろだ。

ひりひり、ずきずき、じんじん、痛みをあらわす形容句が全て当てはまる。

誰にもなにもいわれなかったのだろうか。尋ねられたとして、自分はどうな切り返しをしたのだろうか。

風子は自宅の、自分の部屋にいる。

すっかり日が暮れている。

電灯はついておらず、部屋は真っ暗だ。

階段をのぼってくる音。

ドアが開いた。

部屋の電気がつく。

母が立っていた。

「やつぱり。今、アルバイト先から電話があつたのよ。自転車があるから、もしかしたらと思つて見に来てみたら。あんた、無断欠勤なんかしちゃ……風子、ねえ、どうしたの、その顔」

母は風子の傷だらけの顔を見て驚いた。

「なんでも……ないよ」

「なんでもないことないでしょう。制服だつて、ぼろぼろじゃないの」

「電話しなきゃ」

風子はよろよろと立ち上がった。

階段を降りて居間に行くと、父が帰ってきていた。

「あなた、風子が……。風子、誰かにいじめられたんじゃないの」「……なんだ、中学に続いてまたいじめられてんのか。悪いことしてないんなら堂々としてりゃいいのに、コソコソしてっからいじめ

られるんだよ。毅然と振る舞わないから、戦おうとしないから、余計にいじめられるんだよ」

お父さんは相変わらずなにも分かつちやいないんだ。今のいじめはゲームなんだ。悪いことしてないんだから、とか、堂々していればいじめられないとか、いじめられているほうも悪いんだ、とかそういうものではない。

小学校の頃に、誰かを標的にして次々に上に乗っかっていく遊び、というよりいじめが男子の間で流行った。山になっているのを見ると、男子は次々とその上におおいかぶさっていく。下から死にそうな悲鳴が聞こえてきても知ったこっちゃない。あとから祭りに参加する者は、下に誰がいるのかも知らない。ただ楽しいだけ。標的とされた者がどんなに辛かろうと関係ない。要はそんなものだ。

風子はアルバイト先に電話をかけた。

もの凄くどもりながらの口調で謝っている。

父は冷たい視線で見ている。

「なんだか中二の頃からがらっと変わってしまったて、嫌だわ。……家族以外だと、あんな感じにしどろもどろになっちゃって全然ろくに話も出来ないみたいだし。アルバイト始めるっていうから、よくなると思っていたのに、ちつともだし」

「それまで苦難に会わずに過ごしてきていたってことだ。おれたちが甘やかして育ててしまったってことだよ」

父親は電話を終えて二階に上がっていく風子を見ている。

風子も立ち止まり、二人を見た。

娘に全ての原因があると思っている父親。実の娘をなんだか気持ち悪いと思っている母親。

一度だって、なにが起きているのか、娘がどんなのか問いつめてきたことなんかなくせに。

心配なんかしていないくせに。

実情を知らないくせに、一般常識と根性論だけで父親ぶるな。偏見や世間体凝り固まっているだけのくせに、心配しているふりを

して母親ぶるな。

風子は階段を上り自室に入った。

部屋の鍵をしめる。

心臓の音。

不安。

怒り。

動揺。

両手で机の上のものを全部払いのける。ガチャガチャと音がして、床の上にどんどん物が落ちていく。

虚脱感。

電気をつけた。

自分で散らかしたばかりのものを片付け始める。

あの写真立てが裏返しになって床に落ちている。拾う。なにか紙がはさまっているのに気づく。

取り出してみる。

思い出した……

手紙だった。

未来の私へ

私はこれから死にます。

絶対にはずれると思うけど奇跡的に助かってしまっただけ、生きていたいと思っただけ……

そんな時のために自分に手紙を残して置きたいと思います。

どんな死に方をしようとしたのかは、

今の段階で分かるはずがないけど、

もしも死に切れなかったら、

とても痛く、辛く、惨めな気持ちになったことかと思えます。

死ぬ勇気もないんだ。私は私のことを見損なうと思います。

死ねなかったのならしょうがない。生きていくしかないよね。なら、探してみたら。

生き方。

無理ないポジション。

過去の手紙、過去の自分にちよつとした怒りを覚えた。悲観しているようで、どこか未来を信じている。

未来の自分、つまり今の自分に勝手に物事を託している。

そう……

死ねなかったのだ。

いや……怖気づいて、はなから死ぬ気きなどなかったのだ。

中学二年のある日、風子は山奥にある崖に行った。そこから飛び降りて死ぬつもりだった。

しかし選んだのは確実に死ぬような険しい崖ではなく、六、七メートル程度の、しかも草木がクッションになっているようなところ。それでも大怪我は負ったが、死ぬにはほど遠く、腕と足を骨折しただけだった。全く身動きの取れないところを、翌々日に発見され、救助された。

両親にはさんざん叱られた。

大怪我によつて、暴力的ないじめは減った。しかし陰湿ないじめはなおも続いた。

風子は本当の自分を見失ったまま、どんどん自分の殻に閉じこもっていく。どんどん性格が卑屈になっていく。

でも、そのどこが悪い。誰だつていじめられたくないんだ。痛いのが嫌なんだ。

風子は手紙を破ろうとした。しかし結局破ることが出来ずに机の引き出しにしまった。

勢いよくベッドに倒れ込む。

布団を頭からかぶった。

第三章 H A Z U M I

1

近藤悠子は空を見上げた。

まるでポスターカラーで塗ったかのような混じり気のない青い空だったのが、急速にどんよりと曇ってきた。強烈な初夏の日差しにじりじりと照りつけられて辛かったのが、おかげで少し楽になった。建物の構造上、外よりも風が強く吹くため、太陽が隠れてしまうとそれまでにかいた自分の汗のせいでひんやりと涼しくなる。曇ってきたとはいっても、今朝発表された気象庁の予報によると降水確率十パーセント、にわか雨にでも降られない限り試合観戦には問題ないだろう。

近藤悠子は光沢のあるオレンジの服を着ている。胸には青く大きな字で、HAZUMIと書かれている。

ここは、華鳴市立烏ノ山陸上競技場。JFLに所属するサッカークラブ、ハズミSCのメインスタジアムだ。

悠子は去年から何度もここに足を運んでいる。

収容人数二千五百人。陸上競技兼用のこじんまりとしたスタジアムだ。座席は長椅子を並べただけの簡単な作り。陸上トラックの中に、芝の生えたサッカー用のグラウンドがある。そういうと、選手の姿が非常に小さくて観戦にくそうだが、実際は陸上トラックの幅がかなり狭く、その他余分なスペースもほとんどない競技場なので、かなり視界に大きく選手の姿を捉えることができる。

今日は六月二十一日。これからこの場所で、JFL前期第十六節、ハズミSC対FC島根の試合が行われる。

ピッチ上では両チームの選手たちがウォーミングアップメニューをこなしている。

素早く股上げをしながら、短い距離を行ったり来たり。

コーチが次々と蹴るボールを、ゴールキーパーが起きあがっては

キャッチをしている。

選手がペアになり向き合って、相方の投げたボールを頭や足で返す。相方はそれをキャッチしてはまた投げる。

ゴール前に沢山のボールを並べ、シュートを枠に蹴り込む練習。体を一定方向に保ちながら、膝を高く上げて斜めに縦横にと動き回る。続いて、膝をあまり上げずに同じことを行う。

等々、それぞれのチームのウォーミングアップメニューが進行していく。

両チームのサポーターが太鼓の音に合わせ、選手の名を次々と叫んでいる。呼ばれた選手は手を上げて応えている。

やがてスタメン組はピッチを去って、控え室へと引き上げて行く。リザーブの選手だけが残り、ボールの奪い合いなど簡単なゲームを行っている。

華鳴市や野々部市は、周りを高い山に取り囲まれている盆地帯だ。遠くを囲む緑の山々は、とても涼しげに見える。しかし実際はフェーン現象や、その他の地形的な理由のために、夏はかなり暑い。そして冬は時すら凍りつきそうなほどに寒い。

真冬にはこの山々はすっぽりと白いベールに覆い隠される。周囲に高い建物がないため、観客席に座っていながらも、非常に素晴らしい眺めを楽しむことができる。景観に関しては日本の中で屈指の競技場との評価を得ている。そして、サッカークラブのホームスタジアムとしては文句なしの日本一との評価だ。残念ながら日本一は雪に覆われた冬だけの話であるが、しかし四季を問わず見事な眺めであることに違いはない。

近藤悠子はウォーミングアップをする選手や、声援を送るサポーターの熱い表情、取り囲む風景などを一通り撮影し終わると、まだ試合開始前だというのに、カメラ一式を片付けてしまった。一眼レフタイプの、大きなデジタルカメラだ。本体は型落ち品をインターネット通販で購入したもので、安価に手に入れたのだが、別途購入したレンズセットが高価だった。画素数はそれほど多くないが、

CCDが大きいと画素数だけが売りの最近のコンパクトデジタルカメラよりも圧倒的に綺麗な写真撮影が可能だ。去年、親から借金して購入したもので、現在も細々と返済中である。

将来は、自分で撮影も記事も担当するスポーツ雑誌記者になりたいと考えている。

視界がちよつとかすんできた。眼鏡のフレームを指でつまんで、角度の微調整をする。どうもまた視力が落ちたようだ。微妙ながら眼鏡の度が合わないようで、ここ最近疲れ目が酷い。最近のデジタルカメラには液晶ディスプレイが当然のように付いているので、撮影時に眼鏡が邪魔にならなくて便利だ。

悠子は視力は悪いものの本を読むより体を動かすほうが好きな性格で、得手不得手は別としてどんなスポーツをするのも好き。でも運動部には入っていないので、体育の授業くらいしかスポーツに接する機会がない。だからサッカーは一度もやったことがない。

ここに通うようになったきっかけは、前述した通り撮影もこなす記者を目指しているということと、近場で行われているスポーツ競技がここくらいしかなかったというだけの話だ。

初めはスポーツ競技撮影の腕を磨くことだけが目的だったのだが、スタジアムに何度も足を運び、JFL昇格へ爆進していくチームとサポーターの作る熱気に触れていくうちに、すっかり自分自身もサポーターになってしまった。現在は、試合中は応援に集中したいので、練習風景くらいしか撮影しなくなった。しかしそれでは撮影の腕を磨けないので、月に三、四回、隣の県にある大型運動場まで通って、別のスポーツを撮影している。

やがてピッチ上にはリザーブの選手もいなくなったが、それでも両チームのサポーターは太鼓の音に合わせて大きな声援を送り続けている。

Jリーグのクラブと違ってJFLは凝った選手コールは少なく、たいていどのチームも似たような拍子で選手の名を叫んでいる。そんな中で、ハズミSCの選手コールは異色中の異色である。登録選

手全員に個別のコールがあるのだ。まだ社会人リーグの頃、熱心な応援団員が一人おり、いつしか選手が新加入するとすぐにコールを作るようになっていった。JFLに昇格した際にサポート活動は一般人主導となったが、この伝統は受け継がれている。今年加入したばかりの選手、しかもまだ一試合も出場していない選手にも応援コールがあるのだ。現在の応援団長の個人ホームページに行ってみると、少し淋しくて滑稽な雰囲気を感じなくもないが彼が一人で吹き込んだ選手別コールの音声ファイルを聴くことが可能である。

周囲の壁やフェンスには、選手を応援する横断幕がびっしりと張られている。この、田舎町の小さな競技場には、メインスタンド側にしか座席がなく、そこだけではとても張り切れない。社会人リーグなら良いが、JFLでこれはいけない。横断幕を張る場所がないなど、相手サポーターにも申し訳ない。と、今年の開幕前に、ハズミSCのサポーターが市に掛け合い、既存設備を傷つけない範囲で両チームの横断幕を張る許可を貰ったのだ。

ピッチの周囲は陸上のトラックで、そこには地元企業の看板広告が等間隔で並んでいる。

悠子はあらためて、観客席をざっと見回す。収容人数二千五百人のスタジアムだが、今日は四百人といったところか。座る席、態度、服装で分かるが、ほとんど全員がハズミSCのサポーターだ。相手サポーターは二十人程度のようなうだ。ハズミSCのサポーターは最近いつも四百から五百人くらいで、観客席の埋まり具合は対戦相手に左右される。少ない日には今日のようだが、多い時にはハズミSCのサポーター数を遙かに上回る人数が集まることがある。JFLは地域密着型ばかりではないので、ホームスタジアムよりアウェイの方がサポーターが集まるようなケースも起こり得る。遙か遠くであるはずの九州某人気チームとの対戦時など、どちらのホームゲームなのだからなくらいだ。

「お待たせしました、これより審判、そして選手の入場です」

若い女性のアナウンス。スピーカーの質も悪ければ、女性の滑舌

も悪く、まるで小中学校で放送委員の女子生徒が下校アナウンスをしているかのようだ。「しんばん」が「しゅんばん」に聞こえる。

両チームの選手たちが隣同士並んで順々に出てきた。観客席からは、メインスタンド側であるため選手の背中しか見えない。選手達はピッチに入るとすぐに左右に分かれて広がっていく。選手全員がメインスタンドの方を向き、それぞれのサポーターに向けて両手を高く上げた。

サポーターの叫び声と、どんどんどんどんという太鼓の音の相乗効果でスタンドが大爆発する。

場内放送で選手紹介が始まったが、実に酷いアナウンスであった。分からなければ事前にルビくらい振っておけばいいものを、あまりに読み間違いが多すぎる。最近いつもこの女性だ。悠子がここに通うようになった頃の担当は辞めてしまったのだろうか。以前の女性の喋り方は、全く記憶に残っていない。黒子として無難に職務をこなしていたということなのだろう。今の担当は、声からして高校生か大学生のアルバイトなのだろう。それにしても、相手チームの名前を読み間違っただけならばアウェイチームへの洗礼とも考えられるが、ホームとして隔週でこのスタジアムで試合をしているハズミSCの選手の名前ばかり間違っているのはどういうわけだ。

一度ピッチ上に散らばった選手達が再び集まり、それぞれ円陣を組んで声をかけあった。そしてまたそれぞれのポジションに付く。センターサークルの真ん中に、オレンジのユニフォームが二人。ハズミSCのツートップ、轟佑司と有村耕平だ。有村は足下に置かれたボールを軽く踏みつけている。

どんよりと曇った空の下、選手、そしてサポーターが試合開始の笛を待つ。

そして今、主審の笛が鳴った。

ハズミSCボールによるキックオフだ。

有村が後ろにボールを戻す。パスを受けたMF田中英二に、FC島根の九番が予想以上の素早いプレスをかけて来た。田中は少し慌

ててしまい、適当にボールを蹴ることしか出来なかった。ボールは迫り来る九番の胸に当たり、大きくコースが変わり、タッチを割った。運が良かった。ハズミSCのスローインだ。

悠子は試合開始直後から、大声で叫びっぱなしだ。どちらかといえば地声は低いほうなのだが、裏返ってやたらと甲高い。

田中英二が再びボールを持つ。彼は今年から加入した、元Jリーガーだ。さっそく二人に詰められるが、田中は軽やかなボール捌きでフェイントをかけ、相手の股下を抜くボールを出した。自分も相手を避けてボールに向かおうとしたところ、対応できなかったFC島根の十四番に足を引っかけられ、転ばされた。

主審が笛を吹かずにプレー継続させたことに、ハズミサポーターから激しいブーイング。

「うちの十番になにすんだよ！」

悠子も親指を下に立てた手を、前に突き出して叫んだ。

今日の観客のほとんどを占めるハズミSCのサポーター、彼等は自分の応援でチームに初得点を、初勝利を呼び込んでやろうと必死で声を張り上げている。

メインスタンドの、ピッチに向かって右寄りがホーム側の応援席である。コールリーダーや太鼓持ちなどにいる応援団を中心として、サポーターが密集している。悠子はそんな中の、最前列に座っている。自然と声の大きくなるのも道理である。

ピンチを迎えたFC島根が慌ててボールを外に出した。ボールは高く上がって、スタンドに飛び込んだ。右端の、周囲にほとんど誰もいない席でゆったり観戦をしていた青年が、ボールをピッチに投げ返した。

ちょうどその青年と自分との中間にどことなく風変わりな少女の姿があった。

なんだか、えらくダサイ服装だなあ。

長めのジーンズスカートに緑のTシャツ。それぞれ単体だけで見れば彼女に似合わなくもないのだが、上下があまりにもかみ合わない

さすぎる。それに今頃ジーンスのロングスカートもない。

なにより凄いと思わせるのは、腰まで伸びた髪の毛だ。とても髪型と呼べるようなものではなく、切らずにいたところなんらかの形状を取りましたという感じ。なんだか強風に髪の毛がばたばた激しくなびいていて、吹き飛ばされそうで、見ていてはらはらする。後髪を縛って纏めているのは風対策のつもりなのかも知れないが、悲しいことになんの対策にもなっていない。前髪も風に煽られ弄ばれている。自分の髪の毛にいじめられているようで、痛々しいがそういう髪型を選んだ少女の自業自得というものだ。

ほんと変わった娘だな。……あれ……なんだかあの顔、見た覚えがあるぞ。

眼鏡を微妙に動かしてみるものの、ピントがうまく合わない。

ああ、イライラする。今度、眼鏡を買い換えよう。

悠子は試合に注意を戻した。ちょうどFC島根の選手が放ったロングシュートがハズミSCゴールに突き刺さるところだった。

悠子はがっくりと首をうなだれ、長い溜め息をついた。

その後、ハズミSCはさらに追加点を許し、〇二で負けた。

今節も初勝利どころか初得点もかなわなかった。

悠子が先ほどの奇妙な少女の名を思い出したのは、帰宅途中の電車の中だった。

偶然同じ車両に乗り合わせたのだ。

悠子の記憶にある髪型と全く違うので気付かなかった。でも顔はよく覚えている。この距離だ、見間違えようがない。

そういえば中二の途中から髪を伸ばしてたっけ。そうだ、卒業式のときもあんなだった。

ほとんど乗客のいない車両。二人は車両の端と端だ。少女はドアにもたれるようにして立っている。

悠子は座席に腰を降ろしていたが、少女の正体について確信を持つと、立ち上がった。揺れる電車の中、吊革に掴まりながら、ゆっ

くりと少女に近寄っていく。

「佐久間さん？」

その声に少女はびっくりと反応した。誰かが近づいてくることに気付いてはいたものの急に声をかけられてびっくりしたという様子だ。少女は悠子のほうを向いた。

「近藤……さん」

少女は小さく口を動かした。

「ああ、やっぱり！ 佐久間さんだったか」

少女、佐久間風子は反射的に逃げだそうときびすを返した。その瞬間、電車がカーブにさしかかって大きく揺れた。少女は咄嗟に手すりにしがみつき、倒れそうになる体をなんとか支えた。

「大丈夫？ ……久しぶりだね。佐久間さんとはほとんど話したことなかったけどさあ、中一中二っていつも敦子と一緒にいたから、よく覚えているよ」

悠子と阿尾敦子は小学五年の頃からの友人だった。しかし中学生になってクラスが分かれ、それぞれにクラス内の友達ができたことにより、あまり親密でなくなっていた。

「敦子ね、あたし風ちゃんに酷いことしちゃった、って口癖のようにいつもいつてで、ずっと悔やんでいたよ。なにがあつたのかは知らないけど、それだけは伝えておくね。……せつかくこうして会ったんだから」

風子は悠子の両肩を掴んだ。その手はかすかに震えている。

「敦子から……なにを聞いたの？ ……どこまで……知っているの？」

風子は弱々しく体を震わせながらも、恐ろしい形相で悠子の顔を睨み付けていた。いや、それは悠子を通り越して遙か遠く、遙か過去を見ているような視線だった。

「だから詳しいことは全然知らないってば。……それより、痛いよ」「ご、ごめんなさい」

小さく万歳するように、慌てて肩から手を離す。

我に返った風子は、もうすっかりおどおどとしたいつもの状態に戻っていた。

電車が駅に停車して、何人かが降りる。車両には近藤悠子と佐久間風子の二人きりになった。

悠子は腰を降ろした。

「佐久間さんも座ったら」

風子は促されるまま、悠子の隣に座った。

「あのさ、佐久間さん、さっきサッカーの試合観てたでしょ」

風子は黙っている。やがて小さく頷いた。

ぼさぼさ髪の間から見える風子の目に、疑問符が浮かんでいることに気付いた悠子はバッグからハズミSCのレプリカユニフォームを取り出してみせた。

「東北社会人リーグの頃からのハズミサポ。といっても、一年くらい前からの新参者だけだね。……試合場でさ、なんかあの娘見たことあるような気がするなーって思ってたら、やっぱりだったんで、ほんとびっくりしちゃったよ。なに？ 佐久間さんもサポなの？」

「サポって？」

「サポーター。応援する人だよ」

そういえば、インターネット掲示板で何度も目にしている言葉だ。「どう……なんだろう」

風子は自問する。

あらためてそんな質問をされると、そもそもなんでスタジアムまで足を運んで試合観戦をしているのかも分からなくなってくる。

「試合観戦初めて？」

「三回目」

「サポだねえ、それはもう立派な。たとえ最初は他の目的で来てよ
うと、何度も観に行っているうちにサポになっちゃうもんだよ。あ
たしがそのいい例だよ。あれじゃない、応援歌ももう頭に入っ
てん
じゃないのお。これ分かる？ 決める」

「轟」

風子はうつむいたまま表情一つ変えずにぼそぼそと呟く。

「素晴らしい、正解っ。でも、こう返さなきゃ。決めるっ　　オッ

っ　　っていわれたらね、とどろっきゅっうっじゅ　　どどどん

ゆ・う・じっ！」

思わず絶叫してしまい、ついあたりをきよるきよる。自分達二人以外に誰もいないことにほっとし、一人でけらけらと笑っている。

「あの……そのユニフォームって、ど、どこで……売っているの？」

「ハズミの公式HP見たことある？」

風子は頷いた。

「その一番下から、グッズ販売のページに行けるよ。今年のホーム開幕戦の時にはスタジアムでも販売していてね、あたしはその時に今年のユニとタオルマフラーを買ったんだ。あの日は無料チケット配って、二千くらい集まったなあ。ボロ負けしたけど。宣伝効果もむなしく客足は遠のくばかりだけどね、こう弱くちゃ」

「そうなんだ」

風子はそういったきり、うつむいて黙っている。話振るだけ振って、全然興味ないのかしら、と悠子は不思議がる。

悠子は別にお喋りではない。中学時代の同窓生と会って黙っているのもためらわれたし、風子がほとんど口を開かないので、間をもたせるためには自分が喋るしかなかったのだ。とはいっても、会って話は尽きぬという間柄ではないし、いつしか悠子も話題がなくなってきた。でも、風子との間の取り方が分かって来たので、悠子は無理に喋るのをやめた。

ごっ　ごっ　ごっ　　がたん　と、電車の走る音だけが聞こえてくる。

ごっ　ごっ　ごっ。

揺られているうちに、悠子にちょっとした疑問がわき、また口を開いた。

「ねえ、佐久間さんて、確か野々部商に進んだんだっけ」

風子は頷いた。

「公立とか商業高校っていうと地味なイメージあるけどさあ、あそ

この女子の制服って深緑のブレザーに赤いチェックのスカートで可愛いんだよね。あたしは華鳴北第二だから、すっごい地味で参っちゃう」

私立華鳴北第二高等学校。確か敦子と同じ高校……

「あ、あの……こ、こん、近藤……さん、は……ほ、ほ、本当に……あ、敦子から……な、なにも、きき、聞いて……」

いきなり風子のどもりが酷くなった。聞きとるだけで一苦労だ。「なんかそんないわれかたされると、なにがあつたのか興味持ちちゃうなあ。……冗談。安心して。なにも聞いてないよ」

風子はほっとするべきなのかどうか、気持ちのコントロールが出来ずに悲しそうな顔で息を荒らげている。

「敦子とは中学の時はほとんど話さなかった。あの娘は佐久間さんたちと、あたしはまた別の友達と一緒にいるようになったから。でも高校が同じだったんで、また一緒に通学するようになったんだよ。中学の時の話になると、佐久間さんに悪いことしたって話ばかりで。本当に辛そうな顔してた。さっきもいったけど、詳しいことはなにも聞いてないから。……もう、聞きたくても聞くことも出来ないし」

「それ、どういう……」

風子のぼさぼさ髪の毛の奥に輝く眼光に、悠子は耐えられず、ゆっくり大きく呼吸をした。

「会った時から、いうべきかどうか、ずっと迷っていたんだけど、やっぱりいいわない訳にはいかないか。……彼女ね、先月に亡くなったよ。交通事故」

風子の反応を確かめるのが悪いような気がして、悠子は窓の向こうに視線をやった。果てなく広がる田園風景が横に流れていく。

少しの間をおいて、悠子は続ける。

「見ず知らずの幼稚園の子を突き飛ばして助けて、自分は暴走トラックに跳ねられて……ほとんど即死だったって」

ばん。と、隣でなにかを殴る音。その音が二度、三度と続き、悠

子は思わず風子を見た。風子は膝の上に置いた自分のバッグを叩いていた。右手を高く振り上げては振り下ろし、左手を高く上げては振り下ろし。なにかから逃れようとしているかのように、一心不乱に。

悠子はそれをただ黙って見ていることしか出来なかった。

2

「佐久間、お前どこの部活にも入っとらんよな」

風子は黙って頷いた。

放課後の職員室だ。部活動の件で担任教師に呼び付けられたのだ。「お前の口は飾りもんか。口が付いとんならきちんと返事をせんか。もっさりした髪をしおって。ええとだな、知つとるだろうが決まりではみんな部活に入ることになっている。もう七月だぞ。分かるか？ 部活選定の猶予期間はとくに過ぎとるんだ。早くどこか決める、なんでもいい。どこでもいいからどっか入れ。決まりを守らんやつがおると、迷惑だ」

風子は黙って下を向いているが、心の中で激しく拒絶をしていた。意地で毎日学校に通ってはいるものの、こんな学校に一秒だっていたくはない。なのになんだって部活動になど参加しなければならぬのか。授業が終わったらさっさと下校して、ケーキ屋でアルバイトをしていたほうがよほど社会のため自分の将来のためだ。

ケーキ屋の仕事のようにただ黙々と手を動かしているだけでいい部活でもあればまだしもだが、風子はなるべく他人とのコミュニケーションが発生するような場にはいたくない。

真剣に部活を探すふりだけして、なるべく引き延ばそう。最悪でも、幽霊部員でいても文句の出ないような、雰囲気のあるところにも入ろう。自分のクラスには部活に行かずに帰ってしまう者などたくさんいるのだし、どうにでもなるだろう。

とりあえず、善処しますと職員室を逃れたはよいが、いずれにしても面倒事が増えたのには違いない。

いつも以上に憂鬱な気分で学校を後にした。

そういう気の持ちようが余計に不幸を呼び込んでしまうのだろうか。……自転車でアルバイト先のケーキ屋に向かう途中、繁華街を徐行していると、真横から容赦なく蹴り付けられ風子は一瞬の空中遊泳をし、地面に叩き付けられた。

「おい」

遠金恵理香の声だった。

佐久間良信は駅周辺の繁華街にあるスポーツ用具店で筋肉痛用のスプレー缶と軟式野球ボールを三つばかり購入した。

歩きながら、買ったばかりのボールを一つ、上に高く放り投げてはキャッチを繰り返している。

良信は野球部員だ。まだ中一なので、球拾いと筋肉トレーニングだけで、キャッチボールすらやらせて貰えない。部活終了後に一年生の仲間と勝手にキャッチボールをしていたところ、先輩に熱心さを褒められたので、翌日も同じようにしていたら、別の先輩にこっぴどく怒られ、空気椅子三十分の体罰を与えられたことがある。そのように、先輩達の気分や価値観の違いにより酷い目に遭うので、一年生はみな少しでも先輩に怒られる可能性のあることは決してしないように気をつけている。いついかなる曜日時間であろうと、校庭ではキャッチボールをしないようにしている。

最近良信は自宅前で友人とキャッチボールをすることが多い。別に野球ボールを買ったからといって野球が上手になるわけではないが、新しい道具を持つのは嬉しいものである。なんだか上達した気分になってくる。本屋で受験参考書を選んでいると賢くなった気がするようなものだ。

良信の耳に届いてきた声が、ささやかな幸せに舞い上がった気分を、急転直下で地面に墜落させた。

「おい、クマ、黙ってんじゃねえぞ！」

怒声。人混みの向こうで、姉が不良っぽい女子高生三人に取り囲

まれていた。三人とも姉と同じ制服を着ている。

またいじめられてるよ……

気持ちが悪くなりしてくる。

姉には、絶対に親にいわないでつて口止めされている。しかし姉はいじめに立ち向かわずに黙っているだけなのだ、自分で解決する気がさらさらないので、せめて他人に頼れよ、他人を利用しろよ、といいたい。

姉は倒れた自転車の横に自分も転がって、上半身を起こしている状態だ。どうせ自転車に乗っているところを蹴倒されたのだろう。

「てめえ、あの時のこと、誰にも喋っちゃいねえだろうな」

良信は想像する。先日、ボロ雑巾のように服が破れ、痣だらけになつて帰ってきた時のことだろうか。

「……だ、誰にも……いつてない」

「いつてないですだろ、何様のつもりだよお前。クラスのゴキブリのくせしやがつて。気色悪い顔しやがつてボケ」

「すす、すんません。い、いつて……ないです」

この、最低のバカ姉貴！ ゴキブリ以下だ！ 良信は思わず手にしていたボールを投げていた。姉の胸ぐらを掴んで引っ張り起こそうとしていたリーダー格の女子生徒の左頬に直撃。軟球だから威力はたかが知れているけれど、ビシリと鋭い音と同時に少女は身を仰け反らせた。

お見事。と良信は心のなかで自分を褒めたが、実は単なる偶然だ。良信はあまり投球コントロールのよいほうではない。ついカツときてしまい、姉や通行人に当たっても構わない気持ちで思い切り投げたら運良く命中しただけだ。

「このクソガキ、なにしやがんだ！」

少女が左頬をおさえ、怒鳴った。

「うるせー、ババア。バーカ。アホ。一家全員大デベソ」

良信はきびすを返し、自分の尻を叩くと、走って逃げ出した。台詞といい仕草といい、まるで大昔の漫画だが効果は靦面だったよう

で、

「テッペン来た！」

少女もこれまた古い台詞を叫んで、少年を追って走り出した。連れの二人が慌てて後を追う。

一人残された佐久間良信の姉は、道に転がり落ちているボールを拾うと、両手で握りしめた。

午後九時半。アルバイトを終えて帰宅した佐久間風子は、二階にある弟の部屋に行き、ボールを返した。

「姉ちゃんさあ、高校に行ってもまだいじめられてたのかよ。まったくだらしねえよな。しっかりしてくれよ。学校だけならまだしも、街中でまでいじめられててみっともねえったらないよ」

「そんなこといわれても……。お姉ちゃん、これでも頑張ってるんだから」

「どこが。さっきの駅前でのことしか見てないけど、でも分かるよ、全然頑張ってるねえよ。嵐が過ぎるの待ってるだけじゃん。ゴキブリとかいわれてっけど、ゴキブリのほうがずっとマシだよ。……そりゃ、必死で痛みに耐えているってことでは、頑張ってるのかも知れない、辛いかも知れないけど、それだけじゃんかよ。全然解決しよって気がないじゃん」

そういう立場になったことがないから、理屈だけで好き勝手なことがいえるんだよ！

と風子は思ったが、それを口に出すことは出来なかった。唯一普通に接せられる存在を、つまらない喧嘩で失ってしまうのが怖かった。

「ごめんなさい。……もつと頑張ってみるから」

……だから見捨てないで下さい……

風子は謝ると、素早く良信の部屋を出て行った。

弟の言葉は自分のためを思っているものであることは分かる。しかし、理解してもらえない心のもやもやをどうしても取り払うことが

出来なかった。嫌われたくないから本当の思いも話せないなんて、既に弟とも本当の信頼関係なんてものはないのかも知れない。この数年で、全部自分が壊してしまったのかも知れない。

人間嫌いのくせに、世界で一人きりの孤独感、未来へのどうしようもない絶望感を胸に抱いて風子は自室に戻る。

机の上に置いてある写真立ては相変わらず後ろを向いたままだ。その写真の中には笑いに笑っている風子と阿尾敦子とがいるはずだ。しかしもう二人とも、この世にはいない。

敦子は交通事故で亡くなった。

そして……笑顔の自分も、もうこの世のどこにもいない。

3

前節で、JFLは前期日程を全て終えた。なんとハズミSCは一勝どころか一得点も出来ず、というJFL史上かつてない最低の結果を残し、リーグ戦を折り返すこととなった。

今日は七月六日、JFL後期第一節。ハズミSCは、ここ華鳴市立烏ノ山陸上競技場で熱海エスターテを迎える。熱海エスターテは去年からJFLに参入したチームで、守備をかなぐり捨てて殴り合いをしかけてくるような攻撃型チームだ。前期では三勝しかしていないが、無得点だったことは一試合もない。しかし無失点で終えたこともほとんどない。前期の対戦では、〇五でハズミSCは敗れているものの、一番得点のチャンスがあるカードには違いない。いまだ無得点のハズミSCに、ゴールという実績と今後に繋がる自信を与えるために、周囲の期待の大きくかかる一戦である。

佐久間風子はスタジアムを吹き抜ける風を全身に浴びていた。座席の一番後ろに通路があり、その手すりにもたれかかっている。全て自由席とはいえ、風子の座る席のあたりはいつもがらがらだから、別に試合開始までこうしていても席の確保には困らない。

ピッチ上でウォーミングアップをする選手たちを見ている。

今日も暑い日だけど、そよそよと当たる風が肌に心地よい。今日

は比較的風が弱い。

「ねえ、佐久間さんじゃない？」

声の方を向くと近藤悠子が近寄って来るところだった。今日はコンタクトをつけているのか、眼鏡はかけていない。

「ああ、やっぱり佐久間さんだったか。この前とは、またまた変わっちゃってんだもん、最初気付かなかったよ」

風子は光沢のあるオレンジ色の服に、ジーンズという姿。胸には大きくHAZUMIと書かれている。そう、ハズミSCのレプリカユニフォームだ。しかし悠子のいう大きな変化とは、その点ではない。

風子の、腰までであった髪の毛がすっかり短くなっていた。後ろ髪も短く首の地肌が完全に露出している。前髪は軽く横に流しておでこを見せている。

「うひゃあ、よく見るともの凄いイメージチェンジだ。どんな心境の変化？」

「かか、風で……じゃ、邪魔、だった……から」

喋り方やふせめがちな目線といった、おどおどした態度は相変わらずだ。それでもだいぶ垢抜けた感じがする。

「そっぴや伸ばし始める前はずっとそんな髪型だったよね。戻したんだ」

数秒の沈黙の後、風子は頷く。

望んで元に戻したわけではない。二年ぶりだというのに美容院の女性店員に顔を覚えられていており、「久しぶり、いつものでいいの？」と唐突にいわれて、どう返事をしていいものか分からずについてしまったというだけだ。

「ここさあ、いつも風強いもんねえ。この前の風子ちゃん、飛ばされる髪の毛に引っ張られて自分自身が飛んで行きそうだったよ」

いつの間にか呼び方が風子ちゃんになっている。

「ユニフォームも買ったんだね。似合っているよ。可愛いよ」

「か、可愛くなんか……ない」

「いやあ、そんなこたあないよお」

男の太い声が二人の鼓膜を震わせた。声の発信源の方を見れば赤ちゃんを抱いた中年男性、その隣には一回り近く年下に見える女性がいる。二人ともハズミSCのレプリカユニフォームを着ている。

「なに？ 彼女サポーターデビュウなのか？」

男は風子を手のひらでさす。モジャモジャと生やしたあごひげの中に顔が埋まっている。丸々太った熊のような大男だ。

「違うよおじさん、ユニフォームデビュウ」

悠子は答えた。

「二人とも、高校生かい」

「うん」

悠子は頷く。

「家族が蓮見製菓の社員とか」

「違うよ。単なる一般サポ」

「へえ、いくら県にJリーグのチームがないからって、変わってんなあ。こんな可愛らしい娘が二人して、日曜の真っ昼間にJFL観戦かよ。でもまあ、ありがたいことだ、どんどん来てくれよな、友達でも誘ってさ。後援会員になって前売り券買うともっとお得だよ。残念ながらべっぴんさん割引はないけどね」

「なんかおじさん、営業の人みたい。……いくら褒めたってなんにも出ないよー」

「おれも、まあ服装で分かる通り、サポっちゃサポだけだね、蓮見製菓の社員なんだよ。ここみたいに、近場で試合のある時には、こうして嫁とガキ連れて応援に来るんだよ」

「こう見えてもねえ、この人、一昨年までは現役の選手だったんですよ」

傍らで控えめにしていた妻が、軽く笑みを浮かべ、口を開いた。

「へえ、凄いな。あたし去年からのサポだから分からないんだけど、どこのポジションだったの？」

悠子は興味しんしんだ。

「ボランチ」

「うっそお、そんな太ってんのに……あ、ごめんなさい」

悠子は慌てて口元を押さえた。

「あはは。こんな太ってたら、どのポジションだつてつとまりやしない。現役引退して太ったんだよ。もともとが太りやすい体質だったから、動けなくなったら途端にこのありさまさ」

男は自分のお腹を太鼓のように叩いて見せる。それが面白かったのか、抱きかかえられていた赤ちゃんが笑い出した。

「食事は、ダイエット食しか作っていないんですけどねえ」

ため息混じりに、妻も彼のお腹を叩いた。

「あ、あの、ボ、ボラ……チということは……あ、あき、秋高……選手と……」

風子が激しくどもりながら、不意に会話に入ってきた。

「おれの晩年は、まだ若造だった奴とのダブルボランチだった。ま、あいつはおれの背中を見て成長したようなもんだ」

男が偉そうに語る。

「なに、風子ちゃん、テツのファンなの？」

「ま……前に、駅前でバッグ盗まれたのを、と、取り戻してもらった……」

「へえ、あいつらしいな。直情型だから」

「分かった、それがきっかけでサポになったんだ」

「べ、別に、サポじゃ……」

「どこからどう見てもサポ！」

男と悠子がまるで示し合わせたかのように口調を合わせ、風子のユニフォームを指さした。

そうか、いわれてみればユニフォームまで着て観戦に来ていればサポーターと思われるも仕方がない。風子はどうしてユニフォームを買ったのか、自分でもよく分からないでいる。着ている人が多いので、かえって目立たなくなるだろう、と理由付けをしていたのだが、ではそもそもなんで毎回こんなところまで足を運んでいるのだ

ろうという疑問にぶつかってしまっ

「ま、しっかり応援してやってくれよ。あいつら単純だからさ、可愛い娘が応援してやりや頑張っちゃうよ」

「ずっと応援するよ。」に上げられるようにね」

「ところが、ハズミはJ入りは目指してないんだな」

「え、そうなの？ でもJFLって優勝すればJ2に上げられるんじゃないの？」

単純な戦国ピラミッドを思い描いていた悠子には、衝撃的な事実だった。

「いや、どこも目指しているわけじゃあない。JFLには大学だっているし、Jリーグチームのアマチュアだっているし。なんといつてもJに上がるにはいろいろな条件をクリアしないといけないんだよ。きちんとしたスタジアムを持っているか、きちんとしたチーム運営が出来るか。下手すりや大赤字を抱える羽目になる。蓮見製菓はハズミを名乗ったまま当面JFLで企業宣伝していくことを選んだんだよ」

「なるほどねえ。そういや、Jリーグのチームって、愛称みたいなのに都市名等を組み合わせてチーム名にしているよね」

「そう。逆に、企業名を付けちゃ駄目なんだ。去年加入した熱海工スターテも、今年加入したFC島根も、最初からJ入りを目指しているから地域の名を付けているわけさ。現状のいろんな損得を考え、蓮見製菓は今のスタンスをとっている。ま、いつかJ入りを目指さないと限らないってわけだ。といつても、このまま負け続けたら、入れ替え戦決定だけだな。もしそれにも負けでもしたら、また社会人リーグに逆戻りだ」

「まずいじゃん。おじさん、社会人リーグ相手なんだからって気を抜いてたら絶対やられるよ！ まずは入れ替え戦を回避しないと。それには得点だよ。だいたいさあ、なんでここまで点が入らないの？ 高校生がジュビロと練習試合やって、たまには得点するよ」

「……なんでだろうなあ。ちよっとずつ形になってきてはいるんだ

けど、負ける度に負け犬根性もどんどん膨らんできちゃっているからなあ。まぐれでも一点入れば、大きく変わるかも知れないけど。……いや、まぐれでも何点か入るだろ、普通。おれも信じられないよ。……もうじき試合始まるな。じゃあ、おれはいつもの席で観戦すつから。じゃな。応援頑張ろうぜ」

男は階段を降りて行った。妻は少女たちに会釈して、後を追う。

「じゃあねー、面白いおっちゃん」

悠子は手を振った。

拡声器を使ってコールリーダーが叫んでいる。

「きょーこそゴオルを決めて勝つぜえー！」

ドン ドン ドン

オーイ！（とサポの叫び声）

「きょおこそ、お得意様の名を返上するぜえー！」

ドン ドン ドン

オーイ！

オオオ~~~~~

ドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！

ドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！

ドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！

ドンドンドンドン！ ハズーミエスシー！

オーイ！

紙吹雪が宙に舞う。

風子と悠子も手にした紙くずを高く放り投げた。

さきほど応援団の者が手分けして配っていたのを受け取ったのだ。「今日の応援はすつごい気合いが入っているなあ。なんかさあ、今日こそ勝っちゃいそうな気がしてきたぞお」

悠子は周囲を見回す。このムードに、なんだか気持ちが弾んでくる。

さきほどの蓮見製菓社員を名乗る中年男がいつていたように、得点さえあげられればチーム浮上のきっかけになるかもしれない。そして、この熱海エスターテ戦がもっとも得点出来る可能性のあるカードなのだ。みな、それをよく分かっているのだろう。

今日もフェンスには選手の横断幕がびっしりと張られている。

主審の笛が鳴った。

ハズミSCボールでキックオフだ。

有村耕平は自陣へボールを戻す。強く蹴り過ぎて、田中が受け損ねてしまう。走り寄って来た熱海のFWは、そのまま駆け抜けボールを追う。田中が慌てて後を追う。DFの倉谷隆良が慌てて上がってボールを受けたが、熱海のFWのプレッシャーに焦って処理をもたついてしまい、そのままかつさらわれてゴールを決められてしまった。

試合開始後わずか十秒足らずだ。

熱海サポーターから激しい太鼓の音が上がった。

「なにやってんのよ、もう」

悠子はぐにやりとクラゲのように脱力して、風子の肩にもたれかかった。

「な、何点取られたって……一点……入れてくれれば……」

風子の呟き声はサポーターの声援にかき消されてしまう。密着していなかったら悠子にも全く聞こえなかっただろう。

熱海ゴール前での混戦、熱海のクリアボールを拾った秋高鉄二は、後ろから押し倒された。ペナルティエリアのすぐ近くという絶好の位置でハズミSCがFKを得た。

田中英二がボールをセットする。主審に位置をもう少し下げるよう指示されている。

ゴール前では両チームの選手達が密集し、審判に注意されない程度にささやかな小競り合いが行われている。

「また、なんか目を閉じて呟いてるよ。ナベテル、なんていってんだろ」

悠子はオペラグラスから目を離した。

「目には青葉……」

風子は呟いた。

ゴール ハズミ ゴールゴール！

ゴール ハズミ ゴールゴール！

ハズミサポーターの大声援。ゴールチャンスの大いにあるセットプレーの際には、必ずこのコールが使われる。

悠子も合わせて大きな声で叫んでいる。

風子は小声で呟きながら、手拍子を送っている。

ゴール ハズミ ゴールゴール！

大声を出せない分だけ、心の中では誰よりも強くハズミSCのゴールを念じていた。

……あれ……これってサポーターなのかなあ。

主審の笛が鳴った。

田中英二が熱海ゴール前の集団の中へと、ボールを蹴り込んだ。熱海の選手にヘディングクリアされ、これまた待ち構えていた熱海の選手に拾われてしまう。熱海の素早いカウンターに、ハズミSCの選手達は慌てて後を追う。陣形を整えることどころか攻撃を遅らせることも出来ないまま、熱海のたった二人の選手にどんどんボールを運ばれていく。

それから風子と悠子の口からため息が漏れるまで十秒とかからなかった。

試合終了。

結果は……いうまでもないだろう。

4

教室でのみんなの反応は、当然といえば当然だった。はじめは別のクラスの女子生徒が間違って入って来たのかと思った。

しかし、このうつむき加減といい、暗い表情といい、歩き方といい、この身に纏ったオーラには覚えが……

生徒達の頭蓋骨内側にある灰色の物質を「しかし」「まさか」「でも」「やはり」と様々な電流が巡っている間に、女子生徒は佐久間風子の席に座ってしまっただけではないか。

教室が一齐にどよめいた。

「もしもし、あなた教室間違ってますか」。何組の生徒ですか」

お調子者の高木栄介が、腰低く走り寄ってきた。

「い……— B」

疑惑が確信に変わったことで、また一齐に教室がざわついた。

佐久間風子が、あの別の生き物が乗っかっているかのような長髪をばっさりと切り落としたのだ。

「おい、ブーコのやつ、あんな可愛い顔だったのかよ」

「別人じゃねえの」

「いや、確かにあんな顔だったよ。今まで部分部分しか見えなかったから、よく分からなかったけど。しかし髪切るだけで変わるもんだな」

「ほんと。すつげえブスだと思ってたら全然。反対なんだもんな」
みな思い思いを口に出している。

「ブー、なんで髪切ったんだよ」

種田健太が訊く。

「……サッカー見るのに……邪魔……だったから。……ほ、本当はちょっとだけ、短くするつもり……だったんだけど……」

「なに、お前サッカー観戦すんの？ どこ？ 遠いべ。仙台か山形だろ」

「……ハズミSC」

「わお、蓮見製菓サッカー部かよ。お前、どえらいオタクな趣味してんなあ」

種田は国内外問わずサッカー全般が好きで、近所のチームという

ことでハズミSCも名は知っていた。

風子の態度は全くの普段通りなのだが、種田があれこれと聞いてくるので応じているうちに自然と会話が弾んでしまった。

放課後。風子は女子トイレの鏡に向かってしている。なんとはなしに「ゆ」「う」「じっ！」の手つきを練習してみる。

ハズミSCのFWである轟佑司の応援は、最後の「ゆ」「う」「じっ！」の部分で手と指を素早く動かす。近藤悠子によると、それをサポ全員で行うのがミソなのである。得点力不足を急に憂いはじめた悠子は、先日の試合後、風子に居残り練習をさせた。

風子はじつと鏡に映った自分の姿を見る。

今日一日のことを振り返る。みんなの態度を思い出すと、くすぐったいような心地よさに全身が包まれる。

自分次第で他人の自分への態度は良くも悪くもなるのだ。

ゆっくりでいい。

変わって行こう。

どうやら自分には、JFL観戦が自分を変える役に立っているみたいだ。なら、まずは近藤さんみたいに、しっかり応援できるようになろう。

変わって行こう。

痛みを少しでも和らげるために。

少しでも、他人にとって無害な存在となれるように。

苦痛の少ない人生を送れるように。

びしり。といきなり頬をひっぱたかれるような鋭い音と痛みが風子を襲った。足下になにか落ちる。濡れ雑巾だ。女子トイレのドアに、遠金恵理香ら三人が立っていた。

「お前さ、調子こいてるだろ」

「遠金が近寄ってくる。」

「……そんなこと」

「じゃ、なんだこれ。えらいオシャレじゃん」

遠金は風子の髪の毛を思い切り引っ張った。

「気分いいか？　でもおかげであたしの気分は最悪だ。どうしても
れんだよ」

風子のすぐ目の前に遠金の顔があった。薄笑いを浮かべながらも、
目を吊り上げらせて風子を睨み付けている。

「そんなこといわれても」

「日本語分かんねえのかてめえ！　どうしてくれるって聞いてんだ
よ！」

風子は振り回され、壁にぶつかった。

「ムカツクんだよ、てめえ」

苦痛に顔を歪める風子の腕を引っ張り、個室の中へと突き飛ばした。
風子はまた壁に叩き付けられる。遠金は風子の髪の毛をぎゅつ
と掴み、体重を乗せて引っ張り降ろし、無理矢理に風子を跪かせる。
風子はもがいて抵抗をするが、構わず和式便器の中に風子の頭を
突っ込んだ。

「汚えゴキブリを消毒してやるよ。ついでにベロでトイレ掃除でも
しやがれ！」

遠金は風子の頭をがっちり押さえつけながら、肘でレバーを押し
た。激しい勢いで吹き出す白い飛沫の中に、風子の頭は隠れてしま
った。風子はなおも全力で逃げようとするが、後ろから谷澤達子と
矢野舞子に押さえられて動けない。

水の流れがおさまると、ようやく遠金は風子の髪の毛を掴んで引
っ張り上げた。

風子は思い切り息を吸い込んだ。そして激しく咽せた。ごぶ、と
音をたてて水を吐き出した。

「ちつとも便器綺麗になつてねえじゃねえかよ、ばけ。もう一回や
つぞ。……そうだ、その前に気付けにいいもんやるよ」

遠金はポケットからたばこを取り出し口にくわえると、ライター
で火をつけた。苦しそうな表情で大きく呼吸をしている風子の髪
の毛を掴んで持ち上げ、軽く開いた口にたばこをねじ込んだ。頭と顎

をがっちり押さえ、たばこを吐き出せないよう固定した。谷澤も楽しげな顔で、風子の鼻を摘んだ。

「お前にや上等すぎるしろもんだ」

風子の目が見開かれた。トイレに押しつけられていた苦しさから、たばこの煙を深く肺に吸い込んでしまったのだ。頬が爆発したように一瞬膨らんだ。口も鼻も押さえられているため煙の出口がなく、また吸い込んでしまう。激しく暴れたした風子は火事場のなんとやらで遠金の手を振り解いた。

風子は涙目で、四つん這いになり激しく咳込んでいる。体勢を変え、壁に背を預ける。やがて咳はおさまり、風子はぐったりとした様子で動かなくなった。表情も朦朧としている。

「たばこも吸えねえのかよ、だらしねえ奴」

遠金はそういいながら、また風子の開いた口に火のついたたばこを突っ込んだ。

「先生、こつちです！ 女子トイレです！」

女子生徒の叫び声。他のクラスの生徒が、風子へのいじめを目撃して、先生呼びにいったのだろう。遠金は舌打ちした。

その叫びに、遠のきかけていた風子の意識が戻る。またたばこをくわえさせられていることに気付き、指で摘んで口から出した。

「入るぞ！」

中年男性の叫び声。体育担当の教師だ。

「お前ら、なにやつとんだ！」

遠金達三人が立っている。その奥、個室の中では頭がずぶぬれの風子が、壁にもたれかかり、うつろな目をしている。その手にはたばこが握られている。たばこの先端から煙が上っている。

「先生、佐久間さんがたばこをこつそり吸ってたんです。いってもやめないので、バケツの水をぶっかけてやりました」

遠金は、隅に置いてあるバケツにちらりと目をやった。

風子の意識が完全に戻った。慌てて、手にしていたたばこを便器の中に捨てた。じゅっ、と音がした。

「おい、佐久間、遠金のいったこと、本当なのか」

風子は口を開きかけるが、脳がすっかり混乱して言葉が出てこない。

「いいたいことがあるならいえ。黙っているってことは、罪を認めるってことだぞ。どうなんだ」

冷静になつてくるにつれ、たはこの件の言い分ではなく、この体育教師への怒りがこみ上げてきた。普段の行動から人間を判断する能力がないのか。いった者勝ちなら、上手に喋れない人間は常に悪か。

「おいお前、先生に向かって、その睨むような目つきはなんだ。たばこ見つかつて、反省するどころか居直る気か。この馬鹿たれが！」

佐久間風子には五日間の停学処分が下された。

5

指令塔 21

田中英二（ハズミSCキャプテン MF）

蓮見製菓サッカー部がJFL昇格を決め、戦いの舞台が移るともにチーム名もハズミSCと改称した。大幅な選手入れ替えはない。田中英二は数少ない新規加入選手の一人だ。今回の「指令塔」では、元Jリーガーである田中英二に人生をそしてJFLを語ってもらった。

――月並みな質問で恐縮ですが、田中選手がサッカーを始めたきっかけを教えてください。

田中 よくあるパターンかも知れないけど、小さな頃は野球少年だった。でも僕の場合、ここからがちょっと違うんだね。あまり動

体視力が良くなくて、飛んで来るボールが怖かった。野球ボールって小さくてかたいからね。小学校3年、4年となってくると、だんだんみんなスピードのある良いボールを投げるようになってくる。そして、ついに恐れてたこと、ここ（右目）をばちんとやってしまった。別に脳にも視力にも、全く影響はなかったけど、とにかく野球ボールが嫌になつて、それから野球には参加しなくなりました。でも体を動かすのは大好きなんです。小学校の頃は猿と呼ばれていたくらい（笑）。ある日、校庭で同じ学年の子達がサッカーボールで遊んで、仲間に入れて貰ったら結構面白くて。

――で、すっかりサッカーにはまってしまったと。

田中 そう。田中英二伝説の始まりですよ。おれの生きる道はこれしかないぜ、って感じにすっかり夢中になった。現金ですよ。

――ボール恐怖症は、サッカーでは大丈夫だったんですか？

田中 だってサッカーボールなんて、野球ボールに比べりゃ柔らかいし、野球に慣れているとスピードもそんな出ないし、って怖さは全く感じませんでしたね。ところが中三の時に、ここ（右目）をばちんとやってしましまして、まあ痛い痛くないのって。サッカーボールを激しく舐めてた！ すまん、サッカーボール！ でも、恐怖症はもう克服してたんだろうね。痛かったけど、平気でプレー続けたよ。もう中三になつてたし、それに本当に好きなことをやってるって思いもあったからだろうね。そうだそうだ、思い出した、あの時、大好きな女の子が試合を見に来てたんだ。それで頑張っちゃったのかも。でもその女の子は、別のやつ目当てで来てただけど。

――高校サッカーでは大活躍でしたね。

田中 いや、あれはね、チームが僕を活かすサッカーをしていたってだけの話。チームが調子よかっただけです。当時はそんなこと思いもせず、すっかり天狗になっていたけど。我いるが故に富二高あり、って。

――そして、Ｊリーガーになりましたね。失礼かも知れませんが、今の立場からその頃を振り返って如何ですか？

田中 別に失礼じゃないですよ。あの頃はねえ、僕の光であり闇なんですよねえ。ほら、知っていると思うけどトップの試合に一試合も出して貰ってないでしょ。まだ天狗みたいな高い鼻になっているままだったから、こいつら馬鹿じゃねえの、なんでオレを使わねえんだって思っていた。でもいざサテに出して貰ったら、もう全然なの。鼻が縮んだというより、根元からナタかなんかでズバツと切り落とされたような感じ。高校で実績残したやつってさ、とりあえずどっかのプロチームに雇われはするものの、活躍出来るかどうかは全く別なんだよね。たとえばすごい背の小さな選手がそうじゃない。高校ではさ、ちょこまかとして、意外と通用したりするんだよね。でもＪリーグでは、トップに全然出して貰えないうちに戦力外になったりしている。だから逆にトップに出ているそういう選手ってのはすげえなっと思っていますね。生半可な努力や才能じゃないってことだもん。

――そして、ＪＦＬ選手になりました。

田中 そう。戦力外くらってね。トライアウトにも参加したけど、誰の気も引かなかったみたいね。結局選手同士のコネで、ＪＦＬチームを紹介してもらった。別に仕事をしながらだけど、いいか？ っ。いいわけねえよ。嫌だよ、働きながらなんて。才能だか努力

だかが足りなくて、どこにも雇って貰えなかったのに、練習時間もとれないんじゃない。でも、カミさんのお腹に二人目がいたし、無職つてのもやばいし。それで、契約した。ハズミと違って市民クラブで、職場もコネで紹介して貰ったよ。働いて、夕方から練習して、帰って寝て、起きて、働いて、練習して、その繰り返し。それで日曜は試合をして。辛くても、生活かかっているからやめられないし、サッカーから離れて職を探したほうが収入や将来性考えるといいのかもって思ったけど、サッカーから離れることは自分からチャンス捨てちゃうってことだし。と、さいの河原で石を積み続けなけりやならないような、えらいどんよりした気分になっちゃって、精神科に行こうと思ったくらいだよ。でも病院に行く暇もない。時間配分が全く分からなくて、たまの休みも何していいのか分からない。でもだんだんとそんな生活にも慣れてきたけど。今では休みの日にはカミさんと子供と出かけたりしてる。この前、遊園地に行ってきたよ。

――そして今年から、ハズミSCの選手になりましたね。

田中 カミさんの実家にも近かったし、JFL昇格したばかりのチームだから、より自分をアピール出来るんじゃないか、自分が引っ張っていけるんじゃないかと思って。待遇もまあ以前より良かったし、あ、こういうのって言っちゃヤバイすかね。でもまさか、ここまで点が取れないとは思わなかった。去年までは外国人一人が点とってただけみたいだから、今、チームは生まれ変わろうとしているんだと思う。個々の選手だけをみれば、ここまで勝てないような面子じゃない。チームの戦術がね、監督の言っていることは凄い理論が分かりやすいんだけど、実践するのが難しいのかも。浸透すればずっと強くなれると思う。外からの新しい血であるオレが、そういうところに貢献出来るんなら、ほんとこのチームに来た甲斐があるってもんだよね。

――最後にサポーターに何か一言をお願いします。

田中 これからもハズミSCへの応援をよろしくお願いします。
みんなとても頑張っていますんで、一人でも多くのサポーターに来て頂いて僕らの勝利をアシストして貰いたいです。そして勝利の喜びをともに分かち合いたいです。はやく、得点出来るよう、みんなで一生懸命練習して行きます。多分、ファーストゴールは僕が決めるでしょう。

――今日は有り難うございました。

田中 いえいえ、こちらこそ。どうもお疲れさまでした。オレ、なに言っちゃってるか分かんないんで、しっかり編集をお願いしますね。

(5月8日 蓮見製菓野々部工場第二グラウンドにて)

6

風子は週刊蹴球を閉じた。蹴球はJリーグから少年サッカーまで、日本のあらゆるサッカーに焦点をあてていくマニアックな週刊誌だ。去年刊行したばかりだが、売れ行きがあまり芳しくなく、廃刊寸前と噂されている。

ここはケーキ屋ノワゼットの奥にある畳敷きの休憩室。

休憩時間終了まで、あと二十分ある。

風子は立ち上がり、ドアを開けた。

「て、てんちよ……なにか……しましょうか」

「いや、いいんだよ。一時間しっかり休憩して、それからしっかり働いておくれ。しかし助かったよ、平日だっていうのにフルで入ってくれて。急に病欠が出ちゃったからね」

「ねえ店長、いま例の宅配業者から……れん……ら、らくが……」
メモを片手に、下平が入って来た。風子の顔に気付いた途端、突如顔が真っ赤になり、喋り方も非常にぎこちないものになった。

「い、いち、いち……じ、じ、じかじかん……お、お、おお、おく、おくれ……お……」

まるで風子だ。

「一時間遅れるんだね。了解」

下平は右手右足を同時に踏み出し、去っていった。

最近、風子の顔を見るたびにこうだ。なんの冗談なのか、風子にはさっぱりわけが分からない。

「ねえサクちゃん、フルで入ってくれるのは有り難いんだけど、停学くらったって本当かい」

風子はためらいがちに頷いた。

「ま、サクちゃんのこと信じているけどね。友達を庇ったかなにかしたんだろう。……なにかを抱えてて辛いなら、相談にのるよ」

風子はしばらく無言だった。去りかける店長の背中に、唐突に声を投げかけた。

「あの……て、店長は……に、人間……好きですか？」

「やぶからぼうに、しかも変な質問だなあ。……好きだよ。若い頃に私生活でも仕事でも、人に裏切られてこっぴどい目にあって、すっかり人間不信になってしまったことはあるけどね。それどころかなんで人間なんかに生まれてきてしまったんだろうってノイローゼ気味になってしまったこともあるけどね。でも、いまは人間でよかったって思っている。……わたしだけの考えかも知れないけど、人間を嫌いな人間にお店を経営する資格はないと思うんだ」

風子は若い頃の店長と同じだ。酷い目に遭ってすっかり人間嫌いになっている。人間でよかったなどと、これっぽっちも思えやしない。別の生き物ならばそんなに苦しむこともないのに。いや、そもそも生まれてこなければよかったのに。でも、誰に頼んだわけではないが生まれてしまったからには仕方がない、少しでも苦しまずに

すむようにひっそりと生きていきたい。

老婆の声が聞こえてきた。なにやら聞き覚えのある声だ。

「てんちよお！」

滝川良枝の声に、店長は店へと出て行った。風子もその後続いた。

カウンターの前に着物を来た老婆がいた。片手に紙袋を下げている。

「この前、このお店の二人の娘さんに、親切に道を教えて貰ったので、お礼にと思ひまして。ケーキ屋さんにお菓子というのも妙かも知れないけど、でもどうかみなさんで召し上がって下さい。……あら、あなた……」

老婆は、店長の後ろにいる少女の存在に気付いた。

「あの時はどうもありがとう。……髪の毛切ったのね、とても可愛いわ」

老婆はにっこり笑った。

風子と店長は店の外に出て、老婆の立ち去るのを見送った。

老婆の姿が雑踏の中に消えた。

店長は店の中に戻った。

風子は茫洋とした表情で、突っ立っていた。

我に返った風子は、なんとなく空を見上げた。

風が吹いてきた。

四章 UP AND DOWNDOWN

1

蓮見製菓野々部工場第二グラウンド。

非常に見晴らしがよい。野々部市が三百六十度を小高い山々に囲まれた盆地であることがよく分かる。

このグラウンドはハズミSCがまだ蓮見製菓サッカー部だった頃から選手たちが練習用に使用している。

眺めも空気も土の感触も良く、アマチュアチームとしては上等過ぎるほどのグラウンドだ。しかし晴れ続きの日限定だ。非常に水はけが悪く、少し雨が降ると一転して水たまりだらけの最悪なグラウンドへと変わる。関係者はなんとかしたいと思っているようなのだが、なにせ予算がない。

梅雨も終わり、ここ最近は運良く晴れが続き、非常に良好な状態が保たれている。

蓮見製菓の第一工場から、徒歩五分ほどの川沿いの場所にこのグラウンドはある。川沿いの道とグラウンドとの間に、十メートルほどの高い金網が張られ、ボールが川に飛び込まないように対策している。それでも月に何個かは、ボールを川に流してしまう。

せつかくの広大な敷地を無駄に遊ばせておいてもいいものかと部外者すらも思わず心配してしまうくらい、朝と昼は無人だ。耳をすませば悠々と流れる川のせせらぎと、敷地の向こうにある国道を通るトラックの音が聞こえてくる程度で、目に見える動きというものが全くない。

いつも夕方の四時くらいになると、誰かがあらわれ、一人でボールを蹴ったり、ランニングをしたり。そうこうしているうちに、さらに一人、もう一人とやって来る。五時前には、仕ことを抜けられない社員を抜かせば全員が揃う。カラーコーンやビブス、ボールの準備をし、グラウンドにラインを引き直し、など楽しげに大騒ぎし

ながら行っていると、監督がひよっこりとあらわれて、そして本格的な練習が始まるのである。

今日このグラウンドに一番にやって来たのは与那嶺怜二だった。

通常は夜の七時か七時半には練習が終わる。その後、それぞれにストレッチなど肉体のアフターケアを行い、最後に全員が集まって監督の「今日の一言」を聞いて、解散だ。

今日は通して六人の練習見学者がいた。熱心なチームサポーターが三人。ハズミSCと知ってて足を止めて見ていた一般人二人、「なんだか分からないがサッカーをやってるぞ」と足を止めた一般人が一人。

サポーターは、女性が二人、男性が一人。女性は知り合いではないようで、離れた位置で、片方は声を張り上げ、片方は黙って練習を見ている。男性は、五時頃にやって来てグラウンドの隅っこに腰を降ろしている。黒縁眼鏡をかけた、太った男だ。選手達がジャージに白いTシャツというラフな格好だというのに、男はただ一人ハズミSCのユニフォームを来ている。ノートパソコンを持ち込んでいて、練習風景を見てはなにやら入力していた。時折カメラを取り出して、撮影をしていた。

フェンスはあくまでボールが川に落ちないように対策しているだけで、人の出入りを遮断するものではない。別にグラウンドに入って見学することは禁止されていない。もちろんボール直撃の可能性があるとというリスクは覚悟して背負って貰う必要があるが。

今日は五時ちようどから、きつちり三十分刻みでメニューが進んでいった。シュート練習、セットプレー時の攻撃と守備の練習、次節沖縄で行われるアウェイゲームのための戦術指導時間、その戦術を体に叩き込むためスタメン候補とそれ以外に別れて十五分ハーフの紅白戦。

紅白戦は、どちらも全く手を抜いているようには見えない非常に攻防の激しいものだった。時間が短いので体力配分を考えなくてもよかったからだ。それにしても、まるでフットサルであるかのよう

に、互いにゴールがよく決まる。気負わなければ得点力があるということなのか、それとも紅白戦では攻めることしか考えずに守備がおろそかになっていただけなのか、それとも試合を控えた身で怪我をするわけにいかないので実は手を抜いているのか、なにせ味方同士のことなので端から見ていてもさっぱり分からない。ただいえるのはみんな非常に楽しそうだということ。

紅白戦の結果は、四　六で非スタメン組の勝利だった。敗れたスタメン組は罰ゲームとして腕立てふせ三十回をさせられた。

さて、練習が全て終了して選手たちが解散すると、待ってましたとばかりに二人の女性ファンがそそくさと近寄って行く。レプリカユニフォームにサインを書いて貰ったり、選手の写真を撮ったり、握手をしたり。

「テツさん、写真撮らせて貰っていいですか」

小さなカメラを手にした三十歳くらいの女性が、汗を拭きながら歩いている秋高鉄二に声をかけた。

「いいですよ。どの辺に立ちましょ」

鉄二は特に営業スマイルを浮かべるでもなく、しかし邪険にすることもなく応じる。

「わしが撮ったるよ。ほれ、彼女の横に並べや」

と、監督が駆け寄って来て強引に女性からカメラを奪ってしまった。頭髮にはかなり白いものが混じっているが、これでも四十代前半だ。

「……あれ、フィルム巻き巻きのツマミがないぞ、覗き窓もない。なんだこれ」

「デジカメだよそれ。電源入れりや画面が映るからファインダーがなくてもいいんだよ」

監督は独り言を呟きながらカメラをいじっている。唐突にフラッシュが瞬いた。鉄二は不安に思っただけで撮影した写真を、女性にチェックして貰った。ビギナーズラックなのか能ある鷹はなんとやらなのか、いっそ不気味なほどに表情やアングルが素晴らしく巧みな一枚

だった。夜のデジタルカメラ撮影は素人には難しいのに。

「よし、次はわしと彼女とのツーショットじゃ、ほらテツ、カメラ」
「おれが撮んのかよ」

監督は女性と肩を組んでブイサインをしている。

佐倉成太監督は今年からハズミSCの指揮権を任命されている。

JFL昇格に合わせて外部から招いた人材だ。佐倉監督は、ファンサービスを試合と同じくらい大切なことと捉えている。それは「Jリーグはそうあるべきだ」、という根底にある思いから来ている。チーム名が変わったもののあくまで企業名を名乗ることから、会社がJリーグ入りを目指していないことは明らかだが、しかしそれでは向上心を持ったための材料を一つ失ってしまう。自分が監督である以上はJリーグに上がる力をつけることを目標にしたい。現在J2の一つ手前にいる立場なのだから、まずはJ2を目指したい。会社の方針が変わった時、すぐその年に昇格を決められるような力を蓄えておきたい。

そして、Jリーグを目指すからにはファンを大事にする気持ちも育てていかなければならない。Jリーグは客が存在して成り立つプロのスポーツなのだから。結果を出すことが一番なのだが、それだけではない。

実際、運よくJリーグに昇格出来たとしても、補強によってかなりの選手が入れ替わるだろう。今の選手は単なる運見製菓のサッカ―部員だし、ほとんどの選手が入れ替わってしまう可能性だってある。しかしそれでも、現在チームに対して行っている意識付けは、チームの持つ性格として後々に受け継がれていくはずだと佐倉監督は考えている。

メンタル面が弱そうなチーム、ロスタイムの失点が多いチーム、雨に強いチーム弱いチーム、などあるが、個人個人の能力や性格の平均値としてなるほどそういう性質のチームとなることもあるだろう。しかし、それだけではないのだ。例えば選手が全員入れ替わろうともチームに残る性格というものがあるのだ。チームというのはそ

れ自体一体の生き物。選手は、その操り手でしかない。サポーターはチームという巨大な戦士を勝利に導くための、選手達の頑張りに声援を送ってくれるのだ。

自分も含め、ハズミSCを離れることになろうとも過去に在籍していたことを誇りに思えるような、そんなチームにしていきたい。佐倉監督はそう考えている。

683 200x年7月9日 (水) 20:19 じよにー
b3yy86c

新人も入ったことだし、今日は久々に練習見学してきたYO。

紅白戦やってたけど、やっぱり友井芳樹はいい感じだった。来たばつかだからまだサブ組だったけど、次節スタメン起用もあるかもよ。

与那嶺がルーレットやって、方向感覚が狂って反対方向に走っていたのには笑えた&ちよつと萎えた。

優斗は、もう怪我大丈夫みたいだ。紅白戦スタメン組で、随分動いてた。シュート練習の時も一番枠に行ってた。

いちよお(何故か変換できない)練習風景の写真張っておくから見とけ。

<http://xxxxx...co.jp/joni>

684 200x年7月9日 (水) 20:35 名無しのサ
ポーター 1ttxbp

乙

685 200x年7月9日 (水) 20:58 名無しのサ
ポーター ossaeb4

じよにい氏、乙彼山。

友井、不安もあったけど良い補強だったんだな。腐ってもJリーガーってことか。これで守備が安定するといいな。

6 8 6 2 0 0 x 年 7 月 9 日 (水) 2 3 : 0 2 m 1 x 4 j
7 a

それよりテツをどうかしてくれ。穴だ。

6 8 7 2 0 0 x 年 7 月 9 日 (水) 2 3 : 1 0 u j 4 9 3
b v

< < 6 8 6

アホか、テツに負担かかりすぎてる現状が問題なんだよ。

6 8 8 2 0 0 x 年 7 月 9 日 (水) 2 3 : 2 2 m 1 x 4 j
7 a

ヨントスちつとも助っ人じゃないじゃん。

6 8 9 2 0 0 x 年 7 月 9 日 (水) 2 3 : 5 2 u j 4 9 3
b v

< < 6 8 8

荒らしか、お前？ なんにも分かってねえな。もともとヨントスは助っ人じゃねえよ。蓮見でアルバイトしてたサッカー初心者だよ。

6 9 0 2 0 0 x 年 7 月 9 日 (水) 2 3 : 5 3 j h v m e
r v

ヨントス結構よくなってきたよ。もうちょっとよくなれば、プラス友井効果で、かなり守備安定するはずだよ。そうなれば、テツの攻撃参加も増えてくると思う。

6 9 1 2 0 0 x 年 7 月 1 0 日 (木) 0 : 3 4 0 q x b 3
k b

そうなれば、あと問題なのはヨナミネだけだな。

6 9 2 2 0 0 x 年 7 月 1 0 日 (木) 0 : 5 0 j h v m e
r v

穴ってほどじゃないけど、プレイが軽いんだよな。意識の問題。焦ってすぐ不用意なファールするし。あんなオドオドした沖縄人、見たことないよ。ばあちゃんがアメリカ人だっけ？ 顔は思い切り欧米面なんだから、もっとずうずうしくなりやいいのに。

6 9 3 2 0 0 x 年 7 月 1 0 日 (木) 1 : 4 8 0 q x b 3
k b

こうまで点取れないのに、D F 補強だけつてのも、ちよつとどうなのかなって考えちまうよな。今の状態じゃ、F W だけ補強すりゃいいってもんじゃないのは分かるけど。

6 9 4 2 0 0 x 年 7 月 1 0 日 (木) 2 : 2 3 0 q x b 3
k b

誰もいないか。
おやすみ。

2

七月十三日、日曜日。ハズミSCは沖縄のチームと対戦した。沖縄まで行く財力も時間も気力も度胸もなにもない風子の唯一の情報源は居間のiMACだけだ。JFLの公式サイトより、本日の試合結果を知った。そしてその結果は風子を驚かせるものだった。スコアレスドローだ。

ハズミSCの試合に興味を持つようになってからというもの、無失点であったことがなく、一得点もあげられずに負けてばかりだった。相変わらず無得点ではあるが、それを差し引いても快拳と呼ぶに充分だ。

とはいうものの、一体、どんな試合だったんだろう。
攻めて攻めて相手を防戦一方に追い込んだのか、それとも反対に

防戦一方でなんとか守り切った試合展開だったのか。それとも全体的にだらけていて、時間だけがどんどん過ぎていったのか。

まだ試合が終わって間もないので、JFLの公式サイトにも、ハズミSCの公式サイトにも、勝敗の結果とメンバーリストが書いてあるだけで、試合内容には一切触れていない。いくつかある掲示板にも、まだ現地組からの書き込みはない。

ハズミSCは開幕戦もスコアレスドローで引き分けているため、これで一だった勝ち点が二になった。最下位に変わりはない。しかし、一勝のみで残り全敗という、ハズミSCと仲良しになれそうな鎌田製鉄FCに勝ち点一差に迫った。そのチームの挙げた勝ち点あ三が、どのチームからもぎ取ったものかは説明するまでもないだろう。

DFの渡辺輝彦がスターティングメンバーから外され、代わりに新加入の友井が入っている。リリーガーを格安で雇ったとのことだが、今日の無失点は早速彼を使った効果が出たということだろうか。ただ風子は渡辺輝彦のことを比較的気に入っていたので、少し残念な気もした。

気持ちは変化するもので、サッカー観戦初心者だった風子は、知っているというだけの理由で秋高鉄二ばかり見ていた。段々と選手のことが分かってくると、FWの選手に注目するようになった。なんとといってもサッカーは相手より点を多くとることで勝つ競技であり、FWはその得点を取る担当なのだから。しかしいくら試合を観戦していても一向にFWが点を取らない。いや、ハズミSCはチーム自体の得点がまだなので、FWの得点率もなにもないのだが、他のチームを見ていても、特にFWが一番点を取るというわけでもないようだ。それにより、勝利イコールFWの活躍というイメージがまず取り払われた。現在の風子はともDFというポジションに好感を持っているようだ。攻撃面は失敗すると単に残念で悔しいだけだが、DFはピンチを切り抜ける都度の達成感がある。もちろん失点すればショックだが、華のない黙々とした職人然とした態度に

風子は惹かれたようだ。DFは地味なものというのも偏見かも知れないが、とにかく彼女はそう思っていた。

3

四時限目も終わり、もう昼休みの時間だというのに、風子は一人黙々と体育用具の片づけをしている。女子の体育は月毎に選ばれた四人が当番として用具の準備や片づけをする決まりだ。七月は風子とその一人なのだが、他の三人は授業が終わると他の生徒らと一緒に教室に帰ってしまった。風子が彼女らを注意することなど出来ないと知っているのだ。

ハードル走用のハードルを両脇に抱えて二つずつ運んでいる。

四時限目の途中まで太陽にかかっていた雲も、今はすっかり取り払われ、強烈な陽光が地面を焦がしている。白い体操シャツも紺のハーフパンツも、すっかり汗が染み込んで重くて不快で仕方ない。早く片付けを済まさないと、あぶり焼きだか蒸し焼きだかになってしまいそうだ。急ぎたいのはやまやまだが、肩が痛くなってきた、いったんハードルを地面に下ろした。

そばにサッカーのゴールネットがあり、その前にサッカーボールが転がっていた。風子はちよつと興味を覚え、ボールに近寄ってみる。

渡辺輝彦からのロングフィード、高山田優斗が絶妙な胸トラップ、そのまま駆け上がりグラウンダーのクロスボール、そこに走り込んだ轟佑司、躊躇なく右足を振り抜いた！

風子の右足は虚しくもボールをかすめただけだった。それどころか勢い余ってバランスを失い後ろに転げ、無様に尻餅をついた。

年寄りのようなよろけながら立ち上がり、痛めたお尻をさすっていると、突然すぐ後ろから笑い声が聞こえてきた。

「だらしねえなあ。そんな蹴り方じゃあ、当たってもコロコロン転がるだけだぞ」

振り返ると、サッカーボールを小脇にかかえた男子生徒が、楽し

気にシワシワの笑みを浮かべていた。確か、二年生の鈴内達也だ。生徒会の書記かなにかの担当で、風子が入学して間もない頃に体育館で演説をしてやたらとみんなを笑わせていたので覚えている。

「ボールはね、こう蹴んの！」

鈴内は自分のボールを小脇に抱えたまま、風子が蹴り損ねたボールに小走りに駆け寄った。右足を後ろに振り上げ、そして振り下ろした。風子と同じことをしただけなのに、ボールはズバンと爆音のような小気味の良い音をたて、見事ゴールネットの右上隅に突き刺さった。

ゴールまでわずか数メートルの距離だし、別にネットに収まったからといって驚くほどのものではないが、その綺麗な蹴り方についての感心してしまった。瞬間的に細かくシャッターを切って白鳥の飛び立つ一瞬を撮影する技法があるが、まるでそういったものを見るような感じで風子の脳細胞には鈴内のキックが焼き付いていた。

「その顔は……ヴェルディだな！」

鈴内は風子の顔を両手で指さし、唐突にそんなことをいい出した。「……なんです……それ」

風子はきょとんとした表情。

「違ったか。じゃ、近いからモンテディオ。それが……J1で一番近いから、鹿島かな、でも遠いからな……」

ああ、なんだJリーグのチーム名か。

風子は首を横に振る。

「うーん、まさか代表にしか興味ないってことはないよなあ。そういうやつは自分でボール蹴ったりしないからな」

どういう理屈だ、それは。そもそも、ただ転がっていたボールをなんとなく蹴ろうとしただけなのに、何故日本代表以外のどこかのチームのファンでなければならないのか。

とはいっても、実際にどこかのファンであることに違いはない。

「ハズミSC」

呟く。

「え、知らねえ！ 地元サッカー団？ 社会人チーム？ サッカースピリッツのエディットモードで作ったオリジナルチームじゃないよな」

「……ＪＦＬです」

「ああ、なんだ。ハズミって、もしかしてあれか、あそこにお菓子工場あるよな、蓮見製菓、あそこのこと？」

風子は頷いた。

「へえ、あそこってＪＦＬだったんだ。意外に身近なところもあるもんだな。Ｊリーグ昇格なんてしたら凄いよな、この県で初だもんな。おれもあとでチェックしてみよつと。なに？ よく蓮見製菓、観戦してんの？」

「最近になってから、何回か……」

「お前、変わってんなあ。女でＪＦＬチームのサポーターだなんて……そう……なんですか？」

風子には基準というものがまったく分からない。それは男性の方が比率は圧倒的に多いだろうけど、女性が応援し、観戦しているのがそんなにおかしなことなのだろうか。

鈴内は自分の小脇に抱えていたボールを軽く放り上げて、額で受けた。そのまま額から落ちないよう、バランスを取っている。

「部活、どつか入ってる？」

風子は首を横に振った。上を向いてボールと格闘中の鈴内に見えるわけがない。「いいえ」と付け足した。

「いまマネージャー募集してんだよね。転校して、いなくなっちゃってさ。よければ来なよ。うち、部員多くないから、練習でだったらサッカーも出来るぜ」

やっぱり鈴内はサッカー部員だったのか。

「か……考え……ときます」

風子は別にサッカーをしたいわけではない。ボールを蹴ったのだから、バスケットボールや野球ボールを投げてみたのと同じ感覚だ。「タッチャーん！ 待たせたな。ベツちゃんが、飯食うのに時間かか

ってさ」

鈴内の友達らしい男子が四人、駆け寄ってきた。

「じゃ、はじめっか。そうだ、今日は三対三が出来るじゃん。それじゃ、今日は審判係はなしで。お前はおれたちのチームな」

鈴内は風子の腕を引つ張った。

あの……なんのことだか……

……体育の授業と後片付けとこの日差しとで、へとへとなんですが

……

「スタート！」

鈴内を含む五人が一斉に動き出す。

「彼女、パス！」

風子の足下にボールが転がって来た。なんだか分からずに一瞬躊躇したが、手を上げて合図をする鈴内にボールを蹴り返した。

「彼女、走って、そっち！」

なんとなくルールが分かった。後ろへのパスとドリブルだけで、相手側のあるラインに踏み込んだら勝ちなのだ。

しかし鈴内達也というのは、えらく強引な性格だ。だがそれが単に無邪気さから来ているだけということが、少し接しただけでよく分かり、憎めない。

風子はふと気付いた。

ここにいる人たちがみんな、自分に対して普通に接してくれていることを。

自分から殻に隠ってなにも見ずにいたが、アルバイト先のケーキ屋だってそうじゃないか。一人意地の悪いのもいるけど、みんな普通に接してくれている。駅前で会ったハズミの秋高選手だって、この前スタジアムで会った元選手のおじさんだってそうだ。

クラスでは現在の立場からの脱却は難しいかもしれない。立場関係というのは、出来上がってしまうとなかなか覆すことは出来ないし、本人の努力だけでどうしようもない部分もあるからだ。しかし、初めて会う人とならば、本人の心がけ次第でいくらでも良い関係を

築いていくことは出来るのだ。

まずは、ケーキ屋のみんなと馴染むことからはじめてみよう。こっちから飛び込んで行って、溶け込むことからはじめてみよう。

今日もアルバイト、頑張ろう。

予鈴が鳴った。風子は体育用具を片づけている途中だったことを思い出した。五人の先輩に手伝ってもらって、五時限目にはぎりぎり間に合ったが、お昼を食べる時間どこるか着替える時間すらなく、一人体育着姿のまま英語の授業を受けることになった。

4

ハズミSCは、他チームの都合による日程変更があり、七月十三日、七月十九日とアウェイでの対戦が続く。

十三日は沖縄県で、今日十九日は栃木県での試合だ。

今、風子はJR東北本線の電車に揺られている。

隔週で観戦をすることに慣れていたので、ホームゲームがしばらく行われないことにある種の禁断症状に陥ってしまい、栃木県ならば近いだろう、とアウェイゲームに行って見ることにしたのだ。近藤悠子にも声をかけたところ、どのみち彼女も一人で行くつもりだったらしく、風子のほうから誘ってくれたことに喜んでいた。しかし、悠子の親戚に突然の不幸があり、結局風子一人で行くこととなった。

最初は栃木県だから近くて楽だろうと思っていた。しかし、栃木県といっても広く、しかもローカル線からローカル線へと乗り継いで行くため、とんでもなく時間がかかるものだということを身をもって味わった。電車移動は、後はもう東北本線（宇都宮線）に乗って宇都宮に行くだけだが、宇都宮駅からさらにバスで終点までいかなければならない。さらにそこから、二十分ほど歩くらしい。よほど近くに住んでいない限りは、誰でも一日がかりになりそうだ。

普段は日曜開催が多いのだが、今節は土曜日でよかった。だから

来る気にもなつたのだが。

車内アナウンス。

ついに宇都宮駅に到着した。

下車する。

勝手の分らない場所でのあまりの人の多さに、目眩がして倒れそうになる。悠子と一緒にハズミSCの密集した席に何度か座ったことがあり、その経験のおかげでなんとか踏ん張ることが出来た。人生役に立たない経験はない。東京の人混みはこんなもんじゃないぞ、と一度も行ったことがなくせに、そう自分を励ました。

しかし、F県外にまで来てしまうとは。随分とのめり込んでしまったものだ。

そういえば、近隣県ながらも生まれて初めての関東地方体験だ。F県を出たこと自体、記憶にない。仙台生まれらしいので、少なくとも宮城にはいたということなのだろうが、小学校の遠足もF県内だったし、中学校の遠足や修学旅行は仮病で行かなかったし、F県以外のことを全く知らない。

さて、これからバスに乗るわけだが、バス停留所に書かれている路面図を見ても、何系統に乗ればどう行くのか、なにがなんだかさっぱり分らない。

牧歌的な小さな駅なら、今の状態の風子ならば人に尋ねることも出来たかも知れない。あまりに駅が大きくて、それだけで萎縮してしまい、ただただ困惑してしまうだけだった。

どれに乗ればいいんだろう。どのバスも、どうしてこう分かりにくいのだろう。

スキンヘッドの小太りの男が、黄色いユニフォームを来てバスに乗り込んでいる。あれは昨日ホームページで見た、対戦相手のチームユニフォームに似ている。他の乗客も大きなバッグを持っていたり、旗を持っていたり。きっと、あのバスに違いない。風子は駆け寄った。と、突然バスのドアが閉まってしまいが、運転手が風子の姿に気づいたのか、開けてくれた。

「あ、ありがとうございます」風子は息を切らせながら運転手に頭を下げた。「このバス……清原球場に行きますよね」

「行きますよ。終点です」

風子は胸をなで下ろした。

思っていたよりも簡単に言葉が出た。だったら最初から停車しているバスの運転手に尋ねておけばよかった。

再びバスの扉が閉まる。低い振動と共に、バスは走り出す。

「お姉ちゃん、ここ空いてるよ」

さきほどの黄色いユニフォームを着た、スキンヘッドの中年に声をかけられた。風子をバスに導いてくれた恩人ではあるが、あまりの顔の怖さに風子の心は縮みあがった。こういう場だし、普通の容貌の人に話しかけられてもすぐみ上がってしまうというのに。結局風子は、恩人云々の理屈ではなく、単なる恐怖心から、男の隣に腰を降ろした。

「サツカーだろう。清原球場行きかを尋ねるなんて」

とんでもない席に座ってしまったのかも知れない。

「はい」

縮こまりながらも、なんとか返事をした。

「初めてかい」

「ここに来るのは、は、初めてです」

「いつもは？」

「いつもはハズミのホームで」

「ハズミサポかよ！」

「うわ、ご、ご、ごめんなさい！」

つい口を滑らせたことを後悔した。

「おい、なに謝ってんだ。どこサポだろうと、一人でも多く来て欲しいよ。JFLは観客が少なすぎるからな」

「はあ」

風子はハンカチを取り出し、額の冷や汗を拭いた。

「いい試合になるといいな」

「……はい」

「ハズミ、ちよつと強くなつてきているらしいからな。よくは知らんが」

「はい」

それきり男は口を閉ざした。

そのままバスに揺られ続け、気が付くと終点に到着していた。

風子はスタジアム入り口で千円を払い当日券を買った。中に入る。両チームともゴール裏に熱狂的なサポーターが密集している。近藤悠子と一緒に来ていれば、その中に加わっていたかも知れない。いや、多分そうなっていただろう。悠子はそういうところを好む性格だ。風子は初めてハズミSCの試合を観た時のように、周囲に人の少ない席を選んだ。隣の席にバグを置くと、中からハズミSCのレプリカユニフォームを取り出して着る。

別に密集したところに行かなくなつて、サポはサポだ。

最近風子にはハズミSCサポーターである自覚が出てきた。

当然といえば当然だが、スタジアムのムードがいつもと全く違う。ハズミSCのホームでは、多くても観客数が八百人くらいだったのに、その倍以上はいそうだ。ハズミSCサポーターは、全体の二十分の一、百人程度、圧倒的にアウェイといった雰囲気だ。とはいえ、ハズミSCのサポーターはホームでも四百から五百人くらいなので、かなり集まつたほうではないだろうか。

スタジアム自体も、いつも観戦しているところとは相当雰囲気が違う。目に付いたのが電光掲示板だ。それと座席の数。観客席がピッチをぐるりと一周している。席はかなり傾斜がついており、後ろのほうでも見やすそうだ。

主審の笛が鳴った。

試合開始だ。

開始早々から、ハズミSCはどんどん攻め、相手を防戦に追い込

んだ。DFが安定してきたということ、いい加減に得点しなければならぬという苛立ちとの相乗作用だろうか。そう、とにかく相手より一点でも多く得点しなければサッカーは勝てないのだから、いつまでも無得点を続けてはいられない。早く勝利、せめて得点し、自信に繋げていかないと。

前がかりで攻めに攻め、ハズミSCは相手になにもさせなかった。サンドバッグを殴るかのように、好き放題にミドルシュートを打ちまくる。しかし相手に肝心なところでブロックされ、ベストな体勢からのシュートは全く許してくれない。そうこうしているうちに、不用意なパスをカットされ、縦パス一本であっさり相手FWにボールが渡る。そして、ハズミSC側のゴールネットが揺れた。運を天に任せて強引に先制点をもぎ取りに行く作戦は、前半十六分にして頓挫した。

以前の、自分達がなにをすべきかにおいて暗中模索といった状態のハズミSCならば、先制されたことによりかえって闇雲に激しく攻撃に出ていたかもしれない。しかし現在はそこそこ守備が安定してきているし、チーム内の役割もはっきりしてきているため、一点差ならばもしかしたら……という色気が出てしまっているようだった。これ以上の失点をしないよう慎重に行こうとするあまりに、やけにもったりとした、ただ中盤と最終ラインでボールを回すだけのサッカーになってしまった。そして後半三十分に、また失点、慌てて攻め出すがもう時は遅い。

試合終了の笛が鳴った。

○ 二でハズミSCは負けた。

今日は無風だが、夏の暑さとサポーターの熱気とが溶けて陽炎のようにゆらゆらと昇っている。

湿度が高く、じっとりとしている。汗で、服が体に張り付いて気持ちが悪い。

風子は空を見上げた。

青い空には綿菓子みたいな雲がぽっかりと浮いて、悠々と流れて

いる。地上とは裏腹に、とても涼しそうであった。

5

佐久間風子は、昨夜、初めて自分からサッカーのテレビ観戦というものをしてみた。

中東のどこかの国で行われていた、日本代表の試合だ。ライブで、番組開始は二十二時半「このあとすぐキックオフ」とテロップが出ていくせに、三十分待たされて試合開始は二十三時だった。

今までは、たまたまテレビを付けたらサッカー中継がやっていたり、一階に降りてきたら家族の誰かが見ていたということはあるが、自分には単なる風景や雑音のようなもので、まったく意識したことはなかった。

サッカーのルールや観戦の醍醐味というものが分かってきたこともあり、自ら意識してテレビ放送を観戦してみると、まあそれなりに面白かった。でもなんだかしっくりとこないものを感じていた。

○ 三で日本が負けて放送が終わり、二階の自室でベッドの中でうとうとしていた時に、ふと気付いた。改めて実感した。やはり自分はサッカーが好きなのではなく、ハズミSCというチームが好きなだけだ。どのチームが強くて、こんな特徴があり、あんな選手が要注意で、といった相手チーム情報だって、ハズミSCの対戦相手だから興味があるだけなのだ。

昨日は栃木県への遠征のため（といっても結果は撃退されたが）、土曜日のアルバイトを休みにしてもらったが、最近は基本的に土曜日はフル出勤して、日曜日を休むことにしている。以前は土日ともフル勤務だったが、JFLの試は日曜日に多いため、シフトを変えて貰った。

ホームゲームは隔週なので、試合のない日曜日は観戦資金をためる意味でも働いておきたいのだが、勤務日は曜日ではつきりさせないと職場に迷惑だし、他に日曜日をフルに働きたいという者がいた

ので、風子は日曜日を休むことになった。

風子の住む家のある田圃に囲まれた小さな住宅街を抜けて、狭い道路を少し進んだところに、地元民が「お寺の住宅街」と呼んでいる文字通りに昔からあるお寺を中心として発展していった住宅街がある。商店街もあり、静かながらもそれなりに活気がある。

風子は買い物用のバッグを右肩にかけ、お寺の住宅街を歩いている。バッグには買ったばかりの肉、野菜、魚、牛乳などが入っており、結構な重さだ。風子は自ら今日のお使いを買ってでたのだ。彼女の、家においての戦いは、まずは母に自分を認めさせること。買い物をするなど、なるほど取るに足らない些細なことに違いない、しかし風子には貴重な一步の踏みだしなのだ。完全に失われてしまっているコミュニケーションを、まずは取り戻すということが。

母は世間体というものを、過剰なまでに気にする。風子はそんな母のために頑張りたいのではなく、母のその世間体第一主義を壊してやりたいだけだ。そのために、まずは母の懷に飛び込むこと。自分がもつとしっかりし、母を引っ張っていくような存在になること。すべては、それから変えていけばいい。そしていつかは、父のことを変えてやる。

立ち止まり、重たいバッグを右肩から左肩にかけかえる。重心がかたよっていたため、腰が痛い。確か押入に大きなリュックサックがあるはずなので、それを背負って自転車で来ればよかった。

また歩きだそうとしたとき、賑やかな子供の声にふと気付いた。

ここは、しらゆり幼稚園の前。柵越しに園内に視線をやると、日曜日だというのにたくさんの幼児、そしてその中に混じって五、六人の青年がいる。周囲には、幼児の保護者と思われる三十前後と思われる男女。

なにをやっているのだろう。

あ……

風子は心の中で、間の抜けた声をあげた。青年達の顔にどことな

く見覚えがあつたのだ。

どこで彼等を見たのか、すぐに判明した。

ハズミSCの水田恭助と、田中英二、ピッチを走る姿を何度も目にしている。そういえば、残る青年らも公式ホームページで写真を見たような気がする。

サッカー教室だろうか。いや……鬼ごっこや隠れんぼ、めんこやベーゴマで遊んでいるだけだった。

確か水田は右膝の怪我で調整中、田中は警告の累積で昨日は出場停止だったはずだ。

後から近藤悠子に聞いたところによると、「出場メンバーに選ばれた選手は、平日の仕事のみならず土曜日曜もJFLの試合という大切な仕事がある。試合に出ない選手にも、住民への奉仕という貴重な大変な活動をしてもらうことでチーム全員の立場を公平にしている。これは監督の考案によるもので、今年の春から毎週日曜日に実施されている。この幼稚園だけではなく、野々部市と華鳴市の何力所かで奉仕活動が行われている。老人介護、ゴミ拾い、サッカー教室、等々。だからハズミSCの選手は全員、リーグ戦が終了するまでは週休が一日しかないのである」

遊びといえばテレビゲーム、といった子供たちに、めんこやベーゴマは古いところかむしろ新鮮なようで楽し気にはしゃいでいる。青年たちも負けじと楽しそうだった。実は選手らの大半も、この奉仕活動で初めてこのような遊びに触れた。だから彼等にとってもまた新鮮なのである。

風子は柵越しにそつとその様子を眺めている。

なんだかとてもほのぼのとしていて、見ていて悪くなかった。

6

「廊下走るな、馬鹿が！」

教頭の低い声が雷のように廊下の空気を震わせた。一学期の終業式を間近に控えたある日のこと。

「すす、すみませんっ！」

教師の怒声に振り返り謝りつつも、風子とはまらない。ジダンバリのルーレットを見せ、また走り出す。しかし、両腕に缶ジュースを四本抱えているので、うまくバランスがとれず、たどたどしく危なげな走り方だ。ついに、廊下に爪先をつっかけて転びそうになり、ジュース缶を全部落としてしまった。転がる缶を慌ててかき集めると、また走り出した。

なんだって引き受けてしまったんだろう。

どうして断らなかつたんだろう。

自分に少し自信が付いてきていたというのに……自分は少しずつ成長してきていると思っていたのに……それは勝手な思い込みだったのかも知れない。

先日、髪型を変えたことで、風子は自分でも予期しなかつたような大きなイメージチェンジを遂げた。風子は比較的整った可愛らしい顔立ちをしており、その正体が分かれると、現金なもので男子からのいじめは激減した。しかし女子からの風当たりは余計に強くなった。相対的には以前と変わらないとしても、風子は男よりも女のほうが陰湿で怖い生き物だと思っているので、余計に精神的苦痛が酷くなった。

風子は一年B組の教室のドアの前に立った。手が塞がっているの、少し下品だけどわずかなすき間に爪先を突っ込んでドアを開いた。

放課後の教室には、四人の女子がいた。

「ほうら、間に合ったじゃん。クマちゃん、ありがとう、お疲れ」

萩村紀子の笑顔が息を切らせている風子を出迎えた。

「もう……絶対オーバーすると思ったのになあ」

笠原香は怒ったような顔でえらく悔しがっている。

笠原香と梅村智子は、それぞれ萩村紀子と加藤るい子に千円札を渡した。

風子は理解した。

学校から少し離れた田圃の中にぽつんと存在している売店がある。そこにしか売っていないジュースを、十分以内に買って来いと脅され、不本意ながらもいう通りに実行したわけだが、制限時間内に買って戻ってこられるかどうかという賭けの対象にされていたのだ。

風子は彼女らに缶ジュースを渡した。

「あの……ジュースのお金は……」

風子は上目遣いでおずおずと萩村にいった。

「え、クマちゃんのおごりでしょ。さっきおごるっていったじゃない」いつてない。「じゃあね、ありがとう。あと、笠原もね。まいど」

萩村紀子はお札を振り振り、加藤るい子と一緒に教室を出て行く。

「香、あたしらも帰ろう」

梅村の言葉に、笠原香はしばし無言であつたが、突然席を立つと、風子に歩み寄り胸を強く突き飛ばした。風子はよろけ、危うく机を倒してしまいそうになったが、なんとか踏ん張った。

「この馬鹿。なにを頑張つて走つてんのよ。あんたのおかげで千円損したじゃない。なんか恨みあんの？ あたしが間に合うほうに賭けてたら、逆に手を抜いてゆっくり買って来るつもりだったんでしょ」

「だって、賭けてたなんて……知らなかったから」

当然だ。知っていたら賭けにならない。脅しに従うか否かという別の賭けならば成立していただろうが。

「あんたのおかげで損したんだから、責任とつてよね」

「責任つて……」

「あたしが損した分、あんたが出しなさいよ。あんたが悪いんだから当然でしょ。本当はそれに迷惑料を上乗せしてやりたいくらいなんだから」

笠原は風子のむなぐらを掴んだ。

「そんな……無茶苦茶だよ」

「なにがよ。無茶苦茶なのはあんたのバカ面でしょ」

「……十分以内に買って来てって頼まれたから、買って来ただけなの……」

「なにを恩着せがましいこといってんの。嫌なら断ればよかったじゃないの。引き受けたんなら、周囲に与えた損害の責任はちゃんと取りなさいよ」

支離滅裂だ。勝手に賭けの対象にしておいて。

本当にそんな不当な理論を正当な主張と信じて怒っているのか、それともただ風子をからかって楽しんでいるのだろうか。

風子はスカートのポケットから財布を取り出した。

これでこの場を逃れられるのなら安いものだ。一瞬、そんな投げやりな気分になってしまったようで、気付くと千円札を二枚、取り出していた。我に返り、差し出すべきか断固拒絶するべきか躊躇しているうちに、笠原にひたくられてしまった。笠原は、一枚を梅村に渡した。梅村は風子に少しだけ気の毒そうな顔を見せたが、結局それを受け取った。

「これで勘弁してあげるよ」

二人は教室を出ていった。

静まり返った教室に、風子の呼気だけが聞こえている。

だんだんと胸の鼓動が速くなってくる。目が回ってくる。激しい後悔の念に襲われていた。視界が真っ暗になった。

「最低だ……」

呟いた。

自分は問題から逃げ出してしまったのだ。

強引にひったくられてしまったからなんて、言い訳だ。きっと自分は、無意識のうちに、笠原に選択権をゆだねていたのだ。自分は被害者で、全てを相手のせいにするために。

両手で握りこぶしを作り、黒板を叩いた。

第五章 秋高鉄二の一日

1

朝から蝉がうるせえな。

どうせお前らにや学校も仕事もないんだろ。ちつたあ寝坊でもしたらどうだ。

でもまあ、一週間の生命じゃあそうもいつていられないのか。それにしても眠い。

まだ、この前の試合で負傷したスネがじんじん痛んでいるというのに、そんなことつゆも忘れてすぐ夢の世界に入ってしまういそうなほどだ。実際、半分夢の中でアブラゼミの声を聞いている。

「起きる時間よ！」

女性の声が四畳半の向こうから聞こえてくる。

「うむ。一週間の蝉は寝坊とはいえ出来るんだから問題なし」

寝返りを打つ。

「わけわかんないこといつてないで、とつと起きる！」

秋高鉄二は飛び上がるように上体を起こした。

近くの木にアブラゼミが何匹かとまっているようで、じいじいと不協和音を奏でている。

枕元には妻の琴美がいた。痩せ形だが、お腹だけぽっこりと飛び出している。現在九ヶ月と少々、もうじき出産予定である。

「……おはよう」

「おはよう」

二人は軽いキスをかわした。

「ご飯、出来ているから」

鉄二が布団から出ると、琴美は大きなお腹で布団をかたしはじめる。

「いつも思っけど、よく目覚ましもかけずに起きられるなあ」

「かけてるよ。テツ君がまったく気付かないだけじゃない」

そういえば、蝉の声だけでなく、目覚ましが鳴る夢も見たような気がする。夢の中の鉄二はその音に我慢出来なくて、何故かヘディングでサッカーボールをぶつけて目覚まし時計を碎き壊すと、再び眠ってしまったのだった。

かたされた布団の敷いてあった場所に、鉄二は座卓を用意する。琴美が次々と小皿を運んで来ては、座卓の上に置いていく。

ここは蓮見製菓の社員寮。あちこちガタの来ている、築二十年ほどの木造二階建てだ。間取りはすべて共通で、2Kしかない。もともと独身寮だったのしかたがない。

鉄二が顔を洗ってすっきりしたところで、食事開始である。

「では、キックオフ」

「キックオフじゃない！」

「……いただきます」

「はい、いただきます」

二人は両手を合わせた。

琴美には、どうにも自分の夫がサッカー選手なのだという実感がない。工場内の事務所で働いている印象のほうが圧倒的に強いからだ。職場が同じだったし、彼女はろくにサッカー部の試合を観たことがないので当然といえば当然のことであつた。

しかし事實は事実。自分はサッカー選手の妻なのだ。朝食、お弁当、夕食、と毎日曜日に試合のあることを計算した、週の献立を考えている。試合が近場なのか遠征なのかによっても、微妙にメニューを変化させている。

琴美の先輩に茂原ななえというのがいる。蓮見製菓サッカー部時代の、ある選手の妻であり、琴美は彼女から色々と夫を管理するための心得というものを教えて貰ったのだ。遠征かどうかでメニューを変えるというのは、茂原先輩の提案だ。蓮見製菓サッカー部の頃は、東北地方内の移動でよかったが、JFLは移動範囲が全国規模だ。「疲れない食事」か「爆発力を出す食事」かで、試合内容も変わって来るのではないか。また、夫を危険から守れるのではないか。

サッカーはちょっとした油断が大怪我に繋がってしまうから。琴美は、茂原先輩がそう強く主張するほど大袈裟な差は出ないと思っている。夫への愛情という自己満足のつもりでやっている。また、暗示的效果を狙って、積極的かつオーバーに食事の効能を語るようにしている。

テレビでは、朝の情報番組がやっている。

美人だが少し滑舌の悪いお姉さんキャスターの天気予報が終わると、鉄二は外に出る。十分ほどの簡単なジョギングを行う。汗だくで部屋に戻って来る。軽く汗を拭くと、今度は十分ほどかけてストレッチを行う。少し残しておいたご飯を食べ、シャワーを浴び、髭を剃り、歯を磨き、髪を整え、スーツに着替える。

内勤だがそれなりに接客も多く、スーツはかかせない。

汗だらだらでお客と向き合うことのほうがよっぽど失礼なんじゃないかと鉄二は常々思っているのだが、ルールだしどうしようもない。クールビズがやたらテレビで取り上げられていた頃は、なんだからねえ、と馬鹿にしていたが、今ではそういった有り難い風潮は早く日本の企業全体に普及して欲しいものだと思っている。

今日も照りつけるような強烈な日差しだ。

蝉がうるさい。

シャワーを浴びたばかりだというのに、外へ出た瞬間にまたどつと全身から汗が吹き出した。

2

秋高鉄二は札幌生まれの札幌育ちだ。

小学生の頃、いつも体重は平均以下のくせに身長はクラスで一番高かった。ひよろひよろとした、例えるならまさにもやしのような感じで、栄養を取りすぎて上にばかり伸びてしまったのか、取らなすぎて横幅が増えないのか、健康なのか不健康なのかがさっぱり分からない少年だった。いずれにせよ、バランスの悪い外見であることに違いはなかった。

両親は心配してスポーツをすることをよく勧めてきたが、面倒、と鉄二はいつも断るのだった。外で遊ぶのは嫌いじゃない。むしろ、本を読むよりはよほど好きだ。よく公園でみんなと遊んだり、山に虫取りに行ったりしていた。決まったスポーツをしなかったのは単に毎日毎週の何時何分、と時間規則に縛られるのが嫌だったただけだ。サッカーとの出会いは中学一年の時。公園にボールの扱いがもの凄く上手な小学生がいたのだ。リフティングをされていて、まずボールが地面に落ちない。そんな光景をよく見るうちに、ちよつと興味を持って中学校の体育倉庫にあるサッカーボールでリフティングとやらを試してみた。二秒ともたず、落としてしまった。なかなか難しい。見るのとやるのでは、こうも違うものなのか。何度チャレンジしてみても、もって三秒。二秒と三秒の違いは、単なる運でしかない。だんだんいらいらしてきて、しまいにはボールを他の用具に叩き付けて帰ってしまった。

「こんなん出来なくなつて、サッカーつうのは要はゴールにボールぶちこみやええんだろ！」

翌日、まだどの部にも所属していなかった鉄二はサッカー部に入部した。

入部したはいいが、下級生はろくにボールを使った練習などさせて貰えない。先輩にしごかれて、筋力トレーニングをさせられるだけだ。勝手にボールを蹴っ飛ばして、かわりに先輩に頭を蹴っ飛ばされたこともある。

いい加減頭に来て退部しようかとも思ったが、顧問教師も担任もどうしても退部を許可してくれなかった。後で知ったのだが、どうやら両親が出しゃばって頼んでいたらしい。鉄二には健康になって欲しいし、飽きっぽくて短気なところを直してもらいたい、どうかいきなり退部届けを持ってきても破り捨ててくれ、と。そう、鉄二は普段はのんびり屋のひょうきん者のくせに、一瞬にして激昂してしまう癖のある厄介な性格だった。

退部させてもらえないし、サボっても後でよけい酷い罰を受ける

だけなので、仕方がなく続けていた部活だったが、それがだんだんと苦痛でなくなってきた。体力がついてきたこともあるが、部活での手の抜き方を覚えて来たのだ。

夏になると、三年生が受験勉強に入るために引退した。嫌な上級生が一拳に半分もいなくなつたわけで、さらに気分が楽になった。

自宅では時折思い出したようにリフティングに挑戦してみるが一向に上達の兆しがなかった。

夏休みも終わり、二学期になるとボールを使った練習をさせてもらえるようになった。試合形式の練習もさせてもらえるようになった。

だいたいDFをやらされた。GKの時もあった。鉄二は自分が得点したいものだから、バランスもへつたくれもなくどんどん前に行つてしまう。GKの時も、みんなの怒鳴り声に気付いてみれば、ドリブルで駆け上がつてしまつていたこともある。そんなこんなで先輩の反感を買つたのか、FWをやらせてもらえることは決してなかった。しかし、セットプレーだけでなく、流れの中でも守備陣が上がるべきタイミングというものがあつた、不本意ながら守備をやらされ続けたおかげで、そういった感覚を養うことが出来た。なにしろ、そのタイミングを見て駆け上がれば誰からも怒られないのだから。とはいえ、流れからの駆け上がりでゴールを決めたことなど一度もなく中学時代は終わつてしまつたのであるが。

鉄二が十何通目かの退部届けを書くまいか迷つていたある日のこと、また練習でGKをやらされていたのだが、やけくそ気味に乱暴に蹴つたボールがそのまま遠く向こうのゴールへと吸い込まれてしまった。部内での練習とはいえ、これが鉄二の初ゴールである。このゴールがなかったら、この後の人生は全く異なるものになつていただろう。ともかく、その件もあつて、部活を継続する気になるのだつた。

ある日、先輩たちに頭の形が変わるくらいばこにぶん殴られたことがある。

先輩の一人が、物陰からサッカーボールを頭にぶつけられたのだ。鉄二が犯人だろうということで、制裁を受けたのだ。

鉄二が疑われた理由というのが二点ある。「ボールをぶつけられた先輩は、普段鉄二ばかり厳しくしごいていたこと」、「こういうことをするのは秋高くらいしかない」という、法治国家としてはなんとも乱暴なものだった。しかし誰ぞ知らず、本当に犯人は鉄二だったので、本人は殴られて文句もいえなかった。

二年生になった。

リフティングの技術は相変わらずだ。去年よりも、一秒二秒延びた程度だ。

さて、後輩が出来たわけだが、誰もが意外に思うほど鉄二は後輩に優しく接した。別に人気取りをしたいわけではなかったのだが、優しい先輩と思われて悪い気はしない。お調子者魂が頭をもたげ、いつしか主将になりたいと考えるようになっていた。自分が主将になって、「一年はボール触っちゃ駄目」だのなんだのといったくだらない風習を廃止してやる。もっと良いサッカー部にしていこう。そんな理想に燃えていた。

また、夏がやってきた。三年生が引退する。

ついに完全に先輩がいなくなる。いよいよ自分の天下だ。おれは主将だ。キャプテン TETSU！ と勝手に考えていたら、新主将にはなんと権守孝が任命された。

「権守は主将なんて嫌がつていたし、自分、なりたいていってたじゃないすか」

鉄二は人事を決めた元主将に抗議した。

「それぞれおさまるべきとがあんだよ。あいつは向いてる。お前は目立ちたいだけで、しかもサッカーの技術も全然駄目だろうが。任侠みたいな人気があつても、チームを統括すんのは別なんだよ」

サッカーの技術全然駄目、

サッカーの技術全然駄目、

サッカーの技術全然駄目……

その一言がなかったら、まったく違う人生を歩んでいたかも知れない。素人よりはマシという程度のくせに、自分に自惚れて、いつかサッカーへの興味もなくし、高校生になったら違う部活を選んでいたかも知れない。

権守は非常に真面目で良い奴だけど、鉄二は彼のことが嫌いだった。鉄二は先輩に浴びせられた痛烈な一言がきっかけでがむしゃらに頑張つて練習をしたので、一応レギュラーという地位は確保していたが、やはりFWをやらせてもらえることはなかった。でもこの頃には、点を取ることでだけがサッカーの面白さではないことが分かってきていたので、特には気にならなかった。

中盤だろうと、最終ラインだろうと、魅せるプレーは出来る。サッカーの楽しさを味わうことは出来る。そう考えるようになったのは、自分に実力がついてきたからではない。岡田忠成という同学年のDFがあり、彼の放つ輝きに魅了されたのだ。

体の張り方、入れ方、ポジションニング、とにかくマンマークに強く、FWの個人技による突破などまず許さない。まさに鉄壁と呼んで過言でない存在だった。守備だけではない、全体の状況判断が的確で、チャンスとみるや流れからでもどんどん攻め上がったいく。

「秋高、カバ―頼む！」と、駆け上がられ、それどころかゴールまで決められてしまうと、鉄二はなんだか踏み台にされたような悔しさと同時に、守備陣の醍醐味というものをしみじみと感じるのだった。鉄二は常々、「おれとあいつからサッカーを取ったら、おれはただのイイトコだが、あいつにやなにも残らん。顔を取ったら、あいつにやサッカーが残るがおれにはなにも残らん」などと吹聴していたものである。

まだ、サッカーとずっと付き合っていく人生になるなど思ってもいなかったし、近いからというだけの理由で、深く考えずに自宅と同区の公立高校に進学した。ちなみに神童岡田忠成は、埼玉県にある私立のサッカー名門高に行ったらしい。一年ほどたった頃、岡田は交通事故に遭いサッカーの出来ない体になり、また札幌に戻って

きたという噂が流れてきたが、その後誰も彼の姿を見た者はいない。大怪我というのはデマかも知れないが、少なくとも「リーガー」にはならなかったようだ。

鉄二は高校でもサッカー部に入った。ある程度の実力は身につけていたし、部員の数も多くなかったし、一年は半年間ボールに触ったり駄目などという馬鹿げた風習もなかったので、控えの身分ではあったがすぐに試合の登録メンバーに入れてもらうことができた。

高校生になっても細身の体格は相変わらずだったが、全身にしっかりとした筋肉がついてきており、見た目以上に体重は増えていた。中学の頃は周囲にサッカー上手が多く、あまり目立つことは出来なかったが、ここはそれほどレベルが高くないようだ。頑張った分だけ、どんどん他人を追い抜くことが出来そうだ。手応えを掴んだ鉄二は、一年生のうちにスタメンになってやると闘志を燃やした。

この頃から、あけてもくれてもサッカー三昧の生活になっていった。残念ながら一年生のうちにスタメンになることはかなわなかったが、しかし努力の甲斐もあり実力はかなり向上した。二年生になってからは、かかすことの出来ない存在になっていた。この頃のポジションは、主に右ウィングバックであった。

比較的顔立ちが良いので、女の子から告白されること度々であったが、時間の無駄だとばかりに冷たく断り続けた。手編みのマフラーや手袋を渡そうとしてくる娘もいたが、鉄二は断固として受け取りを拒否した。しかし食いしん坊なのでチョコやクッキーなど、食べ物はいつも大歓迎だった。

サッカー三昧の生活を送っているとはいっても、名門校ではないのでスタメンである自分の実力というものがいまひとつ分らない。練習試合も県大会もほとんど勝ったことがないのだが、自分が弱いのか、チーム全員が弱いのか、それとも相手が強いのか、どうにも分からなかった。

自分を試したい。努力してきた結果を確認したい。そんな理由で、道内ではサッカーの名門とされる大学に進学した。

大学でも自分の実力はそれなりに通用した。スタメンから外れることはあっても、ベンチからも外されることはなかった。名門校でも、自分の実力は通用する。鉄二は勉強そっちのけで、ますますサッカーに没頭した。

そして数年の歳月が流れる。卒業を控え、卒論や就職活動に忙しいなか、友人からＪリーグの入団テストのことを聞いた。興味を覚え、受けてみることにした。

結果は散々であった。技術はあるがセンスがない、もう十代ではないから伸びしろがない。と面と向かって現在と未来とに対して駄目だしをくらった。「永遠にＪ２にいろや、カスチームが！」と叫んで試験場を飛び出すものの、その道のプロの判断なのだ、悔しいがその通りなのだろう。

とりあえず、人間生きていくには食わねばならない。食っていくためには金が必要。金を得るためには働かねばならない。と、就職活動を継続したものの、まだまだ不況の真っ只中でなかなか内定が決まらない。一生を左右するかも知れない問題だ、希望する会社のレベルを落とすかどうか悩みどころであった。

そんなある日、サッカー部の飲み会に久しぶりに参加した。気分がくさくさしていたので、単なる気晴らし憂さ晴らしだ。ＯＢが何名か来ており、その中の一人である、東北の製菓会社で働いている先輩に就職活動のままならないことを打ち明けているうちに、「なら、うちで働かないか」と声をかけられた。かれこれ三年ほど前の話である。

3

「おはよう」

鉄二はいつも朝の八時二十分に職場につく。仕事は九時からなのでちょっと早い。特に昨日の仕事を整理するわけでもなく、ただいたずらに時間を潰すだけだ。

「おはよう」

元氣な若い女性の声。普段は同期入社の桜庭周夫が一人いるだけなのだが、今朝は彼はまだ来ておらず、かわりというわけではない。だが吉野江美の姿があった。鉄二より一歳年下。鉄二の妻である琴美とは、同期の仲だ。

「吉野、今日は早いな」

「なんかめっちゃ早く起きちゃってさあ。ゆっくりと会社歩いてこようと思ったんだけど、あたしってゆっくり歩くこと出来ないのよね。予想してた通り、えらく早く着いちゃった」

「おれも、ゆっくりよく噛んで、つてのができねえなあ。琴美に、もつとちゃんと噛めっていつもいわれるんだけど、噛んでるとすぐに口の中から食べ物が消えちゃう」

「あ、それなんか分かるなあ。分かるけどスポーツ選手なんだからそういうのちゃんとしないと駄目でしょ！ 琴美だつてそりゃ心配するよ」

「はい。気をつけまーす」

「で、琴美はどうなの？」

吉野はお腹をなでた。

「順調。もう、こんなだよ」

鉄二は、吉野のお腹の前で大きく手を動かした。

「自分のお腹でやりなさいよ、そういう仕草は。九ヶ月だっけ？」

「そう」

「じゃ、あとちよつとじゃない。テツ君も、いよいよパパかあ」

「そうだな。でも実感は全然わかないけどね」

「女はね、自分のお腹の中で命が生まれて育っていくんだもん、そりゃ出産前から実感ってもんがあるんだろうけど、男は育てていくうちに、だんだんと実感がわいてくるもんなんだよ。多分、生まれただばかりの時なんか、猿みてえこれがおれの子供かよって思うよきつと」

「ひょっとして経験者かお前？」

「そういうもんなの！」

続いて、子供に付ける名前の話題で盛り上がっているうちに、いつもより少し遅れて桜庭周夫が出社してきた。

八時五十分には全員揃った。

七名だけの小さな部署だ。

主に庶務課のような仕事をしている。他、広報活動や応援の手配、人数が足りない時には自ら応援に行くこともある。イベントの企画を任されることもある。

それなりに忙しく、その日に終わる仕事ばかりではない。鉄二はサッカーの試合があるため、どうしても自分の担当になった仕事を手放さなければいけない時がある。中途半端な状態の仕事を引き継いでくれる同僚には、本当に感謝している。

4

今日は三時に仕事が終わった。木曜や金曜など、試合が近付いてくると、早く終わらせてくれることが多いのだが、今日は火曜日、珍しい。

蓮見製菓野々部工場第二グラウンド

一番乗り。

ボールを二つ、両脇に抱えて持ってきた。

ドリブル練習。

相手をイメージし、それに合わせて自分の動きも変える。

大きな相手。小さな相手。スピードのある選手。

もたもたして取り囲まれる前に、強引に抜く。

独走だ。

GKが飛び出し、体を横に倒しながらボールを奪おうとする。その一瞬前に、つま先でボールをちゃんと浮かす。

見事なループ。

ボールはGKの体の上を越え、ゴールの中に転がり入った。

ハズミSC先制点！

優勝です！

ってそんなわけないか。

一人きりでいるのも、思ったより退屈だ。

久々にリフティングに挑戦してみる。

十秒ともたず、ボールが落っこちてしまう。中学生の頃にくらべれば単純に何倍かに伸びているが、たった数秒の違いしかなく、全く成長していないも同然だ。試合の際のボールさばきはそれほど下手ではないと思うのだが、リフティングだけが何故こうも上達しないのだろう。

そのうちに、一人、二人と集まって来て、五時から全体練習が始まった。

5

「はなやん」の店内がえらく賑わっている。テーブルも座敷も一杯だ。はなやんは野々部駅のそばにある焼肉屋である。

満員なのは人気店だからというわけではなく、もともと狭い店に、今日は団体客が入ったというだけの話だ。

ビールの匂いが肉を焼く煙に燻されている。

「コウさん、ビール注ぎます」

轟祐司は、先輩の空になったジョッキを目がけ、ビール瓶を伸ばして来た。有村耕平はジョッキを傾けて、その行為を受け入れた。

「ほんとは女の子の酌がいいんだけどねえ」

有村耕平はしみじみと呟いた。

「コウさん、それ酷いっす。いろんな意味で」

「え、なにがさ」

「おれのごつい手じゃ嫌だったの分かりますけど、ほら、おれ幹事じゃないですか。本当は女の子が何人か来るはずだったんスよ。間際にキャンセルされましたけど。おれの手腕のいたらなさに、おれ自身が落ち込んでんですから、追い打ちかけるようなことをいわないでくださいよ」

「なんだあ、女の子が何人か来る予定だった？ あほ、そりゃいた

らなすぎだよ。お前サッカー馬鹿で、女の子とろくに話も出来ないから、きつと陰で気持ち悪がられてんだよ。一応社交辞令で行くといったものの、お前みたいなのがたくさんいるんじゃないやあ断っちゃおうかってドタキャンされたんだよ。幹事に向かねえやつだな。幹事つてのは、女性を何人集められるか、集めた女性でいかに男の気を良く出来るか、とどのつまりはそれだろうが。お前いつも女の子と話す時、なんだかワンテンポずれてるけど、きつと頭の中で相手のいつてることサッカー用語に置き換えてんだろ。まあ、安心しろ、今度彼女らに、祐司はサッカーだけじゃない、結構スケベだっていつといてやるから」

「いいつすよ、なにを人の悪口をさも恩着せがましく……。つーかさあ、追い打ちかけるなっついてんのに、畳み掛けるように捲し立てやがって。コウさん、あんた人でなしだ！」

「おーっ！」

と有村が首を轟と反対の方に向け、激しく拍手をしている。全く轟の悲痛な叫びなど聞いちゃいない。ついさきほど座敷席でゲームをやっている、業平橋とヨントスが罰ゲームでショートコントをさせられることになっていたのだ。やっとネタ作りが終わり、披露することになったのだ。

だがそれは、誰をも不快な気持ちにさせる最低最悪レベルのコントだった。素人でも、もう少しみんなを笑わすことが出来るだろうに。

コントを終え、業平橋とヨントスは席に着いた。ヨントスは受けたかどうか分からないというよりも、そもそも笑わすことが目的ということを理解していなかったようだ。あまりの堂々とした態度から、そうとしか思えない。

「いや、日本の夏は本当に蒸し暑いね。最初さ、みんなムシアツイムシアツイいつているから、え、どこに熱い虫がいるのって探しちゃったよ。探したら、道路にでんでん虫がいたからさ、わたし最初でんでん虫のことムシアツイだと思ってたよ。最初もなにも、真実

知ったのつい昨日の話」

楽しげに喋っているヨントスの顔を、水田恭助は啞然とした表情で見ている。

「……おい、ヨントス一人で喋らしてるほうが、よっぽど面白いぞ。キュージ、お前がセンスないんだよ。もっと相方がブラジル人なの活かせよ！ 面白いネタがないならさ、ケツに犬の顔でも描いておいて、突如ズボンとパンツ降ろして、うーワン！ てやってりゃいいんだよ」

「それただの変態芸っすよ！」

業平橋球児が抗議の声をあげる。

「ネタがないならないで、勢いで笑わすのが芸人だろうが！」

「おれ、芸人じゃないっす！」

「おれが新入りの時なんか、もつと凄いことやらされましたよね、瀬賀さん」

水田は身を乗り出して、サッカー部OBの瀬賀太郎に声をかけた。
「ええ、そうでしたっけ」

瀬賀太郎はとぼけてみせる。

「映画ワイルドウルフ水田恭助物語が作成されたら、絶対にはしよられるシーンですね。映倫に引かかること間違いし。……ねえ、瀬賀さん」

「近い席だからって、いちいちボクに振らないでくださいよ」

瀬賀太郎は、非常に物腰が柔らかく、誰に対しても敬語で接する。しかし、言葉遣いと性格は一致しないことを水田恭助は嫌というほど思い知らされている。

「近い席だから振ってんじゃないですよ。瀬賀さんがやらせたんじゃないですか。一発芸を拒否したら、そうですかスタメンに興味ないんですか、とかいって」

「記憶にないなあ……」

瀬賀はにこにこ笑みを絶やさない。

同じOBでも、瀬賀の隣に座っている木場直樹は外見にも内面

的にもまるで正反対だ。瀬賀が現役引退して筋肉が落ちて痩せてしまったのに対し、木場は現役引退して別人かと思えるほど大幅にボリュームアップした。瀬賀は物腰の柔らかさと裏腹にちよつと意地が悪いところがあり、木場は顔のいかつさと裏腹に気配りが行き届き、人に親切である。しかしどちらのOBも、後輩から好かれていくことに違いはない。

木場は、秋高鉄二とサッカーの話に夢中だ。

「だからよ、ここでお前がこう……プレスかけるわけよ。仮に失敗しても……ほら、業平橋がこう動いておきゃ、ヨントスにもそんな負担かからない」

熊のような大男、木場はテーブルの上に置いたおちよこを選手に見立てて講釈をしてみせる。

「いや、それは理想論ですよ。相手がそう動くとは限らない。……おれなら、こう」

秋高鉄二もおちよこを動かしてみる。

「そりゃ、いまと変わらんだろ。行き詰まってんだよ」

「いや、もっと連携を深めたほうがいいですよ。変にいいじゃない」

「余裕ないだろ。本当に入れ替え戦に行くぞ。……まあ、おれたちがあれこれいっても仕方ねえか」

「監督次第ですからね。……J1から来た友井……あいつの能力次第によっちゃ、それに合わせて全体のシステムを変更するみたいなこといつてるし」

「今までの熟練度はどうすんだよ」

「木場さん矛盾してますよ。一か八かみたいなこといって今度は熟練度ですか」

「なんでもいいんだよ、おれはよ。入れ替え戦行きさえ回避出来れば」

「みんなそう思ってますよ」

「そつえばよ、お前、駅前で高校生の女の子のバッグ取り戻してやったことあるだろ」

「ああ、もう何ヶ月も前だけど、なんで知ってんですか」

「その女の子がよう、お前のことが気になって、なんとなく試合観るようになって、すっかりサポーターになっちまったようだぜ。ユニフォームまで着てさ」

「へえ、嬉しいな。お礼につて喫茶店でコーヒーおごってもらったんですよ。そこで色々話したんですけど、凄く変わった、面白い娘でしたよ。髪なんか、こう、獅子舞みたいな感じで」

「いや、短めの髪で、とんでもなく可愛い顔してたぜ。確かフーコちゃんと呼ばれてたな、一緒にいた女の子に」

「とんでもないは大袈裟でしょう。しかし木場さんは女の子の名前は絶対忘れないですよ。奥さんにぶん殴られますよ」

「お前こそぶん殴られてんじゃねえのか。もうじき産まれるつのに、倉田、じゃなくて琴美さんに全然気遣い出来てなさそうだな。女の子だったら名前はじー子ちゃんとかくだらねえことだってイライラさせてんだろ」

「失礼な。ちゃんと気を遣って接しますよ」

「だいたい飲み会は水曜日に行われる。金曜だと、日曜の試合に差し支えがでるからだ。」

みんなおおいに飲んだようだが秋高鉄二は酒にはほとんど口を付けなかった。日課である就寝前のジョギングを、どんな日であれかしたくないのだ。

今日は練習を早めに切り上げて、六時から八時までの飲み会。しかし鉄二はお開きになる三十分前に、席を立った。みんな出来上がってくるので、強引に日本酒の一気にみをさせられてはかなわないそれに、八時閉店のケーキ屋にも寄りたかった。親睦を深めるためとはいえ、自分だけ焼き肉屋で旨い物を食べるのも気が引ける。

ケーキショップ、ノワゼット。小さいが、意外に品揃えの充実したケーキ屋だ。周囲にケーキ屋がないため市場独占状態だが、それにおごることなく、価格、品揃え、接客態度など、どれをとっても

問題がない。

栗のモンブランと、いちごのショートケーキを二つずつ買った。
ドライアイスと一緒に箱に詰めてもらっていると、店の奥のほうで
電話のベルがなった。

「フーコちゃん出て！」

若い、野太い感じの男の声。

「はい」

フーコちゃんと思われる女の子が電話を取ったようだ。ちよつと
たどたどしい感じだが、大きな声だ。やけに威勢がいいな。頑張っ
ている感じで気持ちいいね。あれ……フーコちゃんて聞き覚えがあ
るような……この声、どこかで聞いたような。……ま、いいや。気
のせいだろう。

鉄二は店を後にした。

6

少し時間が短かったとはいえ、今日もさんざん全体練習で汗をか
いたというのに、飲み会を終えて帰宅するとすぐジョギングに出か
ける。体をしっかり疲れさせて、深い睡眠を得たいのだ。鍛錬法で
あり、健康法であり、習慣付いておりこうしないと眠れない。

雰囲気ですでるタイプなので、酒はほんの少量しか飲んでいない。
ジョギングから戻ってきて、寮の前で軽くストレッチ、部屋に入
って今度は床に寝そべってのストレッチ。これを怠ると、単に披露
を蓄積させるだけになってしまう。

「シャワー浴びて来て。ご飯並べとくから」

琴美が壁にかけてあった座卓の脚を伸ばす。
食べて来たとはいえ、肉と枝豆だけだ。必要な栄養を摂取出来て
いない。だから、普段と同じ夕飯のメニューを少量づつとりたいの
だ。

鉄二がシャワーを浴びて四畳半に戻って来ると、座卓の上には小
皿がたくさん。煮豆、ほうれんそうのごまあえ、ひじき、冷や奴、

里芋の煮物。

簡素な食事を終えると、もうじきじいとはあになる札幌の両親に、近況報告の電話をした。両親は元気そうだった。

秋高夫婦は十一時頃に、布団に入る。

少し会話を交わすと、今度は思い思いに好きな雑誌を読み、十一時半頃に部屋は真っ暗になる。そしてまた、就寝前の軽い会話が始まる。

「……じゃ、しゅうと君はどうだ？」

「それも駄目」

「ごうる君」

「どんな漢字よ」

「はつと君」

「あのさ、サッカーから離れてよ。それになんで男の子と決めつけるの」

「じー子ちゃん」

「殴るよ」

二人は生まれてくる子の性別を確認していない。事前知っておいたほうが子育て用具の準備には便利だろう、しかしそれは親になる楽しみの一つを捨てたようなものだ。これから大変なことは分かっている、だから少しでも子育てを楽しめるように工夫していきたい。そう二人の見解は一致している。

暗闇の中、鉄二の寝息が聞こえてきた。

琴美も追いかけるように自らの夢の中へと入っていった。

第六章 自分への宣戦布告

「やっぱいいいわあ、友井は。いぶし銀といひかなんというか」

近藤悠子はしみじみと呟く。

八月十七日、日曜日。JFL後期第十七節。

友井芳樹。加入したばかりのDFだ。J1のチームで能力的、戦術的な問題で使われていなかった選手であったが、それを今回格安でレンタルしてきたのだ。JFLレベルでは、役立つに決まっている。サポーター達は友井のモチベーションの低下を危惧していたが、どうやら大丈夫そうだ。

ハズミSCは開幕から前節までずっと三 五 二の布陣だったが、今節は四 四 二だ。

CBをつとめるのは友井と、J2からたびたびオフアーのある岡崎だ。4バックの真ん中としてはJFL最強といっても過言でないだろう。

しかしサッカーは十一人对十一人で行う競技である、二人だけで守備出来るものではない。全体としてもよく耐えたほうだが、結局後半三十六分に相手のセットプレーから失点してしまい、現在〇ーでリードを許している状況だ。運悪く失点したものの、全体的な内容としては格段によくなっている。もう少し守備陣の連携がよくなれば、前線も活性化してくるに違いない。そうハズミSCサポーターに期待を抱かせるゲーム内容だ。

近藤悠子の隣には、佐久間風子が座っている。悠子の恥も外聞もないような叫び声に比べればまだまだだが、風子も他のサポーターと一緒に応援の声をあげたり、無意識のうちに色々と言葉を発するようになってきた。 「ゆ」「う」「じっ！」も、悠子から十分に及第点を貰っている。

サポーターの必死の応援も虚しく、タイムアップを告げる笛が鳴

った。

今日も負けてしまった。

秋高鉄二の、ポスト直撃のミドルシュート……ここ最近の試合で一番惜しいと思えたシュートシーンだった。残念といえば残念だが、ボランチである鉄二が流れの中であそこまで上がったのだ、あそこまで相手を崩し、フリーな状態からシュートを打つことが出来たのだ。一部のサポーターからは激しいブーイングが起きたが、ほとんどのサポーターは選手達に拍手を送った。

「今日も負けちゃいましたねえ」

風子は、若い男に声をかけられた。

試合前にサポーターの交流会が行われるのだが、最近風子は、悠子と一緒にだかといえ、その輪の中に入って行けるようになった。今日も、お店の余りものの焼き菓子をたくさん持って行って配ったところ、喜んで食べてもらえた。男は、その中にいた一人だ。

風子は応える。

「はい。……でも、どんどん良くなっているのが分かって……なんだかわくわくしますね」

風子は帰宅し、二階の自室で着替えを済ませると、重たい体に鞭打って、一階居間のiMACで本日の試合詳細を確認する。公式ページで試合の流れ、監督や選手のコメントを読んでいると、あらためて今後への期待感がわいてくる。

トップページのお知らせ欄に、秋高鉄二選手、第一子誕生と書かれていた。

結婚、していたんだ。

子供は女の子だった。

2

「あたしの財布がない!」

笠原が突然金切り声を張り上げた。

バッグの中身を全部机の上に出し、中を覗き込んでいる。続いて、机の中身を全部床にぶちまけた。

「どこにもない。誰か、あたしの財布知らない？ 体育の前には、絶対にあつたんだよ、バッグの中に！ 誰か盗んだんじゃない？」
「クマじゃねえの？ なんか笠原のバッグ漁ってたような気がすんだけど」

遠金恵理香が、小指を耳に突っ込んでかきながら、気怠そうな表情をしている。

当然全員の視線が風子に集中する。佐久間風子は反論せず、黙って自分の机に手をつっ込んだ。教科書やノートなど授業道具を取り出して机の上に積んでいく。単にないことを証明したかったただけなのだが……

風子の手には財布が握られていた。

「あたしの財布だ！」

笠原が叫んだ。

「やっぱりだ。ついにこいつ、人の財布に手を出しやがった。最低な奴！ 泥棒！」

遠金が表情を急変させ、楽し気な笑みを浮かべて、はしゃぐように叫び出した。

風子は席を立ち、笠原に歩み寄った。

「誰かが……入れたんだと思う」

笠原は奪い取るように、自分の財布をつかみ取った。とほとんど同時に、風子の胸を突き飛ばしていた。風子はよろけ、床に尻餅をついて倒れた。

「あんた、この前のこと、まだ根にもってたの？ ねちねちして、気持ち悪い。ほんつとに嫌らしい性格！ だからいじめられるのよ」
「根にもつなんて……そんなこと、思ってない。それに……財布だって、盗んでいない」

「盗んでないわけないでしょ。なんであんたの机の中にあるの？」

「誰かが……」

「誰よ。いつてみなさいよ」

「それは……」

「ほら、いえやしない」

当たり前だ。誰が貶めたい本人のいるところで、他人の財布を盗んで机に入れるものか。

「人のせいにしようとして、ほんと最低だね。恥ずかしいと思わないの？」

「知らない……本当に……」

全員、特に女子の冷たい視線が鋭い刃になって、風子の心臓を斬りつけてくる。

「犯人は佐久間じゃない！」

小橋雄太が立ち上がった。がりがりで色も白く、まさにもやしという表現の似合う男子生徒だ。

しんと静まり返った教室で、小橋は続ける。

「おれ、またお腹壊してよう、体育の授業に大幅に遅れちゃって。体育着を取るために教室に来たら……」

小橋は携帯電話を取り出した。

なにやらボタンを操作すると、ノイズ混じりの音声流れ出した。

「……んだよそんなこと。笠原がクマから金をぶんどったっていうじゃん。だから、クマの机に財布入れとけば絶対信じるって。笠原、単細胞だしさ」

「クマのやつ、隠して自分のもんにしちゃうかもね。財布見つけたーって」

「そんな度胸ねえよ、あんなやつ。おろおろした拳げ句、正直に差し出すよ。誰かが入れたんだと思うとかいって」

「信じるわけないよね。そしたら、笠原怒っちゃうよねえ」

「あいつ凶悪に底意地が悪いからさ、クマが犯人だと思っても思わなくても、いいきっかけとばかりに、クマのこといびりはじめる

だろうね。財布がそのままなくなっちゃったっていいや、そしたら笠原さまみろだ。あの女も、むかつくからな。あいつ、顔がいじめられっこみたいだから、自分がいじめられないようにいつも他の誰かを標的にしていたんだよ」

聞き間違えようはずもない。それは遠金たち三人の会話だった。
「ふざけんな小橋、馬鹿野郎」

遠金は小橋の携帯電話をたたき落とした。

「録音してんじゃねえよこのアホ！」

さらに遠金は小橋の顔を握り拳で殴ろうとする。風子が間に割って入った。顔をグーで殴りつけられた風子の顔が苦痛に歪む。たた、と後ろによろけた。

「わ……悪いのは……そっちだと思っ」

風子はきつと遠金に視線を見据えながらいった。

「うるせえな、おめえぶつとばすぞ」

遠金は声を荒らげた。

「ちよつと遠金さん、さっきの声、どういうこと？ あたしの財布がそのままなくなってもざまみろって、どういうこと？ 詳しく教えてもらいたいんだけど」

笠原香が頬をひきつらせていた。

まだ体が震えている。

怯えているのではない。

なんと表現すればよいのか分からない感情が頭の中を支配している。

なんだろう。

この感覚。

自分は、変わってきている。

それが、果たして成長と呼べるようなもののかは分からない。だけど自分は今、このまま進んで行きたいと思っている。

この先にあるものを見たいと考えている。

自分に戦いを挑みたい気持ちだ。昨日、一分前、一秒前の自分に。

3

風子はようやく入る部活を決めた。二学期になり、担任が毎日のようにうるさくいつてくるようになったからだ。

以前、二年生の鈴内達也がサッカー部に入るようすすめてきた。だが風子は、運動部に入るつもりは毛頭なかった。自分にとってサッカーとはハズミSCの観戦以外にない。

そもそもスポーツそのものに、あまり関心がない。だから、サッカー部のマネージャーになることにも興味はない。

風子を選んだのは、ブラスバンド部だった。

最近まで、部活に入るのなら幽霊部員でも通じるようなところがいいと思っていた。参加するつもりが全くなかったからだ。しかし今は違う。精一杯部活に挑戦してみるのも悪くないと考えている。アルバイトの時間が削られてしまうのは痛い、仕方がない。

放課後の廊下を歩いていると、遠金達三人と出会った。三人は憎々し気な表情を隠しもせず、風子にぶつけている。風子は黙って通り過ぎた。

足音が追ってくる。ちょっと怖くなって歩調を速めるが、背後の足音もテンポが速まる。

ついて来ている……

「お、彼女、部活決めたんだって？」

階段への曲がり角のところで、鈴内達也と出会った。

「ブラバンだった？」

「いったいどこから仕入れた情報だ。」

「はい」

風子は頷いた。

後ろが気になって仕方がない。

「もう九月だし……中学の頃からやっていた人が多いそうなので大変だと思えますけど、気にせず自分のやってみたいことをやってみようと思って」

「そっか。しっかり頑張るんだぞ一年生」

鈴内達也は風子の頭に、ぽんと手を置いた。

「はい」

鈴内達也は去って行った。

風子は後ろを振り返る。遠金達の姿はなかった。

4

「おい」

駅前通り、アルバイト先に向かうため自転車を押して歩いていると背後から呼び止められた。

振り返ってみるまでもなく、遠金達だった。

「今日は、さんざんコケにしてくれたねえ」

遠金はひきつった笑みを浮かべている。

「別に、そんなこと……」

「記憶力がねえのか、てめえは！ 思い切り馬鹿にしたろうが」

「……していない……」

「笠原と大喧嘩になっちまうし」

「そ、それは気の毒だけど、でも……」

「自分のせいじゃないみてえな顔してんじゃねえよ。こっちこい」

遠金は強引に風子の手を引っ張った。自転車が倒れる。風子はな

おも引っ張られ、慌ててなんとかバッグだけ拾い上げた。

風子はすぐ近くの小さな薬局の中に引っ張りこまれた。

「なんか一つかっぱえ。そしたら許してやるよ」

耳元で遠金が囁く。

「そんなこと……」

「それで水に流すっていつてんだよ！」

囁き声の語気が強まる。

「……出来ない」

風子は小さく、だがきつぱりといった。いきなり両の頬に平手打ちを受けた。

遠金はそばの棚から目薬の箱を二、三個掴み取り、風子のバッグを開いて入れてしまった。

「おじさん、こいつ、万引きしてます!」

狭い店内で、遠金は叫んだ。

一つ隣の島で陳列をしていた男性店員が飛んできた。

「ま、万引きって……君ら」

風子のバッグを見た。

「か、勝手に……押し込んだだけじゃない」

風子は目薬を取り出し、もとの位置に戻した。

「てめえ、適当なこといつてんじゃねえぞ」

遠金は大声を張り上げた。

風子は棚のすき間にきらりと光るものを指さした。

防犯カメラだった。

「これに映っているだろうから……」

「やべえ!」

遠金たちは脱兎のごとき素早さで逃げ出してしまった。

「きみ、今の娘達と知り合い?」

「いえ……知らない人です」

その後、学校で何事もなかったことから、どうやら通報はされなかったようだ。

5

「あ、ありがとうございます、ケーキシヨップ、ノワゼットです。

……はい、お、お世話になっ……なっております! ……はい。:

……はい。ささ、左様ですか。はい……では戻り次第折り返すよう伝えます。失礼しますっ」

受話器を置いた。

長い溜め息。溜め息は溜め息でも、安堵の溜め息だ。

風子は小さくガツポーズを作った。

ケーキ作り補助の仕事に戻る。

トレイにぎつちりケーキを詰めて店頭へ出る。角度に注意をしなから、陳列していくのだ。

数名の客が、レジ前に並んでいる。今日は林聖一人きりなので、すぐに行列が出来てしまう。

「お、お次、お待ちのかた、こちらのレジにどうぞ！」

風子は元気よく声を出した。

6

つま先に針で刺されたような激痛を感じた。

上履きの中に画鋲が入っていた。

以前は常に注意を払っていたのだが、最近はこうした攻撃もなく、すっかり油断をしていた。

教室に入ると、風子の机に彫刻刀かなにかで深く文字がほられていた。「死ね」と。

机の中に残しておいた教科書やノートは、全て、表紙にカッターで切り裂いたあとがあった。

筆箱の中を見ると、鉛筆は全て芯が折れている。シャープペンの芯がケースに入っているが、これも全て折れている。外に出してから折って、また戻したのだろう。

風子は引き裂かれた教科書を開いて授業を受けた。

まともな筆記用具がないのため、まったくノートをとることが出来なかった。

7

風子は体育用具室に来ていた。

「部活のことで話をしたいので、放課後、体育用具室で待っている」という担任の伝言メモが机に置いてあったのだ。不自然に思いなが

らも、結局来てしまった。職員室に確かめにくより、体育用具室のほうに近い。もしいなければ、そのまま職員室に行けばいいのだから。そう自分にいい聞かせていたが、おそらく距離が逆でも風子の行動は変わらなかっただろう。

用具室の扉を開けたが、案の定というべきか先生の姿などどこにもなかった。

扉を閉めようと手をかけたところで、背後から声をかけられた。

「誰を待っているのかなあ？」

上級生と思われる男子が三人。

一人、見たことがあるのがいる。そうだ、遠金とよく一緒にいた。確か竹田という名だ。

三人とも柄が悪そうだ。

風子は嫌な予感を覚えた。

「……先生に……呼ばれて」

風子はおずおずと答えた。

「へえ」

竹田は薄い笑みを浮かべている。いきなり風子の腕を掴み、用具室に引つ張り込んだ。残る二人も後に続く。

ドアが閉められた。竹の棒で門がされた。

「おれたちがさ、先生だよ」

竹田はまた、風子の腕を掴み、引き寄せた。

「教えてやるよ、いろんなことをよ！」

竹田は風子の顔に容赦のない拳の一撃を浴びせた。最初の一撃が強烈なほど、相手はあっさり抵抗を諦める。獲物は、体操マットの上に崩れた。竹田は気味の悪い笑みを浮かべた。

竹田は少女の上にのしかかった。

風子のスカートに手をかけて、上にまくりあげようとする。風子は抵抗するが、また容赦のない張り手をくらった。遠のきかける意識の中、男たちの声が聞こえる。

「竹田、独り占めすんなよ」

「わかってるよ。それよりおさえろ」

今度は横山が、風子の上に馬乗りになった。

竹田は風子のスカートの中に手を突っ込み、下着を直接引き下ろそうとしている。

風子は声が出ない。横山の肥満した体に乗られているというものがあるが、それだけではない。恐怖で萎縮しているのもあるがそれだけではない。心の中に、どこか他人事のような、冷めた、全てを諦めた自分がいた。

ああ。

またか……

結局、どう頑張ったて、なにも変わらないんだ。

もう、どうだっていいや。

……

竹田達の下品な笑い声。

自分に馬乗りになっている横山のよだれを垂らしそうないやらしい表情。いやらしい息遣い。

中学時代の記憶が頭の中を駆け巡る。

阿尾敦子の恨めしげな表情。

少年達の楽しげな笑い声。

もう蹴らないで、おとなしくしているから……

なんでも、いうとおりにしますから……

すすり泣き、懇願する自分。

またあの繰り返しだ……

いや……

違う。

違う！

もう、あの頃の自分じゃない。

唐突に、風子は叫んだ。まるで言葉になっていない大声を張り上げ、体をよじり、暴れた。

足を振り回した。竹田の顔面に直撃しようで、鈍い呻き声が聞こ

えた。

風子はなおも叫び続けた。暴れ続けた。

風子に馬乗りになつていた横山が、たまらずマットから転げ落ちた。体が自由になつた風子は、足下にあるものを手当たり次第に拾つては竹田達に投げつけた。横山がソフトボールの直撃を顔に受け、鼻血を噴いた。

「おい、やめろてめえ！」

怒鳴る竹田は、ハードルをぶつけられ足にひっかかつて転んだ。

風子はまたソフトボールを投げた。ガラス窓の割れる音。

「な、なんだよ、こいつ、大きな声出さないからって……おとなしくやらせてくれるからって聞いてたのに、話が違うじゃんかよう」

竹田達はなおも獣のように叫び続ける風子の正気の沙汰でない形相におそれをなし、たまらずに退散してしまった。

それでも風子は叫び続け、手当たり次第に周囲の物を蹴飛ばし続け、投げ続けた。

どのくらいそうしていたのか自分でも分からない。

気が付くと一人きりだった。

暮れかけた夕日が窓から差し込み、全てをオレンジ色に染めていく。

風子は力抜けたように、ロールケーキのように巻かれている体操マットの上に座り込んだ。

焦点の定まらない、うつろな視線。

風子は淡い光と静寂の中に包まれていた。

第七章 ゴキブリ食べたことありますか

1

先日遠金恵理香によって笠原香の財布が盗まれるという事件が起きた。それは風子の周囲の態度に多大な影響を与えた。

みなで風子のことを責め立てた後ろめたさや恥ずかしさのためか、風子へのあからさまないじめと呼べるようなものはほとんどなくなってしまうた。

遠金恵理香達にしてもそうであった。周囲の空気が空気なので手が出しにくいのか、目が合う度に睨みつけられはしたが、特になにをしてくることもなかった。だが、先日の体育用具室での一件がある。油断は出来ない。

「はい、オレンジジュース。……つぶつぶ入りの」

風子は大橋道矢に缶ジュースを渡した。

「お、おう……さんきゅ……」

大橋道矢は、ちよつとばつが悪そうに受け取った。

「他になにか」

「い、いや……ありがとな」

別に使い走りさせられているわけではない。購買部に行くついでだから、と自分から買って出ただけだ。

「おう、サッカーマニア！」

教室の壁の窓に鈴内達也の姿。仲良しの大木弘と一緒に廊下を歩いていた。まったくの見ず知らずの時に、校庭で一回サッカーをしただけなのに、彼はよく風子に話しかけてくる。風子は別にサッカーそのものに興味はないが、JFLチームのサポーターであることが、彼にとっては十分にマニアックな趣味に値することなのだろう。

「どうも……こんにちは」

風子は軽く会釈する。

「どう、部活は」

「……まだ全然ですけど、マイペースでやってます」

「上手になってき、おれ達の試合を応援に来てよ。ぎょい〜ん、でけでけでけって」

鈴内達也は、妙な声を発しながら、エレキギターだかベースだかを弾く仕草をとった。

「プラスバンドなので、そういう楽器はないんですが……」

「あら、そうなんだ。まあいいや。じゃ、またね〜」

鈴内達也は大きく手を振って去って行った。

「ねえ、佐久間さん、タツちゃん先輩と知り合いなの？」

江藤佳枝、小林大子、森川拓美に取り囲まれた。

「……一緒に、サッカーやったことがあるくらい」

「羨ましい！ 今度やるときは、絶対誘ってよ！ 別にサッカーじゃなくても、なんでもいいから！」

森川拓美は風子の両肩を掴んで激しく揺さぶった。

「は、はい……機会があれば……」

鈴内達也が面白い言動で有名人なのは知っていたが、そんなに女子にもてるとは知らなかった。

「絶対よ、約束よ、あたし友達だよ、友達裏切るんじゃないわよ」

「はあ……」

なんと答えたらいいものやら、風子は困ってしまった。

2

レス厳禁！ ハズミSCについてみんなが思い思いのことを語るスレ

【パート1】

726:えじー:200x/09/21 (日) 02:16:

08 ID:Ekx3Ia1wq

ほんと弱いよな〜。

727:ハズミ命:200x/09/21 (日) 02:24:

5 6 ID : K z e 4 3 2 q o x

明日こそ点を取るぞー。

7 2 8 : てつ : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 0 2 : 4 3 : 1

9 ID : o 1 b 7 S m I 5 z

どうも、テツです。バスケ部からお呼びがかかったんで移籍します。

7 2 9 : S A M : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 1 0 : 1 0 :

1 4 ID : b B y d x 7 x x o

この前、試合前の交流会で女の子がお菓子を持ってきてくれた。
このスレ見ているかどうか分からないけど、あらためてお礼ゆわ
せてください。

おいしかつてです。

ありがとうございます。

7 3 0 : 怒りのおじさん : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 1 6 :

3 9 : 0 2 ID : g I 2 p s 3 p c l

メガホンじゃなくて手を叩け。耳障りだ。特に真後ろでやられる
と。メガホンは声出すことのみに使え。あと、前に誰もいないから
って、席をがんがん蹴飛ばしてんじゃねえよ。繋がってるから、響
いてくるんだよ。大人なんだから、最低限のルールくらい守れよ馬
鹿野郎。ゴミもきちんと持ち帰れ。田舎物どもが。

7 3 1 : H & E : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 1 7 : 0 9 :

4 2 ID : c q m s 7 7 c o s

一番後ろの席のあたりでさ、この前の2失点目の直後、「うわ、
くせえっ」って思った人、ごめん。犯人才レ。

7 3 2 : F W 原理派 : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 1 9 : 5

8 : 5 1 ID : u q m v b c n 8

そろそろトドロキたん得点のヨカーン。

7 3 3 : 吹雪 : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 2 0 : 3 4 : 1

5 ID : i x e h y a y t v

この前、帰りに駐車場のところで財布落としたことに気付いてさあ。引き返して探してたら、手伝ってくれる人がいて、おかげでどぶの溝に落ちてたのを見つけれました。

名も言わずに立ち去った、11番のレプリカユニを着ていた、ぽつちやり体型の、色白の、チョコビビゲの謎の人。おれと同じくらいだから、身長170くらいの人。ほんとにほんとにありがとうございます。今度絶対見つけだして、なんかおこらせてもらいますからね。

7 3 4 : : 2 0 0 x / 0 9 / 2 1 (日) 2 1 : 0 4 : 0

4 ID : b c o k r o h 9 3

別にサッカーでなくてもよかった。何でもよかった。

いじめられ続けるのが嫌で、逃れたかった。

好かれなくてもいいけど、構われない存在、意識されない存在になりましたかった。

自分を変えるしかないけど、どうすればいいのかも分からなかった。

自分が異端だから目立つ。趣味があれば、なにかが変わるかも知れないと思った。

そう思っていた時、ひょんなことがきっかけで、ハズミSCの試合を観に行くようになった。

応援することを通して、いろんなことを見つげられた。

前向きに成長していこうと頑張っていくことの大切さを教えてもらった。

以前からのサポーターには悪いけれど、このチームが弱くてどん

底の状態の時に出会えてよかった。

一緒に、少しづつ成長することが出来たから。

735：絶対残留：200x/09/21（日） 22：32：

48 ID：qr tb3h5pm

オレの予想した初得点シーン。6バックなんかにしてきて、超守備的に行くと思いきや、全員で攻撃してんの。超攻撃的で、相手は防戦一方、でもなかなか得点出来なくて、あとちょっとでスコアレスドローかって時に、テツからの折り返しを、駆け込んだヨントスがオーバーヘッドボレー。

3

梅村智子の足下に、ボールペンが転がってきた。

「拾ってくれよ、それ」

遠金恵理香の言葉に、梅村智子は一瞬の躊躇、複雑な表情を見せたが諦めたようにしゃがんでボールペンを拾う。おとしたところ、誰かに蹴飛ばされてボールペンはさらに転がった。

「ごめん、気付かなかった」

為井奈美絵がにこにこ笑っている。

梅村は這いつくばるようにして右手を大きく伸ばした。悲鳴をあげた。手を踏まれたのだ。

「ちよっと、なにふざけてんの、手なんか伸ばしてきて！」

橋本美紀は振り返り、怒鳴った。だがその口元には、うつすら笑みが浮かんでいる。ぎゅっと手の甲を捻られた梅村はまた悲鳴の声をあげる。

最近よく見る光景だ。

クラスの女子の半数近くが、まだ飽きもせずに誰かをいじめている。

実は梅村智子を新たな標的になるよう仕向けたのは、友人であるはずの笠原香だった。佐久間風子に攻撃の矛先が向かなくなったこ

とにより、いつ自分にそれが向いてくるのかと恐れ、先手を打って根回しをしたのだ。遠金とのいざこざがきっかけで、風子にカツアゲめいたことを行ったことがみんなに知られてしまったが、そのときの責任をすべて梅村にかぶせてしまったのだ。

佐久間風子の足元にボールペンが転がって来た。風子はボールペンを拾った。遠金恵理香の表情が、睨み付けるようなとげとげしいものに変化した。風子は構わず、遠金の席へと向かう。ボールペンを机の上に置いた。

「余計なことすんじゃないよ」

「もう、やめよう……そういうこと。人の気持ちを……もう少し考えて……」

「うるせえあ。なにを小学生みたいな幼稚な正義感振りかざしてんだよ、鬱陶しい。てめえ、またいじめられたいのかよ！」

「それで自分が恥ずかしくないのなら、そうすればいい」

あのいつもおどおどとしていた佐久間風子に、そうピシヤリといわれて、遠金恵理香は二の句を告げなくなってしまった。唇や頬をひきつらせている。

「梅村さん、大丈夫？ 手、踏まれてたけど」

風子は心配そうに梅村に手を伸ばしたが、しかしその手は強く払いのけられた。

「気安く触らないでよ！ 自分がいじめられなくなって、ほっとしているんですよ！ ちょっと前まで、うじうじしていたくせに、なにを偉そうに高いところから見下ろしてんの？ ほんと頭くる」

余計なことだったのだろうか。

他の人が酷い目にあっていても、ほっておけというのか。

それが当たり前なのだろうか。

今までは自分のことで精一杯だったが、こうして少しだけ余裕ができる、ほかの人のことが目に付いて、あれこれと気にしてしまう。だがやはり、それは余計なことなのだろうか。加害者だけでな

く、被害者にとっても。

「てめえ、これっぽっちかよ、この野郎」

廊下の角を曲がった水のみ場のあたりから、声が聞こえてきた。風子は足をとめた。

「だってもうそんなお金……」

気弱な感じの、男子の声。

「どっかで盗んでくりゃ、いくらでも金なんか作れるだろ。馬鹿がお前は」

「いいから金持って来いつつてんだよてめえ！」

頬を殴るような、鈍い音が聞こえた。

どうしよう……

他のクラスの生徒の恐喝現場に遭遇してしまった。

心臓の鼓動が速くなってくるのが分かる。

情けなくなってきた。

ある程度の言動を取れるようになってきたとはいえ、それは勝手を知る自分のクラスだったから。こういう場面に遭遇しても、おろおろするばかりで、なにも出来やしないではないか。

「おい、お前らなにしてるか！」

先生の怒鳴り声が聞こえたきた。

4

朝のホームルームも終了し、もう一時限目の授業が始まる直前。風子の姿は教室にはなかった。つい先ほどまで、自分の席についていたはずなのに。

教室の校内放送用のスピーカーから、ガリガリと音が出た。チャイムもなにもならずに、突然に彼女は喋り始めたのだった。

い、一年B組……佐久間風子です。

みなさんに聞いて貰いたいこと、考えて貰いたいことがあります。

生きる意味って考えたことありますか。

みなさん、どうして生きているのでしょうか。

生きるって、なんでしょう。

生きるということは、自分だけが楽しむことですか。

自分だけが楽をすること、要領良く生きて行くことですか。

自尊心を満足させることですか。

気にいらない人を攻撃することですか。

なにかの感情を人にぶつけるからには、当然相手がいます。吹き出す負の感情の、はけ口の対象にされてしまった人が、どんな気持ちで学校に来なければならぬか分かりますか。

いまよりほんのちよつとだけでいいんです、隣の人に優しくなってみませんか。

相手がどんな気持ちでいるのか、想像してみませんか。

そうすれ……

佐久間、お前なにやっているんだ！

自分のしていることが分かっているのか！

がちやがちやという音がし、そして無音になった。

「おいおい、クマスケのやつ、やってくれたよ！」

1年B組の教室はどつと沸いた。突然のアトラクションに、みんな楽しそうに笑っている。

「遠金、お前のこといつてたんだぜきつと」

「一番ブー子のこといじめてたもんな」

「ついに爆発しちゃったな、あいつ。退学する気じゃねえの？」

「いやだよ、こんなんやつてくれるんなら、毎日来てくれよ」

遠金恵理香は無言で立ち上がると、風子の机に近寄り、蹴り倒してしまった。倒れた風子の机から、中身が飛び出て床に散らばった。遠金はなおも無言のまま自分の席に戻った。

両手のひらで自分の机を力の限り叩いた。

一年B組の担任は、一時限目はD組での授業を行う予定であったが、急遽自習の時間に変更した。彼はいま、職員室で自分の席にいる。そのすぐ前には佐久間風子が立っている。

「全くお前は……」お茶をすすった。「一学期にはトイレでタバコを吸って停学になるし、問題ばかり起こす奴だな」

「すみません」

停学の件は風子は無実だが、この先生にいいわけをして分かってもらおうなどとは思わない。

「なにがすみませんか。謝って済む問題か。放送室ジャックなぞして、やっていいこと悪いことの区別もつかんのか。だいたいお前はだな……」

風子は延々と続く先生の説教を黙って聞いていた。自分の主張そのものは間違っていないと思うが、ああいう場で、あのように述べるものではない。風子は、今回の件は全面的に自分が悪いと思っている。しかし、自分でも理解できないが、そうせずにいられたかったのだ。ことを大袈裟にしてやりたかったのだ。

三十分ほどたち、説教がようやく一段落した。

「どうだ、反省したか」

「はい。……最初から、よくないことは分かってました。反省した上でのぞみました」

「馬鹿かお前は、それは反省したらんってことじゃないか」

「そもそも何故こういうことをいいたくなってしまったのかをよく考えてみて下さい。……生徒一人一人から、目をそらさないで下さい。いいやすい生徒にだけいつてあとは知らぬふりするののもどうかと思います。そういうことがしつかりと出来ないのなら、教師という職業が向いていないんだと思います」

「生意気いうなこの！」

先生は目をかっと思開き、立ち上がった。

頬を張る音が響いた。

「親のスネかじつとるガキの分際で教師の仕事を云々するな。なに
も分かっていないくせに」

すっかり興奮してしまっている。

「安喰先生、今時体罰はまずいですよ、すぐ問題になっちゃうんで
すから」

「親にいいつけるなら、いいつけりゃいいんですよ」

「誰にもいいませんから。……では、失礼します」

「おい、佐久間、待て！」

風子は担任の制止も聞かず、立ち去った。

職員室のドアを開けた。

そこに、遠金恵理香が立っていた。

「ちよつと面貸せ」

口元には軽い笑みが浮かんでいるが、目は充血し、怪物のような
異様な狂気を帯びていた。

6

「舐めたこと、いつてくれたねえ」

体育用具室に、佐久間風子と遠金恵理香の姿はあった。

遠金の言葉に、風子はただ沈黙している。

「あたしのこといったんだろ」

「誰にどうかじゃない」

風子は口を開いた。

「自分の気持ちとして、いわずにいられなかった」

「でも、あたしのことだろ」

「そうかもしれない」

「ふざけんなよ、てめえ」

遠金の目が吊り上がった。拳を振り上げ、殴りかかってきた。

直後、遠金の目は驚愕に見開かれた。突き出した手を、風子につ
かまれたのだ。もう片方の手を振り回すが、それも腕を掴まれてし

まった。

「離せ、この馬鹿」

佐久間風子は遠金の予想よりも遙かに腕力があつた。火事場の馬鹿力というものか、はたまた普段の肉体労働の成果か。しかし遠金には腕力がどうこうではなく、抵抗してくること自体が信じられなかった。いつも黙って殴られ、土下座して謝っていたクマが。クラスのゴキブリ女が。

手をなかなかふりほくことが出来ない。しかし荒っぽいことには慣れている遠金である、風子に前進し体当たりを浴びせた。風子はバランスを失い、よろけ、後ろの壁にぶつかった。遠金の手が自由になる。その瞬間を見逃さず、風子の髪の毛を掴んだ。こうすれば、顔面を壁にぶつけてやることも、顔面に膝蹴りを叩きこんでやることも出来る。と思つたのも束の間のこと、風子の手が伸びて遠金の髪をつかみ返した。と同時に、風子は残る片手で自分の髪の毛を掴む遠金の腕を激しくしめあげた。遠金は激痛に耐え切れず、風子の髪の毛を離してしまった。

今度は、自由になった風子が遠金をつきとばした。先ほどとは反対に、遠金が壁に背中を叩きつけられた。うめき声をあげる遠金。遠金のすぐ眼前に、風子の顔があつた。

「今まで、自分がなにをしてきたのか……考えてみて」

風子は遠金の顔を見つめている。風子の顔のあまりの表情のなさが不気味で、遠金は全身に鳥肌が立った。

「やられるほうが悪いんだよ！ お前が馬鹿で、どんくさかつたつてことだよ！」

吐き捨てるようにいうと、遠金は風子から目を反らした。風子はため息をついた。

めにはあおば やまほととぎす はつがつお

静まり返っていた用具室の中、もの凄い音が響きわたった。風子

が遠金の頬に渾身の力を込めた平手打ちを放ったのだ。

遠金はたまらず、もんどり打って床に倒れた。遠金は真っ赤になった頬をおさえた。いつも見下していた相手に、冷たい表情で見下ろされ、遠金は軽い錯乱状態に陥ってしまった。

「よしお、よしお！ この前の女がいるよ。早く来て！ 犯っちまってよ！」

よしお、竹田の下の名前だ。

しばしの沈黙の後、風子はおもむろに口を開いた。

「……遠金さんの仕業だということは分かっていたけど。……でも……どうして、あんな酷いことを……」

「さして不幸でもないくせに、自分を不幸だと思いこんで、じめじめして、戦おうともしない。そんなに自分を不幸と思いこんで酔いたいんだったら、本当に不幸してやりや満足だろう。……そう思ったんだよ」

遠金は風子と視線を合わせようとしない。

「そんな理由で……」

「あたしがなんでこんな嫌なやつになったかなんて、てめえにや分からないだろ！ お前、レイプなんかされたことないだろ！」

「あるよ」

風子は淡々といった。だが、過去の記憶に一瞬苦痛の表情を浮かべた。

遠金は啞然とした表情で風子の顔を見つめていた。

風子はゆっくりと語り出す。

中二の時、風子は同級生の男子数人に強姦され、処女を失った。きっかけは、親友であった阿尾敦子との、ちよつとしたいさかひだった。風子に恨みを抱いた阿尾敦子は、男子に風子を襲うようけしかけたのだ。

男子に写真を撮られた。ばらまかれなくてはならぬことを聞けと、ことあるごとに呼び出され、性欲処理の玩具にされた。

あまりに恥ずかしく、屈辱的なことであつたため、レイプされたことまではいえなかったが、しかし親や先生にいじめられていることを相談した。

先生はいじめの現場をなにも知らず、様子を見るといったきり、結局最後までなにもしてくれなかった。

親に、学校に行きたくないと言えたが、「戦わないから舐められるんだ」と無理矢理に連れていかれた。レイプされたことを黙っていてよかった、こんな親では、それも自分が悪いことにされてしまう。

風子は何度も自殺を考えたが、どうしても死ぬことが出来なかった。

そうこうしているうちに、もう何ヶ月も生理が来ていないことに気付いた。最初はストレスによる生理不順だと思っていたが、段々と不安になってきた。

男子生徒らに打ち明けた。

みな最初は笑って相手にしなかった。本気でいっていることが分かった、「おろす金なんかあるわけねえだろう!」と、彼らは風子を床に叩きつけ、血を吐くまでお腹を蹴飛ばし続けた。

その後も、風子は陵辱を受け続けた。

やはり生理が来ない。

お腹はまだまったく変化はない。しかし、変化してからでは遅い。恥ずかしかったが妊娠検査薬を買ってみた。

結果は陽性だった。五回検査し、五回陽性だった。

当然といえば当然だった。最初に生理が来ないことに気付いた段階で医者にかかるべきだったのだ。

結局、同じ県に住んでいる祖母に、親には内緒にもらって金を借り、中絶手術を受けた。

自殺すら出来ない自分の勇気のなさが腹立たしかった。宿りつつも生まれることのない哀れな魂をつくってしまった。風子は悔やんでも悔やみきれない気持ちだった。

ほんの数ヶ月で、風子はすっかり陰気な性格へと変わってしまった。クラスの男女全員からいじめられるようになるまで、さほど時間はかからなかった。

「でたらめいつてんじゃねえよ！」

遠金は叫んだ。

「……本当は、一生誰にも見せたくなかったんだけど」

風子は制服の裾をたくしあげ、お腹を出した。

遠金は思わず呻いた。吐き気を催し、口をおさえた。

へその周囲の皮膚がひきつれている。肉が裂けるほどに蹴られたのだろ。しかも赤黒く痣が残ってしまっている。

それだけではない。右腹から、左胸にかけて、肉が盛り上がって赤い線になっている。すっかり精神錯乱状態になって相手の男子を刺し殺すとナイフを持って襲いかかったことがある。ナイフをもぎ取られ、興奮した男子に返り討ちにあった。その時の痕だ。

「生きたゴキブリを飲み込まれたり、燃え尽きるまで背中に蚊取り線香を置かれたり……どんなに苦しいか、想像……出来る？」

風子は頭を抱えた。呼吸が乱れている。

もう殴らないで。

蹴らないで。

なんでも……いうとききますから。

「多かれ……少なかれ、人は……生きていれば理不尽な辛い目にあう。だからって、関係のない人間を攻撃していい理由になんかならない。……本当に地獄にいるかのような苦しみを味わったのなら、そんなに苦しい思いをしたんだっただけ！」

風子は遠金のお腹を蹴飛ばした。遠金は悲鳴をあげ、こみ上げる嘔吐感にまた口をおさえる。

「そんなのは、たいしたことじゃない、ただの肉体の痛み。……遠

金さんだつて、そんな……さっきいったような酷い目にあつたというのなら、体も、心も、とても痛かつたはず。……でも、本当に痛かつたら……本当の痛み、辛さを知っているなら、他の人を同じ目にあわせようなんて思うはずがない。……きっと、その時に本当の苦しみというものを感じなかったんだ」

遠金は風子の顔を見上げた。

遠金は無表情に淡々と語る風子に恐怖した。

「だから……今から本当の苦しみてものを、教えてあげるよ」

風子はドラム缶を思い切り蹴飛ばした。

がん、という音以外に、本来聞こえてくるはずのない音がした。聞いたことのない、奇妙で、不気味な音。

風子の足首が、本来曲がるはずのないほうに曲がっていた。

あまりの激痛に、風子は床にくずおれた。

遠金は腰をふらふらさせながら立ち上がった。

「ば、馬鹿じゃねえのかこいつ……自分で自分の足を折っちまいやがつた……」

遠金はふらつく足取りで体育用具室を去っていった。

風子は襲い来る凄まじい激痛をこらえてただもがくばかりだった。

7

「いよいよだなあ」

木場直樹がいった。

ピッチ上では選手たちがウォーミングアップをしている。

「そうですね」

木場直樹の隣には佐久間風子。脇に松葉杖をかかえている。風子の隣には近藤悠子がいる。

華鳴市立烏ノ山陸上競技場、観客席の最前列だ。

風子の足の骨は、ほぼ治癒しているものの、まだ松葉杖はかかせない。

結局、携帯電話で救急車を呼んだり、職員室にいる先生に声をかけに行っただのは遠金恵理香だった。

風子はあまりの激痛に涙目でお礼をいうのが精一杯だった。

所詮は肉体の痛みだと格好をつけた直後だというのに、最悪に自分がみつともなく、恥ずかしかった。脅かすためにドラム缶を蹴飛ばして、まさか自らの骨を折ってしまうなんて……

その一件から、すでに一月ほどが経過した。

遠金は以前ほどの荒々しさはなくなってきた。おとなしくなってきた。あまり喋らなくなってきた。そして、つい先日、他県の高校に転校していった。親の転勤が理由とのことだが、実際のところはどうか分からない。

遠金には全く恨みはない。別に同情も感じない。過去、同じような目にあい、自分はいこうなり、彼女はあんなったというだけのこと。立場が逆でもおかしくなかったのだ。奇妙な仲間意識すら感じている。といっても、もう会うことはないだろうが……

骨折してからも、風子はハズミSCのホームゲームには足を運び続けた。しかし願いも虚しく、ハズミSCは無得点記録を更新し続けた。

今日十月二十六日は、JFL後期第十三節、エアーズ和歌山との試合だ。

来期からJ2が一チーム、JFLが二チーム、とそれぞれ枠が増えることにより、今年のJFLでは入れ替え戦を戦わなければならないのは下位一チームだけでよい。そして、現在ハズミSCがその最下位である。下位二番目である鎌田製鉄FCFCとは、最近まで勝ち点差がほんの僅かだったのだが、しかし鎌田製鉄FCが前々節、前節と連勝してしまったため、少し離されてしまった。もしも今日、鎌田製鉄FCが引き分け以上、もしくはハズミSCが引き分け以下ならば、その時点でハズミSCの今期最下位が決定する。そうなれば、社会人チームとの入れ替え戦。それに敗れば社会人リーグへ

と降格する。最近の守備陣を考えれば、社会人チームには負けられないような気はする。だがサッカーはなにが起こるかわからないし、相手だってモチベーション高く挑んでくるだろう。最初から引き分け狙い、PK戦狙いで挑まれたら、そうそう相手守備を崩せるものではない。普通に考えても不安要素がたくさんあるというのに、しかもハズミSCは魔女の呪いでもかかっているのか今年一得点もあげていないのだ。

一得点でもあげられれば、呪縛から解放される。そうなれば、この守備陣だ、負けるわけがないと思えるのだが。

風子、近藤悠子、サポーター達、そんな同じ思いを胸に、今日もこのスタジアムへと集まっている。

ハズミSC、エアーズ和歌山の選手達がピッチ上に広く散らばった。

センターサークルの中央にボールが置かれる。

主審が手を上げる。笛がなった。

ハズミSCボールでキックオフ。

開始早々からハズミSCの動きがどうにもぎこちない。点を取らなければ入れ替え戦行き決定、ということが焦りを呼び、冷静さを失わせてしまっているのだろうか。

パスは簡単にカットされてしまうし、相手のプレッシャーをなんとか凌いでも、ただ自陣でのろのろとボールを回すだけだ。出しどころがなく、適当なロングボール。相手にとられ、縦パスの速攻であつという間にピンチになる。ハズミSCのサポーターからは、自滅にしか見えない。

十分、二十分と時が流れていく。開幕時の守備陣だったら、もう何点取られていたかも分からない。

「なんだか、もやもやするなあ」

近藤悠子はじれったそうだ。

「だな。こんなメンタルじゃ、入れ替え戦だって厳しいぞ」

木場直樹が呟く。最近木場直樹と一緒に観ることが多い。秋高鉄

二曰く木場直樹は可愛い娘が好きなのだ。もちろん奥さんがすぐそばでしっかり見張っている。

「入れ替え戦なんて行かないよ。絶対勝つんだから！」

「そうだな、すまん」

「どうせ、鎌田製鉄FCなんてこれから負け続けるんだから。ハズミは今日から連勝。入れ替え戦なんかしないよ」

予想なのか願望なのかはたからはさっぱり分らないいい方だが過去の結果を考えれば、誰もが願望としか受け取らないだろう。

自分たちの動きの悪さから、結果、相手から怒濤の攻撃を受けることとなり、ピンチに次ぐピンチで、一瞬たりとも気の休まる暇がない。

入れ替え戦が……降格が近づいてくる。ハズミSCのサポーターからすれば、胃に穴が空きそうなほどストレスのたまるゲーム内容だ。

しかし、守備陣の奮闘と神様の分けてくれた幸運とで、ゴールを割らせることだけはなんとか阻止し続けた。

そして、前半終了の笛が鳴った。

8

「じゃ、後半は6バックな。この前のやつやるから」

監督がとんでもないことを実にさりといつてのけたため、最初みんなの頭の上に疑問符が浮かんでいた。段々とみんなの顔が蒼白になっていった。

「点取らなきゃいけないのに、そんな……駄目ですよ」

田中英二がキャプテンとしての任務を果たす。殿の乱心を止めなければ。

「馬鹿、攻撃的6バックだよ。この前練習で何度かやってみただろ。とにかく全体をコンパクトにすること、DFもボランチも全員FWになったつもりでやること。いうことはそれだけだ」

「あれ、単なる遊びでしょうー！」

「最初はな。ただ、行けそうなことを実感した。……驚かせてやれ。面白い試合になるぞ」

別にメンバーを代表してではないが、田中英二は深いため息をついた。

ながーく息を吐いたと思うと、今度は深く息を吸い込んだ。

ながーく息を吐いたと思うと、今度は深く息を吸い込んだ。

「みんなもやれ。ほら、吐いて……」

田中は全員に何度も深呼吸をさせた。田中はいつの間にかにんまりとした笑みを浮かべている。それを見ているうちに、みんなの顔にも笑みが浮かんできた。そして、誰からともなく声をあげて笑いだした。

「こうなったらさ、楽しむしかねえよな。がちがちしてちゃ楽しめねえからな。……勝てるかどうかなんて、誰にも分からん。相手だって頑張っているんだし、サッカーってそういうもんだし。今日も失点するかもしれない。でも最後までボールを追いかけて、ゴールを目指そうぜ。もし今日負けたって、入れ替え戦に勝ちやいいだけだ。もし落ちても、強くなって上がってくればいい。……みんな一緒にさ。そんだけのこった」

超高校級として騒がれた過去のある元Jリーガーの、いわば社会人リーグ残留宣言であった。移籍先だつてあるだろうに、しかしこれが彼なりのキャプテンとしての責任の取り方だった。

みんな無言でキャプテンの顔を見つめていた。前半開始前とは、あきらかに選手達の目の輝きが違っていた。

9

主審が手を上げる。後半開始の笛が鳴った。

ハズミSCは、後半と同時に選手交代を行った。

高山田優斗OUT。

水田恭助IN。

センターサークルでボールを持ったエアーズ和歌山のFWが、ま

ず後ろにボールを戻す。おいかけるハズミSCの轟。どのサッカーの試合でも共通の、平凡な始まり方。しかし思いのほか激しい轟のプレスに、エアーズ和歌山のMFは焦り、ボールを足下におさめる際にもたついてしまう。一気に轟が間合いを詰めるが、相手の焦って蹴ったボールは運悪く轟に当たって大きく飛んで行き、タツチラインを割ってしまう。エアーズ和歌山は、すぐさまスローイン。ほとんど一直線上に並んでいるようなハズミSC守備陣の中から、岡崎健吾が巧みに飛び出しカットした。そして前線へ大きくフィード。ハイボールを処理しようとしたエアーズ和歌山のDFに、ボールだけをを見て走り寄ってきた轟がぶつかって倒れてしまう。主審は轟に近寄り、イエローカードを出した。

「ああもう。……だいたいなによ、あのハズミのディフェンスは。ボランチが引き過ぎて、6バックじゃん。ボランチの位置に、司令塔の英二がいるよ。点取らなきゃいけないのに、ガチガチに守り固めちゃって、なに考えてんの？」

近藤悠子はもどかしそうに叫ぶ。いらいらしてしまって、タオルマフラーを引っ張ったり縮めたりと意味のない行動をとってしまっている。

「あの監督、酒飲み話を本当にやっちゃまうとは。……悠子ちゃん、まあみてな。勝負の結果はそりや神様だってわかんねえけど、面白いものが見られるぜ」

「いわれなくなつて最後の最後まで観るわよ」

しかしやはり悠子にはなにを考えての布陣なのかが分からない。面白けりやいいってものじゃない。

隣で風子は両手を組んで、祈るような気持ちで観ている。

両サポーターの必死の声援がピッチ上の選手達に届く。

エアーズ和歌山の七番、羅田圭一がボールを持った。JFL屈指のドリブラーだ。ドリブルの速度はさほどでもないが、とにかく器用で簡単にはボールを奪われない。ハズミのほぼフラットに並んだDF六人のうち、二人がさっと飛び出して取り囲み、ボールを奪お

うとする。羅田は自分を追い抜いていく味方の動きに反応して、ヒールでハズミSC側へ軽く蹴り出した。しかし、そのパスはエアーズ和歌山には渡らなかった。残るハズミSCのDF陣に奪われたのだ。ヨントスから秋高鉄二にボールが渡る。そして鉄二から、やや自陣に戻り気味だったFW有村耕平に。

田中英二は片手を高く上げた。

ハズミSC、反撃の狼煙だった。

その直後、観客席、そして相手チームの選手は信じられない光景を目にする。

ハズミSCのDF選手六人全員のオーバーラップ。前方の味方を追い抜き、駆け上がる。

DFにボールが渡ると、FW、MFはややバランスを取り後方へ。瞬く間に、DFと、FW、MFとが完全に入れ替わった。

観客席にどよめき起きた。

「テツ！」

近藤悠子は叫んだ。

完全にマークする相手を見失ったエアーズ和歌山の選手達。秋高鉄二がパスと見せかけたフェイントでDFをかわし、一気にドリブル。ペナルティエリア内に入る。相手GKと一対一だ。GKは飛び出しスライディング気味にボールを奪った。鉄二は足を払われ、宙を舞い、地に落ちた。

主審の笛が鳴った。

ハズミサポーターからブーイングが起こる。

だがこれは、PKだろう。得点機会阻止だ。ハズミのサポーター、選手達の胸は高鳴った。

しかし、結果は予期せぬものだった。

倒された鉄二にイエローカードが出されたのだ。

シミュレーション。PKを貰うためにわざと倒れたという主審の判定だ。

ハズミSCのサポーターから、壮絶なブーイングが起こる。

「わざとなら、ああまで痛そうな顔しねえよ、テツは器用な演技の
できるタイプじゃねえ」

鉄二は腰をさすりながら、自陣に戻っていく。

ハズミSCのポジションは全て元にもどっている。

エアーズ和歌山GKがキックし、ゲーム再開だ。

6バックの一人、友井芳樹が絶妙な勘と経験で落下点を予測、相手FWのほうが大柄だというのに、しっかり相手のゴールキックを奪った。地に立ったまま、落ち着いて頭で田中へとパス。田中は胸でトラップした。

田中と轟とでボールをキープしている間に、再びDF全員がオーバーラップ。さきほどと比べれば対応されてしまっているが、やはりマークのズレにより混乱している。その守備の間を縫って、ボランチの位置にまで下がったセンターFWの轟が飛び出し、友井芳樹とのワンツースで相手を買わし、シュート。エアーズ和歌山のキーパーは反応出来ない。しかし、ボールは惜しくも枠の上へと飛んで行った。

だんだんとエアーズ和歌山の攻撃陣が薄くなってきた。いや、守備陣が厚くなってきたのだ。ハズミSCに点を取られたチームはまだまだどこにもない、スコアレスドローならばまだいいが、もしも点をとられたら……そんな気持ちが大きく影響してしまっているのかも知れない。いつのまにか、前半のハズミSCのように、全く楽しんでいなさそうなサッカーをしてしまっている。

反面、躍動感にあふれるのはハズミSCである。

自陣に引きこもる相手に、ハズミSCは波状攻撃で何度もエアーズ和歌山ゴールを脅かす。

自陣深くボールを回す相手に、DF全員オーバーラップは全く効果がないし、ハズミSCだって体力消耗する、しかも失点のリスクが大きすぎる。サッカーというよりは、曲芸の類だ。正攻法で優位に戦えるのならば、それが一番良いのだ。このように相手を自陣に押し込めてしまうこと、それこそが監督の狙いだった。作戦は、見

事に的中したといえる。

しかし相手のゴールはかたく、なかなかこじ開けることが出来ない。怒濤の攻めを見せるほど、相手はより自分の殻に閉じこもってしまう。

刻々と時間が流れて行く。

そんな中、ハズミSCに二つの悲劇が起きた。

まず、友井芳樹の負傷退場。レッドカードでもおかしくないような羅田圭一の悪質なファールに見えたが、それはサポーターの臍原目というものだろうか。羅田にはイエローカードが出されただけだった。

交代要員として、渡辺輝彦が入った。朴訥とした雰囲気、風子が入っている選手だ。

数分後、二つ目の悲劇が起こる。

エアーズ和歌山のFWと岡崎健吾が接触した。互いに上空のボールだけを見てしまい、相手に気づかなかったのだ。二人ともピッチ上に倒れ込んだ。

主審の笛が鳴った。倒れている二人に近寄ってきた。主審はためらわず、岡崎健吾に向けてレッドカードを出した。

客席がいつせいに爆発した。

納得いかない、というゼスチャーで主審に詰め寄るヨントス。今度はヨントスにイエローカードが出された。

「これがレッドで、さっきの友井に怪我させたのがイエロー？ わけわかんない！ その前だってテツのシュミレーションとるし。なんかむこう、選手が十二人もいるよ！ 審判、敵だ！」

十一対十、悠子にいわせると十二対十でゲームが再開した。

結局、ハズミSCは防戦一方に回らざるを得なかった。

田中は、なにやら大きな身振りで味方を励ましている。「六枚が五枚になっただけ、気にしない気にしない」とでもいつているように見える。しかし、十一対十だ、大きく影響するに決まっている。しかも、Jリーグでも通用しそうなDF選手を、レッドカードによ

る一発退場と負傷退場とにより、一気に二人も失ってしまったのだ。エアーズ和歌山は水を得た魚のように、完全に息を吹き返した。今度はハズミSCが相手の怒涛の攻撃に耐える番だった。我慢しながらも、なんとかチャンスをつかがうしかない。

一点でも取られたら終わりだ。

そして、一点も取れなくても終わりなのだ。

○ ○のまま刻々と時間が過ぎていく。

ついに、後半ロスタイムに入った。

ロスタイムは三分。

鉄二、田中、轟、とボールが渡る。さらに轟は田中とのワンツいで、するりと抜け出した。オフサイドはない！ 独走する轟。相手GKと一対一。しかし、相手ゴールとの角度が急なため、切り返し、そしてペナルティエリアに入り込んだ。その瞬間、後からおいする相手に背中を突き飛ばされ、倒された。転がった。

主審の笛が鳴った。

轟はとくに足を傷めたふうでもなく、すぐ立ち上がった。

主審が駆け寄ってきた。

馬鹿、演技しろ、痛がれ！ ハズミSCの他の選手、サポーターのほとんどがそんな表情をしていた。

この主審だし、またシュミレーションの判定か。

ハズミSCの選手もサポーターも、みんな落胆の表情だった。

案の定、イエローカードが……

しかしカードは、エアーズ和歌山の選手に向けられた。

ハズミSCのPKだ……

ハズミSCのサポーターはどっと沸いた。

耐えに耐え、ついにチャンスが巡ってきたのだ。

今期、初めて得たPKだ。

もう後半ロスタイム。これを決めれば、勝ちほぼ決まったようなものだ。

キッカーはキャプテンである田中英二。ボールをセットする。

得点は、PKでもなんでもいい。これを決められれば、呪縛から解放される。きっとチームは変わる。たとえ今日、鎌田製鉄FCが勝ち、ハズミSCの入れ替え戦が決まろうと、そんなことは関係ない。きっとハズミSCは勝ってJFLに残留してくれる。

しんと静まり返る中、主審の短い笛の音が響いた。

田中は胸の前で十字を切った。

田中はボールにゆっくり歩み寄った。

蹴った。

右上隅を狙う勢いのあるシュート、GKが反応して横っ飛びをす
るが間に合わない。

しかしボールは枠の外側をかすめて、ゴールラインを割って飛んで
いってしまった。

PKを外した……

一斉に落胆の声をあげるサポーター達。

選手もがつくり肩を落とし自陣に戻っていく。

エアーズ和歌山GKのゴールキックを渡辺輝彦と羅田圭一が空中
で奪い合った。こぼれたボールにヨントスが駆け寄る。エアーズ和
歌山が迫って来る。ヨントスの蹴ったボールは、エアーズ和歌山の
選手の足に当たりタッチラインから飛び出した。ハズミSCボール
だ。与那嶺怜二が、力ない足取りでボールに向かった。

死刑宣告を受けた囚人が刻々と死刑の瞬間を待つような、そんな
どんよりとした雰囲気ハズミSCの選手にもサポーターの間にも
流れていた。

いつの間にか、サポーターも応援をやめて静まり返ってしまった
ている。

「まだ時間ある！ 走れえ！」

風子は立ち上がり、スタジアム全体に轟くような大声で叫んだ。
すっかり静まり返って、死刑宣告を待つばかりであったサポータ
ー達、そして選手までもが、きょんとした顔で風子のほうを見て
いた。

「怜二！ こつちだ」

鉄二の叫び声。

与那嶺怜二は鉄二にボールを投げた。鉄二は胸でトラップ、素早く反転し、ドリブルで駆け上がる。あまりの勢いに、エアーズ和歌山は慌てて三人がかりでマークにつく。鉄二はあっさりとボールを離れた。田中英二が駆け上がってきていたのを察し、パスをしたのだ。

主審は時計を見ている。タイムアップ寸前だ。

田中英二は水田恭助とのワンツーで突破をはかった。しかし、相手DFにスライディングクリアされる。クリアボールは与那嶺怜二に当たりコーナーのほうへ転がって行ってしまふ。ゴールラインを割ってしまったら相手のゴールキックに変わってしまう。おそらくそれを蹴った瞬間に試合終了だ。しかしまさにボールがゴールラインを割ろうとしたその瞬間、なんと鉄二が追いついた。ボールを止めずに、ダイレクトにクロスを上げる。いや、クロスとはいえないような、精度の低いキックだ。ゴールの方向には向かっていても、誰も味方がいなければ意味がない。しかも、ボールは低く速く、誰にも反応が出来なかった。

いや、反応している選手が一人いた、田中英二だ。和歌山DFのマークをするりとかいくぐり、飛び出していた。まるで鉄二のこの弾道のクロスを予想していたかのように。

慌ててエアーズ和歌山のGKが飛び出そうとする。

地面に落ちようとしているボールを目掛け、田中英二はまるで競泳選手のスタートのように頭から突っ込んだ。

選手達の動きが止まった。

観客席も、誰も口を開くものがなく、収容人数二千五百人のスタジアムは誰もいないかのようにがらんと静かであった。

いま起きたことに、みな目を疑っていた。

その静寂を風子が打ち破った。風子は足の骨折の痛みも忘れて、立ち上がった。叫んでいた。両手を高くあげ、叫んでいた。それに

呼応するかのように、一瞬にして歓声が爆発、スタジアムは強烈な熱気の渦に包まれた。

主審が高く手をあげ、試合終了の笛を吹いた。しかし誰の耳にも届いてはいないようだった。

空は秋晴れ。

雲一つない澄み渡った青空だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1386f/>

じょいふる

2010年10月8日15時50分発行